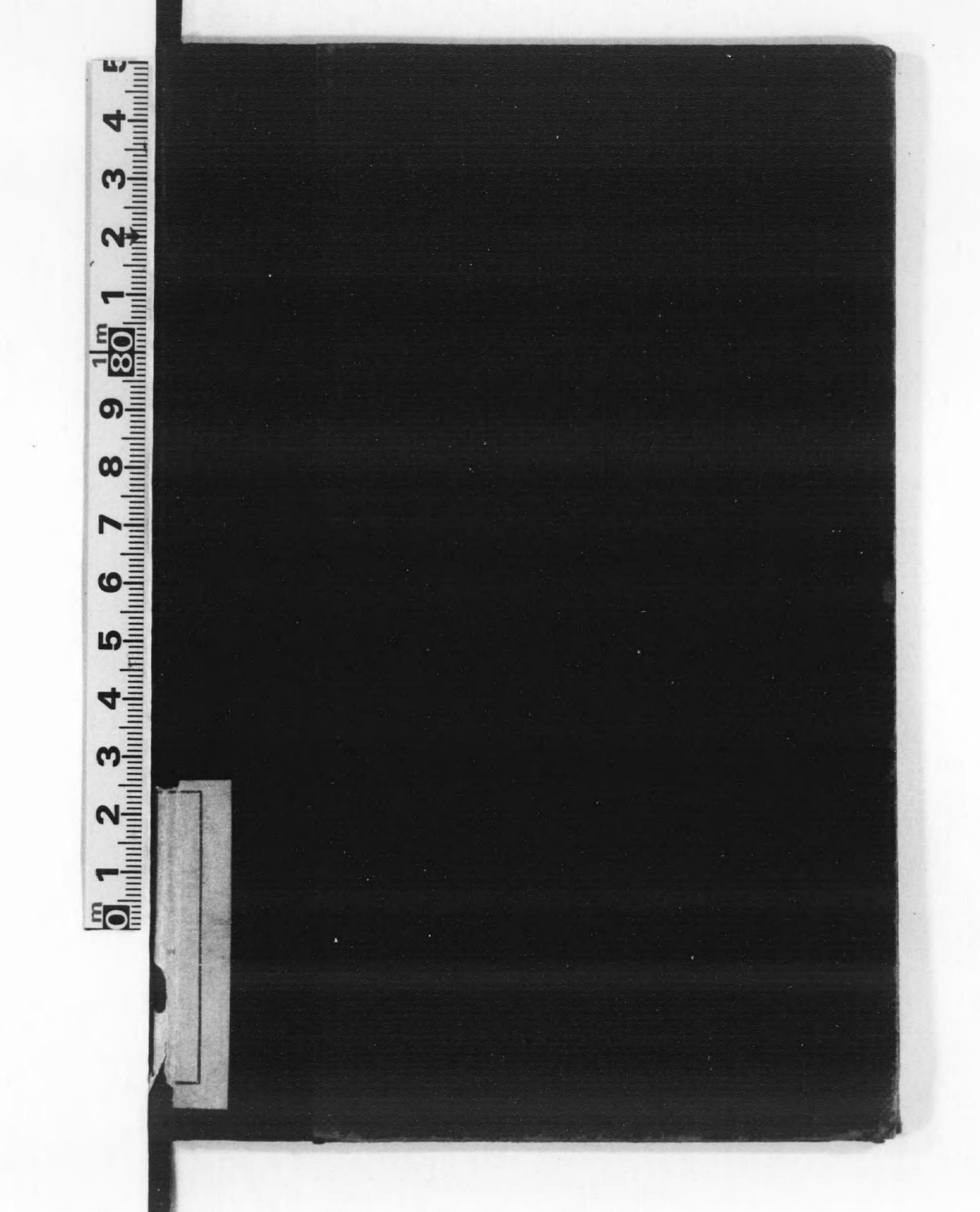
# 人人





William Shakespeare



Charles Lamb, aged 23,

## WORLD'S CLASSICS IN ENGLISH

908 E(10)

# TALES

FROM

## SHAKESPEARE

BY

CHARLES AND MARY LAMB

WITH TRANSLATION AND NOTES

BY

Y. MINEO



TALES

FROM

SHAKESPEARE

YR

CHARLES AND MAIRY LAMB

WITH TRANSLATION AND NOTES

YZ

Y. MINEO

#### はしかき

一體私は平素から泰西文學の名著と云はるくもの 1 對譯に多少の註を添へた様なものが安價に普及される事を希望して來た一人である。

明治の末期から大正にかけて泰西文學が翻譯によつて盛に我國に紹介された。英米のものも勿論相當に數多くあるが、歐洲大陸のもので英語に翻譯されたものを更に日本文に重譯された様なものが實に夥しい數に上つてゐる。之等は文學としての紹介であるから英語の素養なき讀者又は其の素養はあつても本文が手にはいらぬ讀者などの爲めに泰西文學の主要なものに親しましめる事、少くも其の內容を知らしむる事に多大の效績のあった事は云ふ迄もない。

たいさらした場合讀者の恐る」處は其翻譯文學が果して原文 に忠實に譯されて居るかどうかである。語學の素養なきものは 翻譯を信頼して讀むより外致し方がないが、相當英文を讀みこ なす力のある讀者なら、既に定評ある譯者の文は格別として、 隨分其處に不定も伴ふ次第である。對譯物になると此の不安は 可なり減ぜられる。讀者の範圍は限定さる」にしても對譯なる が故に譯者はかりそめに筆を下ろす事は出來ない。

斯うした意味に於て泰西名著が英文の正確なる對譯によつて

普く紹介せられる事は誠に意義のある事と思はれる。

扨て、チャールズ、ラムは十九世紀初期の英國文壇に活躍した 人で、ロンドンに生れ、ロンドンに住み、ロンドンで死んだ生 粹の都人士である。彼の散文は極めて輕妙で、殊に「エリア隨筆 集」(Essays of Elia) の如きは英國文壇を通じての大傑作であ る。酒脱な文章の内に嚴肅な洞察が包まれて居り、漫文の影に 人情の機微を潜ませてゐる。本書に撰んだ四篇の物語は「ラム のシェイクスピア」として知られてゐるも」の中から抜いたもの である。英國に於ては「ラムのシェイクスピア」といへば聖書の次 に普く知られて居る本だと云うても差支ない位に、各家庭に於 て若い人たちの爲めに一本を備へて置くと云ふ程のものであ る。物語作家としてチャールズは非凡の技倆を持つて居たので あるが、實は此の「沙翁物語」は彼と彼の姉メァリ、ラム (Mary Lamb) との合著である。William Godwin といふ人の依囑を 受けて Juvenile Library (少年叢書)に加へる爲めに書いたも のである。彼が當時支那に居た友人の Manning に與へた手紙 の中に近況を報じて、「メァリは沙翁の劇二十篇を少年の爲めに 物語風に書き直してゐる。旣に The Tempest, Winter's Tale, Midsummer Night, Much Ado, Two Gentlemen of Verona, Cymbeline. の六篇を書き上げた。今は Merchant of Venice を執筆中である。予は Othello と Macbeth とを書いた。 猶悲 劇の方は全部自分がやる積りである。予は此の著述が若い人た ちに喜ばれる事と思ふ。又君は姉のメデリが中々手際よくやつ

たと思ふであらう。云々」と書いて居るに見ても解る通り、二 十篇のうち悲劇六篇をチャールズが執筆し他は皆メッリの筆であ る。併し「沙翁物語」には其の表題紙にも序文の中にもメッリ の名は出て居ない。是は恐らく其名を出さぬ事がメテリの希望 であつたのであらう。本書に添へて置いた原著者(チャールズ) の序文にもある通り、二人が此物語に筆を染めた當初の目的は 沙翁原作の各篇の本筋を明確に傳へる事にあるので、本筋の進 展に絕對に必要でない挿話や人物性格の描寫は是を省略してゐ る。併しさうしたうちにも沙翁原作の獨特な語法に讀者を幾分 でも親しませる爲めに、沙翁の原文を其儘に或は幾分の改變を 加へて是を挿入し、出來る丈け原文の香味を出さうと努力した 點が窺はれるのである。元來複雑な原作の筋をば其の技葉を切 り落として巧に其要點を捉へ、清新にして趣味ある名文を以て すらすらと敍し去つた兩人の技倆は驚くべきものがある。少年 少女を讀者として物した此の作が廣く世の愛讀する處となつて 沙翁原作の聲價と共に將來何時までも其光を失はぬであらうと 考へられるのは故なき事ではない。

本書に採錄した四篇の內最初の二篇即ち「ハムレット物語」。と「オセロ物語」は其原文はチャールズ、ラムの筆であり、後の二篇「ヴェニスの商人」及び「暴風物語」はメァリ、ラムの筆である。前二篇は悲劇であつて後の二篇よりも原文が嚴肅壯重に書いてあるが故に、是を和文に移す際にも幾分其の氣持を持つて臨んだ積りである。

**猶又卷頭に添へた「Stradford-on-Avon の全景」は沙翁の** 生地 Avon 河畔の Stradford 町で、ロンドンの西北百十哩 の地である。沙翁の遺骸は其妻 Ann Hathaway の遺骸と共に 此地の教會堂内陣に埋葬されてある。

又"Hamlet and Horatio"はハムレット原作五幕自の墓地の場面で、十九世紀初半の佛蘭西の有名な畫家ド、ラ、クロワ (Delacroix) の作の複寫である。此の畫家は文學上の大作から 畫題をとつて居るので知られてゐる。ハムレトの他にマクベス 及びゲーテのフアウストがある。

The state of the second st

TO A - DETERMINE TO A STREET AND A STREET AN

ASSESSED AND DESTRUCTION OF SECURITIES

. Link to be and a to be a to

THE RESERVE OF THE PROPERTY OF

THE REPORT OF THE PARTY OF THE PARTY OF THE PARTY.

AND DESIGNATION OF STREET OF STREET

CONTRACTOR OF THE STREET

昭和二年十一月

譯註者

一人人工二十二年 日日 日日日 西西西西西

#### Charles Lamb の年表

- 1775-—二月十日 London, Temple, Crown-Office Row に 生る。
- 1782—1789——英國 Public Schools の一つ Christ's Hospital に在學、其間後年の詩人 Coleridge と親交を結ぶ。
- 1791 秋、南海會社 (The South Sea House) に入社。此當時の思出は社名を題とし Essays of Elia の中に收む。
- 1792—東印度會社 (The East India House) に社員となり、爾後 33 年間在勤す。入社前後は父母及姉 Mary Lamb と共に London, Holborn, Little Queen Street に住む。姉と好んで英文學殊に Shakespeare を始め エリザベス朝の文學を讀む。
- 1796——九月廿二日 既に幾分精神異狀の徴を示して居た姉 Mary が突然の發作に母を刺殺す。
- 1799 父死す。一時救護院に收容されたる姉は弟 Charles の手に預けらる。當時の住居は London, Pentonville, Chapel Street で、彼は誠心誠意を以て姉 Mary を保護し、其爲めには如何なる犠牲をも惜まぬ決心をなす。Mary 亦其慰安に心靜まり、協和互助の圓滿なる家庭生活を續けたるは英文學史に殘る美談である。
- 1801——既に文人と交り文學に親める Charles は此年丑慕物の悲劇 John Woodvil を出す。同年姉弟は懐しき Temple の Mitre Court Buildings に移る。
- 1807 姉弟共著にて Tales from Shakespeare をものす。

- 1808 The Adventures of Ulysses を出す。少年讀者の為め Homer の Odyssey を解説したるもの。同年また16,17 世紀の英國劇の研究によりて成れる The Specimens of English Dramatists Who Lived about the Time of Shakespeare を出版す。
- 1809—Poetry for Children を發表す。姉 Mary との合著 である。此年兩人は Inner Temple Lane へ轉居。 1817—更に Drury Lane, Russell Street に轉す。
- 1818——從來折々定期物に發表したる作品を輯め The Works of Charles Lamb と題して刊行す。
- 1820—The London Magazine が發刊せられて之に Charles は Elia なる署名の下に Essays を連續寄稿す。多數の讀者を引きつけたる名文で、彼の名聲を確立したるもの。 Elia なる Pen name は南海會社に勤めたる頃の同僚の名を借りたるものとある。
- 1823 如上の Essays を輯めて單行本とし Essays of Elia として刊行す。
- 1825—東印度會社を引退し 450 封度の年金を受くる事となる。
- 1833— Edmonton に移る。同年 The Last Essays of Elia を出す。
- 1834——十二月二十七日死去す。 遺骸は Edmonton の墓地に 埋葬さる。
- 1847--- 五月二十日 Mary は St. John's Wood, Alpha Road に死去し、弟 Charles の墓地に埋葬さる。

中心一道中心一个一个一个一个

#### THE AUTHOR'S PREFACE

the state of the s

The authors prefore

The following Tales are meant to be submitted to the young reader as an introduction to the study of Shakespeare, for which purpose his words are used whenever it seemed possible to bring them in; and in whatever has been added to give them the regular form of a connected story, diligent care has been taken to select such words as might least interrupt the effect of the beautiful English tongue in which he wrote: therefore words introduced into our language since his time, have been, as far as possible, avoided.

In those Tales which have been taken from the Tragedies, the young readers will perceive, when they come to see the source from which these stories are derived, that Shakespeare's own words, with little alteration, recur very frequently in the narrative as well as in the dialogue; but in those made from the Comedies, the writers found themselves scarcely ever able to turn his words into the narrative form: therefore it is feared, that, in them, dialogue has been made use of too frequently for young people not accustomed to the dramatic form of writing. But this fault, if it be a fault, has been caused by an earnest wish to give as much of Shakespeare's own words as possible; and if the "He said" and "She said," the

question and the reply, should sometimes seem tedious to their young ears, they must pardon it, because it was the only way in which could be given to them a few hints and little foretastes of the great pleasure which awaits them in their elder years, when they come to the rich treasures from which these small and valueless coins are extracted, pretending to no other merit than as faint and inperfect stamps of Shakespeare's matchless image. Faint and imperfect images they must be called, because the beauty of his language is too frequently destroyed by the necessity of changing many of his excellent words into words far less expressive of his true sense, to make it read something like prose; and even in some places where his blank verse is given unaltered, as hoping, from its simple plainness, to cheat the young readers into the belief that they are reading prose, yet still, his language being transplanted from its own natural soil and wild poetic garden, it must want much of its native beauty.

It has been wished to make these Tales easy reading for very young children. To the utmost of their ability the writers have constantly kept this in mind; but the subjects of most of them made this a very difficult task. It was no easy matter to give the histories of men and women in terms familiar to the apprehension of a very young mind.

When time, and leave of judicious friends, shall put the original plays into the readers' hands, they will discover, in such of them as are here abridged (not to mention almost as many more which are left untouched), many surprising events, and turns of fortune, which, for their infinite variety, could not be contained in this little book, besides a world of sprightly and cheerful characters, both men and women, the humor of which it was feared would be lost if it were attempted to reduce the length of them.

What these Tales shall have been to the young readers, that and much more it is the writers' wish that the true Plays of Shakespeare may prove to them in older years,—enrichers of the fancy, strengtheners of virtue, a withdrawing from all selfish and mercenary thoughts, a lesson of all sweet and honorable thoughts and actions, to teach courtesy, benignity, generosity, humanity; for of examples teaching these virtues his pages are full.

Mark the second of the second

AND THE PROPERTY OF THE PROPER

AND DESCRIPTION OF THE PERSON OF THE PERSON

SOUTH OF THE PARTY OF THE PARTY

Military and the second second

#### 原著者の序文

A militarical and the state of the later whereas we want to be send a state of the

次の物語集は若い讀者の方々がシェイクスピアの作を研究せらる」階梯として諸君の閱讀に供する考で書いたものである。 共の爲めに原本にある言葉を用いて好ささうな場合には成る文 け是を用いる事にした。連絡ある物語の一定の様式を各編に備 へる爲めの苦心もさる事ながら、シェイクスピアが用ひた美し い英語の感じを害はぬ様な言葉を用いようと大分苦勞をしたも のである。故に彼れの時代以後に英語に入つて來た様な言葉は 相なるべく避けた次第である。

では、シェイクスピア自身の言葉が除り變へられずに對話に 於ても地の文に於ても屢々出て來る事に氣付かる」であらう。 併し喜劇物語の方では吾等筆者はシェイクスピアの言葉を地の 文に書き直すのが容易でない事を知つたのである。從つて戲曲 の書き振りに目慣れぬお若い諸君は喜劇の方に對話が除り多く 用いられてゐると思はる」であらう。併し此の缺點——と云は どであるが——はシェイクスピア自身の言葉を出來る文け多く 容れたいといふ切な望みからである、若し「彼が云つた」とか 「彼女が云つた」とか或は問や答といふ様なものが時に讀者の 耳に物憂く感ぜられるとすれば、共點は許して戴かなくてはな らぬ。と云ふのは諸君がも少し年をとられてから此等の小さい 價値のない物語集の原本である沙翁の立派な作を讀まれる時に 一一此物語集は沙翁の比類のない面影に較べて淡い不完全な押 印以上の價値あるものと思はぬが—一糖で諸君が得られる大な る職党を豫め香はす暗示を與ふる道としては此の書き振りを用いる外はないのである。此の物語は淡い不完全な映像だと申す譯は、此を散文らしきものにする爲めに沙翁の多くの勝れた言葉遣ひを其真の意味と大分遠い言葉に書き變へねばならぬ大第で、沙翁の言葉の妙味が始終害はれてゐるからである。スラスラと書き流して若い讀者等に散文を讀んで居るのだと思はせようとして沙翁の無韻詩を其儘に取つてある樣な箇所でも、沙翁の言語が其の根づいた土地や自然の詩の畠から引拔いて植え換へられたのであるから、餘程其の本來の麗質を缺いて仕舞つてあるに相違ないのである。

此物語集は少年諸君に讀み易いものにする事を念として書かれたものである。筆者の力で出來る丈け終始此事を心懸けて來た。併し物語中には此れが中々容易でない様な筋のものが大分ある。若い人たちの頭に親しみのある言葉で成人した男女の來歴を述べたりする事は容易く出來る事ではない。

時が到來し又賢明な先生や父兄の方々も適當と考へて若い讀者諸君に原本をお讀ませする様な事になつたら、諸君は此處に抄略して述べてある物語中に(手を付けない物語が猶ほ少なからすある事は申す迄もないが)原作の驚くべき出來事や、運命の轉換などにして餘りに變通自在な爲めに此の小冊子に織り込み得ない様なものが澤山あり、更にまた快活陽氣な男女幾多の人物にして作の長さを切り縮めようとすれば、斯うした人物の氣分が失はれてしまうだらうと思はれる様なものが大分ある事を知らる」であらう。

・此の物語集が若い讀者に與ふる所のものや猶ほ夫れ以上の事までも諸君が成人せられた曉に沙翁の立派な原作が是れを證明して異れるであらうと物語の筆者は願うて居るのである。即ち

沙翁の原作は想像力を豊富にするものであり、徳性を强固にするものであり、一切の私慾射利の心を去らせるものであり、高 尚優美な思想行為を教ふる教訓で禮譲、仁慈、寬容、情誼等の 諸徳を說くものである事がお解りになるであらう。實に此等の 徳性を教ふる範例は沙翁の作中隨所に充ちて居るのである。

チャールズ・ラム

- 5 巻 江 の 2 本 2 記 計画 正 4

SEGGENST JASEG BERGELINGEN GERMENTER

1860年11月11日 18月中央10月日 18日本市中央10日本市中央10日本市中央10日本市中央10日本日本市中央10日本市大学11日本

到1956年 3至4 引导点部的内部的内部内。由于 9 人的语程器等

#### CONTENTS

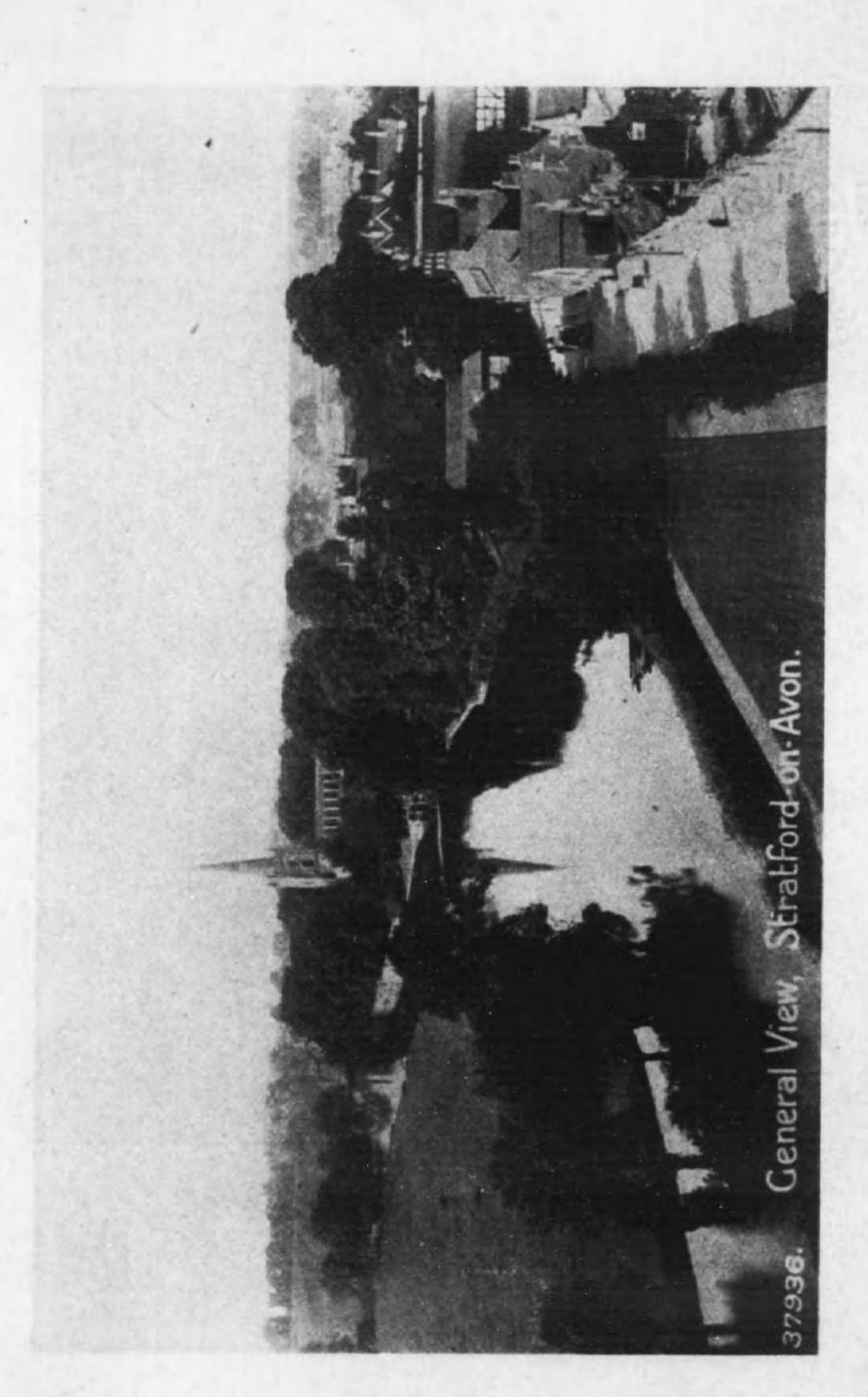
| CHAMLET, PRINCE OF DENMARK |  |  |  |  | PAGE<br>2 |
|----------------------------|--|--|--|--|-----------|
| OTHELLO                    |  |  |  |  | 54        |
| THE MERCHANT OF VENICE     |  |  |  |  | 98        |
| THE TEMPEST                |  |  |  |  | 142       |

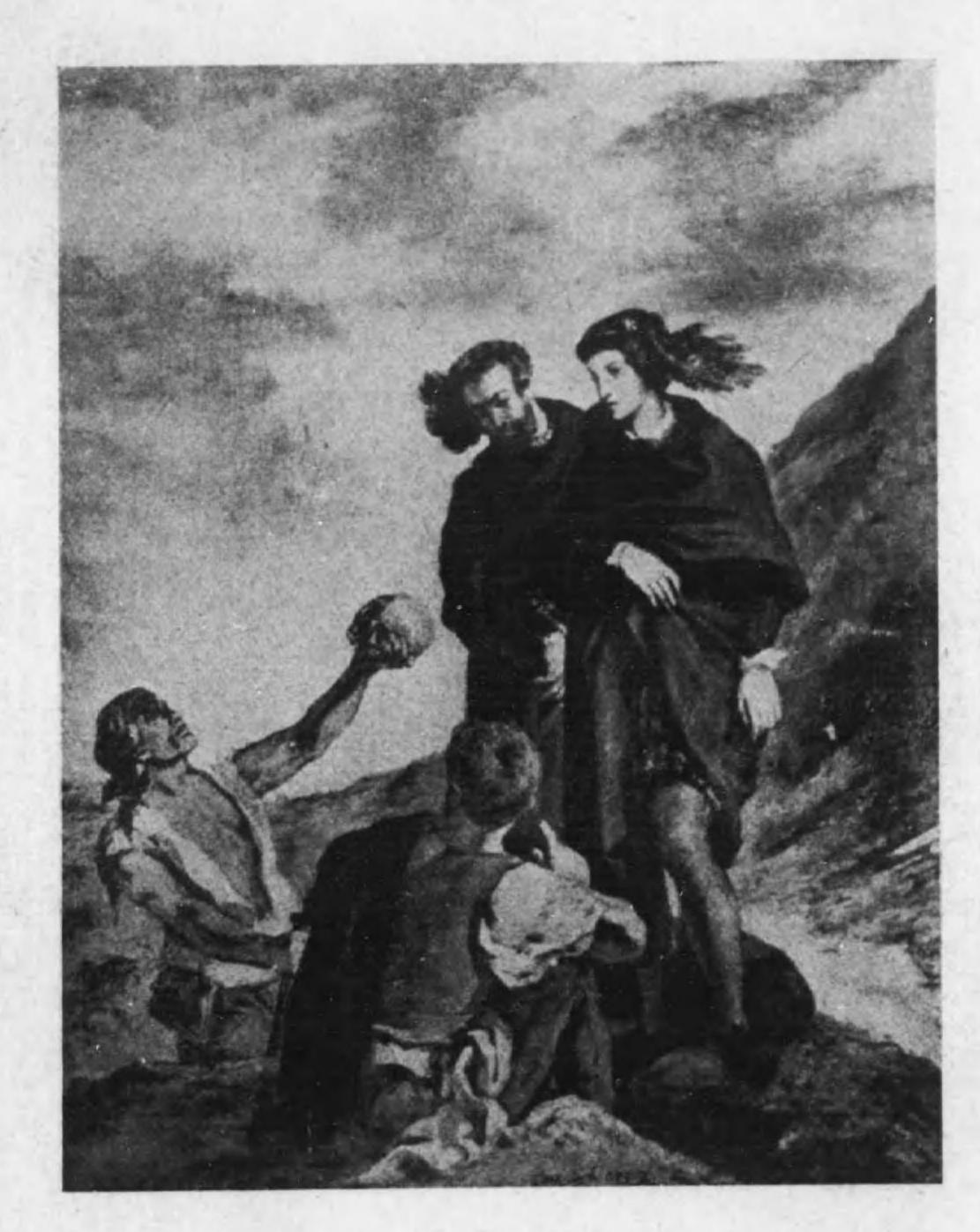
E CONTENTS - CONTENTS

-DESTRUCTED

DE LEBERTANT DE VENTE BET

TALL TENEDUCE TO THE SECOND TO





homeet and horotice



FROM

SHAKESPEARE

### HAMLET, PRINCE OF DENMARK

by the sudden death of King Hamlet, in less than two months after his death married his brother Claudius, which was noted by all people at the time for a strange act of indiscretion, or unfeelingness, or worse; for this Claudius did no ways resemble her late husband in the qualities of his person or his mind, but was as contemptible in outward appearance as he was base and unworthy in disposition; and suspicions did not fail to arise in the minds of some that he had privately made away with his brother, the late king, with the view of marrying his widow and ascending the throne of Denmark, to the exclusion of young Hamlet, the son of the buried king, and lawful successor to the throne.

2. But upon no one did this unadvised action of the queen make such impression as upon this young prince, who loved and venerated the memory of his dead father almost to idolatry; and being of a nice sense of honour, and a most exquisite practiser of

## **丁抹王子ハムレット物語**

1. 丁抹の王妃ガートルードは、ハムレット王が遠かに世を去られた爲めに寡婦となられたが、其後二箇月も經ぬうちに、王弟クロッディアスと再婚するに至つたので、當時國民は何人も之を不謹慎、不人情、否不倫とさへ云ふべき奇怪な振舞と見做さぬものはなかつた、抑々此のクロッディアスは其人物腦力何れより見るも故ハムレット王に似もやらず、氣質の賤しく價値なきと等しく外貌も亦醜劣であつた、故に彼が故王の嫡子にして正統なる王位繼承者たる王子ハムレットを差措いて嫂の入夫となつて丁抹の王位に登らうとの非望を懐いて、竊かに兄たる先王を殺害したのだといふ疑惑を抱懐するものが起つて來たのは必然である。

2. さりながら王妃のか」る思慮なき振舞に、若王子ハムレット程に胸潰る」思ひをしたものは無かつた、彼は亡き父を追憶して敬愛すること、始と偶像を禮拜する程で、廉恥の念强く率先して何處迄も正義を行ふの士であつたから、母后ガートル

make away with 滅ぼす (destroy), 殺害する (murder). with the view of = with a view to = for the purpose of.

I. Gertrude ['go:tru:d] 丁抹の王妃。
Claudius ['klo:diəs] 丁抹の國王ハムレットの弟。
worse 不謹慎、不人情、よりも更に悪い事、妻として貞操觀念の無い事、不倫。
no ways=not at a'l.
did not fail to arise 必然起つた。

<sup>2.</sup> unadvised unwise, indistreet, not prudent.
almost to idolatry 殆んど偶像崇拜と云ふ位の程度まで。
nice delicate, 働きが微妙、鋭敏な。
exquisite exact, acute, fastidious. 疑り固まった。

propriety himself, did sorely take to heart this unworthy conduct of his mother Gertrude, insomuch that, between grief for his father's death and shame for his mother's marriage, this young prince was overclouded with a deep melancholy, and lost all his mirth and all his good looks; all his customary pleasure in books forsook him; his princely exercises and sports, proper to his youth, were no longer acceptable; he grew weary of the world, which seemed to him an unweeded garden, where all the wholesome flowers were choked up, and nothing but weeds could thrive. Not that the prospect of exclusion from the throne, his lawful inheritance, weighed so much upon his spirits, though that, to a young and high-minded prince, was a bitter wound and a sore indignity; but what so galled him, and took away all his cheerful spirits, was, that his mother had shown herself so forgetful to his father's memory; and such a father! who had been to her so loving and so gentle a husband! And then she always appeared as loving and obedient a wife to him, and would hang upon him as if her affection grew to him; and now, within two months, or as it seemed to young Hamlet, less than two months, she had married again, married his uncle, her dear husband's brother, in itself a highly improper and unlawful marriage, from the nearness of relationship, but made much more so by the indecent haste with

sorely take to heart ひどく胸を傷める。
insomuch that [as] adv....した位に、...程までに。
proper to his youth 活氣ある若さに似つかはしい。
weary of = tired of Cf. tired with.

ードの此の忌はしき所業を見て傷く心に悲しむだのであつた。 父の他界を悼む悲痛の念と、母の再婚を慚づる羞恥の情とに苦 められて、煮み子ハムレットは深き憂鬱に閉され、嬉しと思ふ 心も無くなり、若やぎたる顔色も全く褪せ去つて、日頃好める 讀書の樂しみも今は昔の事、青春の溢る」王子に應はしき各種 の運動競技も今は心進まず、世を憂きものと觀じては、仇し草 一つなしと見し花園も、麗はしき花は盡く凋落し唯だ雑草のみ 生ひ茂ると見えて、生を厭はしくさへ思ひ做した。」さりとて彼 の當然繼承すべき王位を奪はれたと見るが故に、かくも重く心 鬱すると云ふのではない。元より行末長く志操高き王子の身と して之は辛き心の傷手であり、悲しき侮辱ではあつた。彼の憂 とする處、快活な元氣を失ひし所以のものは、亡き父の靈に對 する母の心なき仕打ちであつた。彼の尊き父、母にはいとも愛 深く柔しき夫であつたものを、母とても亦常日頃妻として父に は愛を傾け從順と見え、父を思ふの念日々募り行くかと見ゆる までに父を慕ひしものを、然も僅かに二箇月、若き王子には二 箇月も經たぬと見る間に、再婚沙汰、而も相手は叔父、愛とし き夫の弟であつた。關係のかくも近きより見て共事自體が殊に 不義不法の婚姻であつたが、風りがましくも遊だしげに取り行 はれ、而も王者の素質なき男を選んで王座に据る寝所の友とな

indignity = humiliation. 侮辱。
galled vexed, harassed.
in itself 其事自體, 本來。
more so = more improper and unlawful

which it was concluded, and the unkingly character of the man whom she had chosen to be the partner of her throne and bed. This it was which, more than the loss of ten kingdoms, dashed the spirits and brought a cloud over the mind of this honourable young prince.

3. In vain was all that his mother Gertrude or the king could do to contrive to divert him; he still appeared in court in a suit of deep black, as mourning for the king his father's death, which mode of dress he had never laid aside, not even in compliment to his mother upon the day she was married, nor could he be brought to join in any of the festivities or rejoicings of that, as appeared to him, disgraceful day.

What mostly troubled him was an uncertainty about the manner of his father's death. It was given out by Claudius that a serpent had stung him, but young Hamlet had shrewd suspicions that Claudius himself was the serpent: in plain English, that he had murdered him for his crown and that the serpent who stung his father did now sit on the throne.

How far he was right in this conjecture, and what he ought to think of his mother—how far she was privy to this murder, and whether by her consent or knowledge, or without, it came to pass—were the doubts which continually harassed and distracted him.

したは正に不倫の上塗りであつた。かくてこそ王土十箇國を失ふたるにも増して高潔なる我が王子ハムレットの心を挫き、憂愁の雲もて閉ざしたのである。

3. 母后ガートルードと新王とは手を盡して王子の心を慰めようと勉めたに係はらず甲斐が無かつた。王子は宮中に出づるに倚ほ父王の死を悼む要服を身につけ、母の婚筵の日に母への挨拶も黑衣のまゝで、片時も之を離さず、猶又(王子の眼には) 取づかしき其日には一切の賀式饗筵に列する氣持にはなれなかった。

王子が心中甚だ合點の行かぬ事に覺えたのは、父の死樣のさだかならぬ事であつた。クロッディアスの發表せる處によれば、 先王は毒蛇に刺されて死したとある。併し王子は叔父こそ其の毒蛇ならめと慧眼にも疑念を懐いた。卒直に申さば、叔父は王冠を得んが爲めに父王を殺害したのであり、父を刺したと云ふ毒蛇は即ち今や王座を占むる叔父其人であると思ふに至つた。」

斯かる推測の那邊まで當れるや、母后に就いては何う考ふべきや、何の邊まで此の殺害の秘密を與り知るや、母が同意し心得ての事か否か、疑惑はとつ追ひつ王子の心を思ひ惱ましめるに至つた。

<sup>3.</sup> In valn was all = All was in vain.
disgraceful shameful, dishonourable 不面目な。
an uncertainty about...死因の不確な事。
It was given out that と云ふ振れ出し、發表であった。
for his crown 王冠を得んが脅め。

did now sit now sat よりも意味强き emphatic form. 現に今王座を 占めて居たのである。

privy to in the secret of, acquainted with the secret of. 秘密にあづかるo without without her consent or knowledge.

It came to pass it happened と云ふ事になった。

4. A rumour had reached the ear of young Hamlet that an apparition, exactly resembling the dead king his father, had been seen by the soldiers upon watch on the platform before the palace at midnight for two or three nights successively. The figure came constantly clad in the same suit of armour from head to foot which the dead king was known to have worn, and they who saw it (Hamlet's bosom friend Horatio was one) agreed in their testimony as to the time and manner of its appearance: that it came just as the clock struck twelve; that it looked pale, with a face more of sorrow than of anger; that its beard was grisly, and the colour a sable silvered, as they had seen it in his life-time; that it made no answer when they spoke to it, yet once they thought it lifted up its head and addressed itself to motion as if it were about to speak, but in that moment the morning cock crew, and it shrunk in haste away and vanished out of their sight.

5. The young prince, strangely amazed at their relation, which was too consistent and agreeing with itself to disbelieve, concluded that it was his father's ghost which they had seen, and determined to take his watch with the soldiers that night that he might have a chance of seeing it: for he reasoned with himself that such an appearance did not come for nothing, but that the ghost had something to impart,/and though it had

4. 王子はふと噂を耳にしてゐた、故王に全くよく似たる亡 をが二夜三夜續いて、北滿の刻に王城前の臺地に立つを、夜警 の武官が親しく目撃したとの事である。亡靈は先王が召された といさ」か違はぬ物の具もていつも全身を包んでゐた、ハムレットの親 友ホレィシオ・以下之を目撃せる人々は口を揃へて亡靈 出現の時と有様につき證言を與へた。日はく「恰も夜の十二時を打つ頃現はれ出で、憤怒の形想といふより寧ろ憂愁の面持に 色青褪め、顎鬢は氣味悪く故王生前にありしが儘に銀白に黑を交へてゐた。話し掛けても答はなく、只一度頭を擡げ、物云はんとするかの素振りに唇を動かした。が折柄廃を告ぐる鶏の鳴く音に、遠しげに身を引き、忽ち姿をかき消した」と語り出でたのである。

5. 若王子は皆の述ぶる處の、誠に存節を合せた如く一致して、筋の通れるに一點疑念を挿む餘地なきを、不思議な事もあるものと驚きはしたが、皆の見たるは正しく父の亡靈に相違なしとして、其夜衞士等と共に、見張に立ち亡靈と相見ゆる折を得んと思ひ定めた。王子は心に斯かる變怪の現はる」は、たい事ではない、告げ知らすべき事あつて、今までは默して居て

<sup>4.</sup> Horatio [ho'rei/iou]
sable silvered sable は黑色、故に銀白に黑を交へた色。
addressed itself prepared itself.
cock crew 夜明けの近きを示す、亡靈退散の時期。

<sup>5.</sup> reasoned with himself 自分の心に道理を押して考へる。 come for nothing 理由なく現はれる。 something to impart 何か告げ知らすべき事。

been silent hitherto, yet it would speak to him. And he waited with impatience for the coming of night.

When night came, he took his stand with Horatio and Marcellus, one of the guard, upon the platform-where this apparition was accustomed to walk; and it being a cold night, and the air unusually raw and nipping, Hamlet and Horatio and their companion fell into some talk about the coldness of the night, which was suddenly broken off by Horatio announcing that the ghost was coming.

6. At the sight of his father's spirit, Hamlett was struck with a sudden surprise and fear. He at first called upon the angels and heavenly ministers to defend them, for he knew not whether it were a good spirit or bad, whether it came for good or for evil; but he gradually assumed more courage, and his father (as it seemed to him) looked upon him so piteously, and as it were desiring to have conversation with him, and did in all respects appear so like himself as he was when he lived, that Hamlet could not help addressing him: he called him by his name, "Hamlet, King, Father!" and conjured him that he would tell the reason why he had left his grave, where they had seen him quietly bestowed, to come again and visit the earth and the moonlight, and besought him that he would let them

も、我れには必ず告げるであらうと思ひ做した。かくて夜となるを今や遅しと待つたのである。

夜となれば王子はホレィシオ。と衞士の一人マアセラスと共に、かの亡靈の幾夜か歩みしといふ臺地に見張をした。折から夜は冷えわたり、夜氣は異様に肌に痛きまでにしみる樣覺えたので、ハムレット、ホレィシオ。其他の者どもは、夜の寒さを語り合ふたが、遠かにホレィシオ。が亡靈が現はれた、と告ぐる一言に一同聲を呑んだ。

6. ハムレットは亡父の靈にまのあたり接して、にはかに驚きと怖れの心に襲はれた。先づ彼れは天使を呼び、神明に祈って吾等を護り給へと呼ばはつた。此れが果して善鑒か惡靈かを知らず又其出現が福を下さん爲めか、禍を下さん爲めかも明かで無かつたからである。併し次第に勇氣を起して見てあれば、亡父(と彼れには見えたのであるが)は如何にも悲しげなる面持で王子を見つめ、言葉を交はし度〈思ふものゝ如き素振りをなし、何れの點より見るも、ありし頃の父王其のま」と見えたので、ハムレットは言葉をかけて見んとの心抑へ難く、終に其名を呼んで「ハムレット王よ、父君よ」と聲をかけ「何故に安らかに鎭めまゐらせし墓所を迷ひ出でゝ浮世を訪づれ、月影を」

Marcellus [ma:'selas]

raw and nipping raw 生まの、生肉を聯想する様な冷たい、nipping = biting 咬む様な。

<sup>6.</sup> heavenly ministers ministers = servants 天の御使(みつかひ)。

in all respects どの點から見ても。
could not help addressing=could not but address 默って居られな
かった。

bestowed placed. M. E. stowers, to put in a place.

know if there was anything which they could do to give peace to his spirit. And the ghost beckoned to Hamlet that he should go with him to some more removed place, where they might be alone; and Horatio and Marcellus would have dissuaded the young prince from following it, for they feared lest it should be some evil spirit, who would tempt him to the neighbouring sea or to the top of some dreadful cliff, and there put on some horrible shape which might deprive the prince of his reason. But their counsels and entreaties could not alter Hamlet's determination, who cared too little about life to fear the losing of it; and as to his soul, he said, what could the spirit do to that, being a thing immortal as itself? And he felt as hardy as a lion, and bursting from them, who did all they could to hold him, he followed whithersoever the spirit led

<sup>2</sup>7. And when they were alone together, the spirit broke silence and told him that he was the ghost of Hamlet, his father, who had been cruelly murdered, and he told the manner of it; that it was done by his own brother Claudius, Hamlet's uncle, as Hamlet had already but too much suspected, for the hope of succeeding to his bed and crown. That as he was sleeping

慕ひ給ふぞ、御魂を慰めまゐらすに我力にて何を爲すべきか告げ給へ」と願ふが如く云ひ放つた。其時亡靈は王子を聴いて、何處ぞもつと離れた人なき處へ行つて、二人のみで語らうといはぬ許りであつた。ホレルシオ・、マーセラスは共に、此亡靈が萬一思靈であつて、王子を誘ふて近くの海か、さなくば恐ろしき嚴壁の頂上へ連れ行き、そこにて物凄き異形と現じ、王子の正氣を奪ふも知れねば、必ず行き給ふなと諫めた。併し王子は浮世に未練なく、命を置すを意に介せぬ爲め、皆の諫めも願ひも、王子の決意を翻へさすに由もなかつた。「我が魂は、かの亡靈とひとしく、不滅のものゆゑ彼は何を爲し得ようぞ」と王子は云うた。かくて王子は獅子の如く剛然と奮ひ立ち、引き止めんと死力を盡す人々の手を振り放つて、亡靈の導くまくに從ひ去つた。

7. 他に人なき處へ來れば、亡靈は先づ口を切つて、無殘に 就 逆されたる父ハムレット王の亡靈なる旨を告げ、當時の模様 を語つて日はく、「そなたが旣に甚だしく疑念を懷き居る通り、 血を分けし弟クロッディアスが、我が妃と王冠とを受け繼がん望 もて予を弑逆したのである。常々午後の慣はしとして、花園に

意とせわ。

hardy = brave, bold.

whithersoever the spirit led him 何處でも亡靈の連れて行く處へ。

7. broke silence 口を切って語り出した。
but too much suspected (遺憾な事ながら)甚(ひと)く疑念を懐く Cf.
I know it but too well. (遺憾ながら) 能く知つてゐる。

to give peace to his spirit 鑑を慰めまるらす。
they might be alone 亡靈とハムレットの二人だけになる。
dissuade....from following 從いて行くなと諫める Cf. persuade....
to follow 從いて行けと勧める。
put on some horrible shape 物凄い異形を現する。

who cared...losing of it 浮世に未練がなくて生命を失ふ事を Care about 大きわぬ、配中にない

in his garden, his custom always in the afternoon, his treasonous brother stole upon him in his sleep, and poured the juice of poisonous henbane into his ears, which has such an antipathy to the life of man, that swift as quicksilver it courses through all the veins of the body, baking up the blood, and spreading a crust-like leprosy all over the the skin. Thus, sleeping, by a brother's hand he was cut off at once from his crown, his queen, and his life; and he adjured Hamlet, if he did ever his dear father love, that he would revenge his foul murder.) And the ghost lamented to his son that his mother should so fall off from virtue as to prove false to the wedded love of her first husband and to marry his murderer; but he cautioned Hamlet, howsoever he proceeded in his revenge against his wicked uncle, by no means to act any violence against the person of his mother, but to leave her to Heaven and to the stings and thorns of conscience.

And Hamlet promised to observe the ghost's direc-

8. And when Hamlet was left alone, he took up a solemn resolution, that all he had in his memory, all that he had ever learned by books or observation, should be instantly forgotten by him, and nothing live in his brain but the memory of what the ghost had told him and had enjoined him to do. And Hamlet

午睡の折柄、腹黒き弟が眠れる我が傍らに忍びより、毒草の汁液を我が耳に注ぎたるが、此は人命を害ふものにして、水銀の如く忽ち體内の血管を循ぐり、血液を爛らし、皮膚一面に癩病の如く 痂 を生ぜしむるものである。かくて弟の爲め眠れる儘に、王冠も、后も、命をさへも悉く奪ひ去られたのである。そなたにして若し此身を父とし愛としむならば、此の非道なる 弑虐の仇を報いよ」と願ふばかりの言葉であつた。更に亡靈は 王子の母后が先きの夫との千代かけし愛情を裏ぎり、弑逆者に 妻とし見ゆる程に、操を忘れ果てし悲しさよ、と王子にかき 口 むだっ 佐いた。併し王子は非道なる叔父に對しては如何なる報復の手だな とるにせよ、母の身には決して危害を加へる事なく、天の御心に任せ、良心の苛責を受けしめよ、と注意の言葉を添へた。 こ、でハムレットが、何事もその指圖に從ふ旨約束したので、亡靈はかき消えてしまつた。

8. かくてハムレットは獨り取り残されるや、堅く心に決する處があつた、卽ち彼の記憶に止る一切のもの、從來書籍より乃至觀察により學び得たる一切を、直ちに忘れ去り、腦中には只管亡靈の告げたる言葉、願ひの筋をのみ記憶に止めんと誓ったのである。 ハムレットはまた今宵の對話の模様は悉く之を親

henbane (héabein) 茄科の有毒植物、其種子を絞りて得たる汁液は 人體に害ありと云ふっ

to prove false to the wedded love 夫の愛を仇にする to prove false=

to betray.

to leave her to heaven = to leave her to God's mercy 母の身體に手を下さず神の御心に任せよ。

related the particulars of the conversation which had passed to none but his dear friend Horatio; and he enjoined both to him and Marcellus the strictest secrecy as to what they had seen that night.

The terror which the sight of the ghost had left upon the senses of Hamlet, he being weak and dispirited before, almost unhinged his mind, and drove him beside his reason. And he, fearing that it would continue to have this effect, which might subject him to observation and set his uncle upon his guard, if he suspected that he was meditating anything against him, or that Hamlet really knew more of his father's death than he professed took up a strange resolution from that time to counterfeit as if he were really and truly mad; thinking that he would be less an object of suspicion when his uncle should believe him incapable of any serious project, and that his real perturbation of mind would be best covered and pass concealed under a disguise of pretended lunacy.

9. From this time Hamlet affected a certain wildness and strangeness in his apparel, his speech, and behaviour, and did so excellently counterfeit the madman that the king and queen were both deceived, and not thinking his grief for his father's death a sufficient cause to produce such a distemper, for they knew not of the appearance of the ghost, they concluded that his malady

友ホレィシオッに打明けたが他には何人にも漏らさなかつた。な ほ今宵目撃した事は構へて他言せぬ様にとホレィシオッ、マアセ ラスの兩人に論した。

スムレットは従来氣弱く、心の沈んだ人であつたから、亡靈を目のあたり見て恐ろしさが感覺に残り、殆んど心亂れて物狂ほしき氣持になつた。そこで彼は、もし斯うした狀態が機骸するなら、叔父は自分の様子に眼をつけるであらうし、又自分が何事か豊策してゐることや、父の死因に就て叔父の説明せる以上の消息を事實心得てゐると氣付くならば、叔父は警戒するであらうと思うて、此の上は眞實氣狂ひのそぶりを裝ふて行かうといふ、世にも不思議な決心をした、さすれば叔父は、自分がとても眞面目な計畫は立て得ぬと、思ひ込んで、疑惑の眼を向ける事が少くなるであらうし、我が心の悶えも、我れから装ふた狂氣の假面に、巧に蔽はれ悟られずに濟むであらうと思うたからである。

9. これから以後ハムレットは、服装や言語行動に、何となく粗野な常規を逸した風を裝ひ、寔に巧に狂人の振舞ひをしたので王も后も共に欺かれ、幽靈出現の件を知らぬが故に、王子狂亂の原因が主に、亡父の死を傷む心にありとは知らぬ王と王妃は、戀の病だと決め込んで、病の本體をつきとめたりと思惟

<sup>8.</sup> unhinged his mind 心の調子を狂はす。 unhinge = disorder 蝶瘡を外す。
subject him to observation 叔父をしてハムレットに注意の眼

を向けさす。

<sup>9.</sup> counterfeit [kauntəfil] 真似る、見せかける。

was love, and they thought they had found out the object.

Before Hamlet fell into the melancholy way which has been related, he had dearly loved a fair maid called Ophelia, the daughter of Polonius, the king's chief counsellor in affairs of state. He had sent her letters and rings, and made many tenders of his affection to her, and importuned her with love in honourable fashion, and she had given belief to his vows and importunities. But the melancholy which he fell into latterly had made him neglect her, and from the time he conceived the projects of counterfeiting madness, he affected to treat her with unkindness and a sort of rudeness; but she, good lady, rather than reproach him for being false to her, persuaded herself that it was nothing but the disease in his mind, and no settled unkindness, which had made him less observant of her than formerly; and she compared the faculties of his once noble mind and excellent understanding, impaired as they were with the deep melancholy that oppressed him, to sweet bells which in themselves are capable of most exquiste music, but when jangled out of tune or rudely handled, produce only a harsh and unpleasing sound.

10. Though the rough business which Hamlet had in hand, the revenging of his father's death upon his

Ophelia [O'fi:ljə].

Folonius [pə'lounjəs] 常侍輔弼の侍従長。
tenders=tender words, offers. 愛の籠もつた申込。

した。ハムレットが憂鬱症に罹つた事は嚢に述べたが其れ以前より王の國務顧問長ボロ,ニアスの愛嬢オフィリアといふ美姫を深くも愛して居た。彼は姫に幾度か手紙指環などを送り、思ひを籠めた言葉を述べたりして、慎みは忘れぬながらも切に彼女の愛を求めたので、姫も王子の誓言や口説を實あるものと信じてゐた。然るに近頃王子は憂欝にかりつて姫を疎んじ、狂人を装はんと思ひ構へてからは、姫に接する態度が冷淡にやや突惶食である様にした。然し姫は心躍しくて王子の情なき素振りに怨言を云ふ事もなく、却つて、心に病氣あるが爲めで以前よりも我身を疎んする鬼心あるが爲めでは無いと思ひ諦らめ、更にまた王子の氣高かりし心、勝れし分別の力も、深き憂鬱に閉されては、本來絶妙なる樂音を發し得る妙へなる鐘鈴も、調予様す打ち鳴らされ或は粗暴な扱ひを受くれば、耳障りな不快の狂音を放つにも比すべきであると考へた。

10. ハムレットが今や取り懸れる荒仕事、即ち弑逆者に對し亡父の復讐をするの企では、求愛の戯れ事をなすに適せず、今

in honourable fashion 身分に懸はしき悩みは忘れす。
no settled unkindness 元々からの不人情な性質からではない。
observant of her=kind, tender to her.
jangled out of tune 調子構はずがンガン打鳴らす。

murderer, did not suit with the playful state of courtship, or admit of the society of so idle a passion as love now seemed to him, yet it could not hinder but that soft thoughts of his Ophelia would come between; and in one of these moments, when he thought that his treatment of this gentle lady had been unreasonably harsh, he wrote her a letter full of wild starts of passion, and in extravagant terms, such as agreed with his supposed madness, but mixed with some gentle touches of affection, which could not but show to this honoured lady that a deep love for her yet lay at the bottom of his heart. He bade her to doubt the stars were fire, and to doubt that the sun did move, to doubt truth to be a liar, but never to doubt that he loved; with more of such extravagant phrases. This letter Ophelia dutifully showed to her father, and the old man thought himself bound to communicate it to the king and queen, who from that time supposed that the true cause of Hamlet's madness was love. And the queen wished that the good beauties of Ophelia might be the happy cause of his wildness, for so she hoped that her virtues might happily restore him to his accustomed way again, to both their honours.

11. But Hamlet's malady lay deeper than she supposed, or than could be so cured. His father's ghost, which he had seen, still haunted his imagination, and

な物情とも見ゆる戀愛三昧に耽る暇もないのであつたが、オフ ィリス愛としと思ふ心の起るを抑へるは流石に難かつた。そし て優しき姫を待遇ふ己が態度の、徒らに情なかりしと悔む折な ど、燃え立つ情火を筆に籠め、装ふ狂氣に應はしき常規を逸し た書振りに、併しさる中にもかの譽れ高き姫には王子の胸底に 身を思ふ深き愛の潜めりと見ゆる優しき情愛を交へて、文書き 送りなどした。諸星の火より成り、日輪の空かけ運るを疑ふも、 眞理を虚偽と思はんもそなたの意のま」よ、されど我が眞意は 夢々疑ふまじ、など」書き聯ね、或は之れにも増して、狂熱の 言辭を用ゐたりした。此の文をオフィリアは神妙に父に示した。 老父はまた是事を兩陛下に傳へる義務ありとして奏上したの で、其時より以來王も后も共に王子狂亂の眞因は戀にありと推 定するに至つた。また后は美徳備はるオフィリアの容姿が王子 狂氣の嬉しき原因なれかしと願うた。さすれば姫の麗はしき徳 の力もて、王子の狂態も治まり、二人の譽もいやまし榮ゆる事 と思うたのである。

11. 併しか」る推測と異りハムレットの病氣は其の根さし深くて、姫の愛もて癒さるべくもなかつたのである。故王の亡靈

<sup>10.</sup> full of wild starts of passion 燃え立つ情火を籠めたる。 starts=outbursts. touches of affection 愛のほのめき。

to both their honours 二人の榮譽(E2th)しいや高く、to は結果を表はす。

Cf. He was loved to his ruin. 愛せられたが身の詰り。

the sacred injunction to revenge his murder gave him no rest till it was accomplished. Every hour of delay seemed to him a sin and a violation of his father's commands. Yet how to compass the death of the king, surrounded as he constantly was with his guards, was no easy matter. Or if it had been, the presence of the queen, Hamlet's mother, who was generally with the king, was a restraint upon his purpose, which he could not break through. Besides, the very circumstance that the usurper was his mother's husband filled him with some remorse, and still blunted the edge of his purpose. The mere act of putting a fellow-creature to death was in itself odious and terrible to a disposition naturally so gentle as Hamlet's was. His very melancholy, and the dejection of spirits he had so long been in, produced an irresoluteness and wavering of purpose, which kept him from proceeding to extremities. Moreover, he could not help having some scruples upon his mind whether the spirit which he had seen was indeed his father, or whether it might not be the devil, who, he had heard, has power to take any form he pleases, and who might have assumed his father's shape only to take advantage of his weakness and his melancholy, to drive him to the doing of so desperate an act as murder. And he determined that he would have more certain grounds to go upon than a vision, or apparition, which might be a delusion.

と會見してより其面影今尚ほ心頭を往來し、弑逆の仇を報ぜよ との犯し難き訓諭は、是を果さぬうちは安き心を與へなかつ た。一時も是を躊躇ふ間は罪を重ね行く心地し、亡父の嚴命を 遊にする思がした。併し常に警護の武士に衛らるる國王を如 何にして死に致すべきか」。寔に容易の業ではなかつた。假令易 くとも母なる后の概ね君側に侍るは、目的遂行の上に除け難き 心の妨げであつた。のみならず王位纂奪の叔父が現在母御の良 人たるの事實が中々に苦痛の情を起させ、決心の双を鈍らすの であつた。同じき人間ひとりを死に處するの所業は失れ文けを 思うても、性來溫雅なる王子の氣質には忌はしくもまた恐ろし き事であつた。彼の憂鬱、長い間の癖となれる意氣の銷沈の爲 めに斷乎たる決意も出來す、心搖らぎて最後の行動に出づる覺 悟もなし得なかつた。刺へ心に疑惑起りて、王子の見参せる 亡靈が果して父なるか、或は世に云ふ思ふ儘なる姿をとるの魔 力を有する惡魔にて、單に王子の心弱さと憂欝とに乘じ、殺害 の血腥き行爲を行はしむる爲めかくは父の容姿をとつて現はれ たものに非るかなど、思ひ惑はずに居られなかつた。かくて王 子は幻影にせよ亡靈にせよ心の迷ひかも知れぬに依つて、更に 確かなる據るべき根據を得んものと決意した。

<sup>11.</sup> restraint upon his purpose 目的途行の差障り。 remorse 普通は為した行為に對する悔恨、此處では為さればならぬ

心の苦惱。

to take advantage of に乗する。

12. While he was in this irresolute mind, there came to the court certain players in whom Hamlet formerly used to take delight, and particularly to hear one of them speak a tragical speech, describing the death of old Priam, King of Troy, with the grief of Hecuba, his queen. Hamlet welcomed his old friends, the players, and remembering how that speech had formerly given him pleasure, requested the player to repeat it, which he did in so lively a manner, setting forth the cruel murder of the feeble old king, with the destruction of his people and city by fire, and the mad grief of the old queen, running barefoot up and down the palace, with a poor clout upon that head where a crown had been, and with nothing but a blanket upon her loins, snatched up in haste, where she had worn a royal robe, that not only it drew tears from all that stood by, who thought they saw the real scene, so livelily was it represented, but even the player himself delivered it with a broken voice and real tears.

13. This put Hamlet upon thinking, if that player could so work himself up to passion by a mere fictitious speech, to weep for one that he had never seen, for Hecuba, that had been dead so many hundred years, how dull was he, who having a real motive and cue

13. これにより王子は自ら思ふに、かの俳優が單に作り話もて熱情を誘ひ、面識もなき幾百年の昔の皇后へキュバの爲めに淡を濺ぐに至る程ならば、此身は憤激の情を燃すべき、まことの動機きつかけを持ちながら、現在いとしき父王の殺害され

<sup>12.</sup> かくも心を決め兼ねてゐる折から、幾名かの俳優どもが 宮廷へ伺候した。是等は曾て王子が心を慰めし舊知にて、殊に 其一人がトロイの老王プライアムの薨去を王妃へキュバがいた く悲しむといふ悲劇の一段を誦するのに王子はよく耳を傾けた のであつた。」ハムレットは舊知なる俳優どもを喜び迎へ、曾て 其物語の愉快なりしを思ひ出で、同じ俳優に今一度是れを誦せ よと所望した。そこで彼は虚弱なる老王の無殘なる殺害の模樣 を舒べ、城市も市民も火に燒き滅ぼされた事、老妃は悲しみに 心亂れて王城を彼處此處と跣足にて驅け廻り、王冠を戴いた頭 上に今は粗末なる布片をつけ、女王の美服を纏ひし腰には、遠し く取り上げたる毛布一枚を卷いたのみの物狂しき様等を手に取 る如くに誦し出でたので、並み居る人々は、表現のかくも巧み な生ける光景を其儘に見る心地して淚を流したのみならす俳優 自らも聲を震はし淚を浮べて物語つた。

<sup>12.</sup> a tragical speech a speech from a tragedy 悲劇の一くさり。
Priam ['prasim] 希臘傳説に依る Troy の國王、Troy はダーダネルス海峡の附近にあり、希臘軍に園まるる事十年、大木馬に隱れたる希臘軍戰士の為城門開かれ Troy 終に落城、王 Priam は Pyrrhes に殺され妻 Hecuba は敵將の手に落つ、攻城十年目の出來事は Homer の名著 Iliad の主題なり。

which he did - he repeated the speech.
lively=vividly 質量を目の常り見る様に。
clout 布片。

<sup>13.</sup> cue 此の語は元來芝居の臺詞(せかぶ)渡しの最後の言葉、即ち次の 演者の登場發言のキッカケになる臺詞の末語を云ふのであるが、此 處では單に誘因の意味。

for passion, a real king and a dear father murdered, was yet so little moved, that his revenge all this while had seemed to have slept in dull and muddy forgetfulness! And while he meditated on actors and acting, and the powerful effects which a good play, represented to the life, has upon the spectator, he remembered the instance of some murderer, who, seeing a murder on the stage, was by the mere force of the scene and resemblance of circumstances so affected that on the spot he confessed the crime which he had committed. And he determined that these players should play something like the murder of his father before his uncle, and he would watch narrowly what effect it might have upon him, and from his looks he would be able to gather with more certainty if he were the murderer or not. To this effect he ordered a play to be prepared, to the representation of which he invited the king and queen.

The story of the play was of a murder done in Vienna upon a duke. The duke's name was Gonzago, his wife Baptista. The play showed how one Lucianus, a near relation to the duke, poisoned him in his garden for his estate, and how the murderer in a short time after got the love of Gonzago's wife.

14. At the presentation of this play the king, who

muddy=sluggish ドンヨリ停滞した忘却の狀態。 represented to the life 真に逼った演出の。

Cf. to be painted to the life 生き寫し。
on the spot 共揚で、即坐に、

しを知りながら、これまで復讐の心を見苦しくも打忘れ、眠れる様の心なさよと、自らを責めた。かくて王子は俳優と演技、真に迫れる演出法を用ゐたよき演劇の觀客に及ぼす有力な効果などに、思ひ至れる折から、ふと彼は、或る殺人者が、舞臺に殺害の場を見たが我が行為を自の當り見せらる心地して、深く動かされ、共場に己が罪惡を懺悔した例あるを思ひ起した。」そこで王子は叔父の面前に亡き父の弑逆に類した劇をば、俳優どもに演ぜしめ、そが如何なる影響を叔父に與ふるやを仔細に觀察して、其の面貌から果して叔父が弑逆者なるや否やを更に確實に推斷し得ようと思ひ定めた。此の爲めに王子は劇の用意を命じ、其の上演には王と母后とを招待した。

劇の筋は維納の一公爵が殺害せられた物語であつた。公爵は ゴンザ,ゴといひ、其妻はバプティスタと呼んだ。公の近親ル シ,ナスなるもの、財産を奪はん爲め、花園に公を毒害し、後 間もなく公爵夫人の愛をも得たといふ物語であつた。

14. 劇の上演に際してクロゥディアス王は、係蹄にかけらる」

something like と云つた様な何か(劇)。
narrowly 仔細に。
gather=infer, deduce. 推斷する。
to this effect 此の趣意で。
representation of which 劇の上演。
one Lucianus=one whose name was Lucianus.

did not know the trap which was laid for him, was present, with his queen and the whole court, Hamlet sitting attentively near him to observe his looks. The play began with a conversation between Gonzago and his wife, in which the lady made many protestations of love, and of never marrying a second husband if she should outlive Gonzago; wishing she might be accursed if she ever took a second husband, and adding that no woman ever did so but those wicked women who kill their first husbands. Hamlet observed the king, his uncle, change colour at this expression, and that it was as bad as wormwood both to him and to the queen. But when Lucianus, according to the story, came to poison Gonzago sleeping in the garden, the strong resemblance which it bore to his own wicked act upon the late king, his brother, whom he had poisoned in his garden, so struck upon the conscience of this usurper, that he was unable to sit out the rest of the play, but on a sudden calling for lights to his chamber, and affecting or partly feeling a sudden sickness, he abruptly left the theatre. The king being departed, the play was given over. Now Hamlet had seen enough to be satisfied that the words of the ghost were true, and no illusion; and, in a fit of gaiety, like that which comes

とも知らず、后と廷臣一同を率ねて臨場した。ハムレットは叔父の近くに坐して其の顔色を見んと注意意りなかつた。劇はゴンザ、ゴと其夫人との對話に始まつたが、夫人は喃々たる愛の證言を述べて、縱令夫に先だよる」とも二夫に見えざるべく、もし然る事あらば天罰の身に至るも心がらであり、再婚の婬婦はすべて、先夫を殺す毒婦である旨を述べ立てた。ハムレットは叔父王の顔色が此の科白と共に變り行き、聞く身の王と后には苦蓬を味ふ辛らさであるのを見てとつた。

劇は進んでルシュナスが花園に眠る公ゴンザュゴを毒害せんと忍び寄る場面となれば、王は血を別けし兄王を花園に殺害した己が非行といたくも似たる光景に、良心の苛責を受け、坐に堪へて劇の終まで見るに忍びず、遠に「部屋に燈火を持て」と命じ、突如心地惡しと云ひ出でたが、或は事實惡るくもあつたのであらう、あはたよしく劇の廣間を立ち去つた。王の退出と共に劇も中止せられた。今やハムレュトは此の有様に亡靈の言葉の眞であつて迷でなかつた事を滿足に思ひ、何か大きな疑惑

change colour 顔色を變へる。

as bad as wormwood にがよもぎを答める様な辛さ。

wormwood には辛らい屈辱、bitter mortification の意味がある。 His words are wormwood to me. 彼は僕に對して霧舌を弄する。

sit out 最後まで座に堪へる。

partly feeling 幾らか氣持が悪い。

in a fit of gaiety フィト浮かれ氣分になって、fit は發作。

<sup>14.</sup> the trap which was laid to lay a trap 係路(かな)をかける。 many protestations of love 自分の持つ愛情を色々の方法で言葉や 所作に示す事。

outlive = live longer than 生き残る、死におくれる。 be accursed 呪はれる、崇を受ける、天罰が下る。 did so = took a second husband.

over a man who suddenly has some great doubt or scruple resolved, he swore to Horatio that he would take the ghost's word for a thousand pounds. But before he could make up his resolution as to what measures of revenge he should take, now he was certainly informed that his uncle was his father's murderer, he was sent for by the queen, his mother, to a private conference in her closet.

15. It was by desire of the king that the queen sent for Hamlet, that she might signify to her son how much his late behaviour had displeased them both; and the king, wishing to know all that passed at that conference, and thinking that the too partial report of a mother might let slip some part of Hamlet's words, which it might much import the king to know, Polonius, the old counsellor of state, was ordered to plant himself behind the hangings in the queen's closet, where he might unseen hear all that passed. This artifice was particularly adapted to the disposition of Polonius, who was a man grown old in crooked maxims and policies of state, and delighted to get at the knowledge of matters in an indirect and cunning way.

Hamlet being come to his mother, she began to tax him in the roundest way with his actions and behaviour, and she told him that he had given great offence to の忽ちに 氷解して 喜ぶ人の如く、浮れ心 地に ホレィシオゥに向ひ、亡靈の言葉は實に千金の價値あるものと思ふ、など 1言ひ放つた。 併し叔父が父を殺害した下手人である事を確と知つて見れば採るべき復讐の方法は如何と思案を廻らす内に、寝室で内談を致したしと、母后よりの迎へに接した。

15. 后がハムレットを招いたのは王の意であつて王子の近來の行動が、いかばかり王夫婦に不快の念を起させたかを彼に知らしむる爲めであつた。王は内談の實際を知り度く思うたが、生みの母后の報告も、子を思ふ心に引かされて王子の言葉を云ひ洩らすこともあるべく、之れを知るは王の身に多大の関係あるやも知れぬと、顧問官なるポロッニアス翁に后の寢所の垂絹に隱れて、母子の物語を人知れず聞き取るやう命じた。斯うした仕事は、似非格言や國務の術策に老熟して他處ながら巧みに消息を攫むを得意とするポロッニアスの氣質には特に適して居たのであるのハムレットが母の許へ來るや、后は王子の行狀振舞を遠慮なく責め、そなたは父上の御氣色を大層損ぜられました

he was sent for 迎が來た。
private conference 秘密の會見、内談。

<sup>15.</sup> the too partial report of a mother 母后の報告も子を思ふ親心に引かされて (云ひ逸らしがあらう)。

too partial=partial to her son, taking her son's part too much.
which it might....to know which は know の目的語で Hamlet's words. it は to know which を表はす假の主語。

in crooked maxims=in deceitful precepts or principles 似非格言。 policies of state 老滑な國務の衝策。

to tax him in the roundest way with....王子を極く遠慮なく卒直に難する。 tax him with=charge him with.

his father, meaning the king his uncle, whom, because he had married her, she called Hamlet's father. Hamlet, sorely indignant that she should give so dear and honoured a name as father seemed to him to a wretch who was indeed no better than the murderer of his true father, with some sharpness replied, "Mother, you have much offended my father."

The queen said that was but an idle answer.

"As good as the question deserved," said Hamlet. The queen asked him if he had forgotten who it

was he was speaking to?

"Alas!" replied Hamlet, "I wish I could forget. You are the queen, your husband's brother's wife, and you are my mother. I wish you were not what you are."

"Nay, then," said the queen, "if you show me so little respect, I will set those to you that can speak," and was going to send the king or Polonius to him.

16. But Hamlet would not let her go, now he had her alone, till he had tried if his words could not bring her to some sense of her wicked life; and, taking her by the wrist, he held her fast, and made her sit down. She, affrighted at his earnest manner, and fearful lest in his lunacy he should do her some mischief, cried out, and a voice was heard from behind the hangings, "Help, help the queen!" which Hamlet hearing, and

ぞと、難じた。父上とは叔父國王を指したので、結婚により后は彼をハムレットの父上と呼んだのである。王子は事實父君の殺害者と擇ぶ處のない叔父なる惡漢を、父上などいふ、敬愛の意を籠めた名稱もて呼ぶのを、いたく腹立たしく思ひ、幾分語氣を荒立て」「母上、貴女こそ、父上の御機嫌をひどく、害せられたのです」と答へた。后はたわけた應答をなさるものかなと、王子を責むれば「御言葉に相應しい答です」と言い放つた。后が「そなたは誰れに物言うてゐるのか忘れたのであらう」と問ひつむれば、王子は答へて、あ」忘れられたら嬉しからうが、教立に対して在はし、夫君の弟の妻で在はします、其上貴女は私の母上です。さうでなければよいと思ふのですが」「さう、それまでに我身を輕視んで居らる」なら、口のきける人をそなたに向けませう」と后は國王乃至 ボロ。ニアスに來て費はうと去りかけた。

16. 然しハムレットは、今こそ母と二人限りなれば、己が言葉もて幾分なり母の非行を自覺せしめ得ぬものか試みる迄は、母を去らせまじ、と思うて、母の手頸を捕へ、確と母を抑へて坐に戻らせた。后は王子の態度がひどく真劔なのに恐れをなし、心狂へる餘りに身に危害を加へるのではないかと空恐ろし

with some sharpness 幾分語氣鏡く。 I wish I could forget 忘れられたら嬉しいが。 show me so little respect それ程に我身に敬意を持たわ。

<sup>16.</sup> lest in his lunacy he should do her a mischief 気が狂うて我身に危害を加へはせのかと。 mischief=injury.

verily thinking that it was the king himself there concealed, he drew his sword, and stabbed at the place where the voice came from, as he would have stabbed a rat that ran there, till the voice ceasing, he concluded the person to be dead. But when he dragged forth the body, it was not the king, but Polonius, the old officious counsellor, that had planted himself as a spy behind the hangings.

"Oh me!" exclaimed the queen, "what a rash and bloody deed you have done!"

"A bloody deed, mother," replied Hamlet, "but not so bad as yours, who killed a king and married his brother."

17. Hamlet had gone too far to leave off here. He was now in the humour to speak plainly to his mother, and he pursued it. And though the faults of parents are to be tenderly treated by their children, yet in the case of great crimes the son may have leave to speak even to his own mother with some harshness, so as that harshness is meant for her good, and to turn her from her wicked ways, and not done for the purpose of upbraiding. And now this virtuous prince did in moving terms represent to the queen the heinousness of her offence, in being so forgetful of the dead king his

く助けを呼んだ、すると垂絹の蔭に繋あつて、「助けよ助けよ、御后を!」と呼ぶものがあつた、ハムレットは是を聞いて、共處に身を蔽すは正しく國王であらうと思ひ定めて、劔を抜き、「鼠が居る、刺してやらう」と聲の聞えた邊りを衝いたが、それきり聲がせぬので、仇敵を仕留めたものと思ひ込んだ。併し死骸を惹き出し見れば、國王ではなくて、おせつかいな老顧問ボロッニアスで、垂絹の蔭に密値として潜んで居たのであった。

17. 此處まで云ふて仕舞つては早や打切る譯にも行かず、此上は明らさまに母に告げようといふ氣持になつて云ひ續けた。親の過失あるとき子の是れを見ること酷であつてはならぬが、もし大罪悪である場合、息子は生みの母と雖も、其の身の爲めを思ひ、母の非行を改めしむる心であり、徒らに誹謗を事とするのでなければ、幾分强硬な態度もて母を責むるも咎む

verily thinking 真實さう思うて。
as he would have stabbed a rat 鼠を刺した様な具合に。
officious = overkind おせつかいな。

<sup>17.</sup> Hamlet had gone too far to leave off here 此處までやっては もう引下がれぬ。

was now in the humour to speak 云って仕舞はうといふ氣になってぬた。

tenderly treated 好意を以て見る。
may have leave to speak 云うて差支へない。
heinousness = hetefulness, extreme wickedness。

father, as in so short a space of time to marry with his brother and reputed murderer: such an act as, after the vows which she had sworn to her first husband, was enough to make all vows of women suspected, and all virtue to be accounted hypocrisy, wedding contracts to be less than gamester's oaths, and religion to be a mockery and a mere form of words. He said she had done such a deed that the heavens blushed at it, and the earth was sick of her because of it. And he showed her two pictures, the one of the late king, her first husband, and the other of the present king, her second husband, and he bade her mark the difference: what a grace was on the brow of his father, how like a god he looked! the curls of Apollo, the forehead of Jupiter, the eye of Mars, and a posture like to Mercury newly alighted upon some heavenkissing hill! this man, he said, had been her husband. And then he showed her whom she had got in his stead: how like a blight or a mildew he looked, for so he had blasted his wholesome brother. And the

reputed murderer 弑虐の罪を犯したと云はるゝ人。
accounted = considered wedding contracts 結婚の誓約 contracts made at marriage.

gamester=gambler 賭博者。

mere form of words 言葉を羅列した形式一片のもの。

be sick of her 胸悪 思ふ、厭は! く思ふ。

Apollo, Jupiter, Mars, Mercury 羅馬神話に於て Apollo は詩歌音樂 を主宰する神、美は い curly locks を持つた青春其物の機な生氣 ある神と考へられてゐる。Jupiter 希臘名は Zeus と云の萬神の王 で、威容嚴かな美神、如何にも大神らしき高く秀麗な前額を持つ。

べきではない。されば有徳の王子ハムレットは、肺腑を衝く の言葉もて縷々母后を説き、亡き父君を忘れて、程經ぬうちに 弑逆の大罪を犯したと云はる、其弟と婚したは言語に絕する 非行であると責め、前夫に契り交はして置き乍ら、か」る振 舞に出づるは、凡ての女性の誓言をば信を置き難きものにし、 女の美徳も悉く偽善であつて、婚禮の誓約も賭博者の誓に劣る ものとなし、宗教も一個の真似事で言を羅列した形式一片のも のに過ぎぬものとすのである、斯くの如きは天も爲めに慚ぢ、 地も爲めに彼女を厭ふの行爲であると云ひ放つた。更に王子は 先夫たる故王の寫眞と、現在の王クロディヤスの寫眞とを取り 出し、是を較べて相違を御覽なさい、父上の額には高い品格が あつて厳容神の如くに見ゆるではないか。アメロの頭髪、ジュ ピタアの前額、マアスの眼、天を摩する山嶺に降り立てるマア キュリーにも似たる容姿、此の偉丈夫こそ曾ては母の夫君であ つた。然るに此の人に代へて母上が得たる夫は之れである。流 が すこや 石に健かなる兄王を枯死せしめた丈けあつて、樹木を枯ふ害蟲

Mars は軍神で敵を睥睨する鋭き眼光を有す。Mercury は messenger god で靴、帽子、杖、等に翅を有し走る事極めて迅速と云はるゝ神使である。

heaven-kissing 天空に觸れる程高い。 had been her husband 以前の夫。 blasted = blighted, c'estroyed.

queen was sore ashamed that he should so turn her eyes inward upon her soul, which she now saw so black and deformed. And he asked her how she could continue to live with this man, and be a wife to him who had murdered her first husband, and got the crown by as false means as a thief——And just as he spoke the ghost of his father, such as he was in his life-time, and such as he had lately seen it, entered the room, and Hamlet, in great terror, asked what it would have; and the ghost said that it came to remind him of the revenge he had promised, which Hamlet seemed to have forgot; and the ghost bade him speak to his mother, for the grief and terror she was in would else kill her. It then vanished, and was seen by none but Hamlet, neither could he, by pointing to where it stood, or by any description, make his mother perceive it, who was terribly frightened all this while to hear him conversing, as it seemed to her, with nothing, and she imputed it to the disorder of his mind.

18. But Hamlet begged her not to flatter her wicked soul in such a manner as to think that it was his madness, and not her own offences, which had brought his father's spirit again on the earth. And he bade her feel his pulse, how temperately it beat, not like a

の面構であると説いた。これに后もいたく恥ぢらひ、げにも汚れたる醜き我が魂よ、と眼を伏せて内に省みた。王子は問ひつめて斯の様な先夫を殺して盗人の如く其王冠を詐取した悪漢を生涯の友とし夫と仰ぐ事が出來るや、と迫つた、が斯う云ふ内に父の亡靈が生前の姿を其のまれに先きの夜に見し態度をもつて静かに部屋に入つて來た。ハムレットは甚く恐れをなして、何故の御出現かと尋ねた。亡靈は王子が約束した復讐を忘れて居る様見ゆるが故思ひ出でしむる爲めに來たのである。母に事情を告げよ、さらずは母は悲み怖れて、死ぬるであらう、と云うて亡靈は搔き消えた、此れはハムレット以外には何人にも見えなかつたのであつて王子が亡靈の立つた場所を指し又如何に說明を加へても、母に之を認めしむる事が出來なかつた。母は王子の如何にも空に向つて談話を試みて居るらしき様子を、しきりに怪り且つ怖れ、是も王子の精神の狂ひに依るものと思うた。」18. 併しハムレットは亡き父の靈魂を再び此の地上に彷徨は

it=ghost.

to remind....of の事を思ひ出させる。

bade [bæd] 發音に注意。

she was in = in which she waso

else=然らざれは、ハムレットが母親に何か物を云うてやらなければ。 conversing with nothing 空(くう)に向って話をする。

したは母自らの罪による事を悟らず、全く我が心の狂に依る

ものと思ひ定むる程に母の淺ましき心に自惚るを止めよと乞

ひ、我が脈膞が狂人のそれと異つて、皷動の常と變りなきを

imputed 何々のせいだと思つた。

18. flatter her wicked soul 自分の腐った心に自惚れる。 flatter 習らふ。

how temperately it beat 脈の打ち方か如何にも適度。

turn her eyes inward upon her soul 眼を内に向けて己れの魂を 視る。

by as false means as a thief 盗人がやるのと同じ様な邪まなやり口で。

such as he was in his lifetime 生前に於ける姿其儘で。 what it would have 何う云ふ用事があるのか。

madman's. And he begged of her with tears, to confess herself to Heaven for what was past, and for the future to avoid the company of the king, and be no more as a wife to him: and when she should show herself a mother to him, by respecting his father's memory, he would ask a blessing of her as a son. And she promising to observe his directions, the conference ended.

And now Hamlet was at leisure to consider who it was that in his unfortunate rashness he had killed; and when he came to see that it was Polonius, the father of the Lady Ophelia, whom he so dearly loved, he drew apart the dead body, and, his spirits being now a little quieter, he wept for what he had done.

19. This unfortunate death of Polonius gave the king a pretence for sending Hamlet out of the kingdom. He would willingly have put him to death, fearing him as dangerous, but he dreaded the people, who loved Hamlet; and the queen, who, with all her faults, doted upon the prince her son. So this subtle king, under the pretence of providing for Hamlet's safety, that he might not be called to account for Polonius' death, caused him to be conveyed on board a ship bound for England, under the care of two courtiers, by whom he

見よと説き、更に、己が過去の罪を天に懺悔して、以後現王の件侶たるを止め、妻たるを辭み、父の靈を懇に吊うて、我れに母たるを示さば、我も亦子として母の福祉を祈るであらう、と聲淚共に母に訴へた。此言葉に母も王子の指圖を守るべき旨約束して、母子の會見は終つた。

斯くてハムレットは不幸にも早まつて我手に刺殺した人の誰であつたかと考ふる丈けの心に餘裕を得た、見れば死骸は己が深くも愛する姫オフィリアの父ポロ。ニアスであつたので、共造骸を引出し、今は心も幾分辭まつたので已れの非行を悔いて泣いた。

19. 國王はボロッ=ウアスの不慮の死を以て王子を國外へ追ひ放つの口實とした。 王はハムレットを危險と見て之を死に處するは固より望む所であつたのだが、王子を愛慕する國民を憚り、又落度こそ多けれ、我が子ハムレットを耽愛する后の思惑をも恐れたのである。かくて老獪なる國王は王子がボロッ=アス殺害の理由を詰問さる1事のなき様、王子の身の安全を保てる様取計らふといふ表面の理由で、二人の警護の廷臣を附して船に乗り英國へ航せしむる事にした。此等廷臣の手により當時

the company 同棲すること。

at leisure to consider 落ち付いて考へる。

<sup>19.</sup> He would willingly have put him to death 王子を死に患して仕舞ふ事が彼の望む處でめつたらう。
with all her faults 色々落度はあるにしても。

dote upon = passionately fondle 溺愛する。

be called to account for Polonius' death ポロウニアスの死の原因 は何かと説明を求められる。

be conveyed on board a ship bound for England 英國行きの船に 乗り込ます。

on board 甲板に、船上に。

under the care of の警題の下に。

dispatched letters to the English court, which in that time was in subjection and paid tribute to Denmack, requiring for special reasons there pretended, that Hamlet should be put to death as soon as he landed on English ground. Hamlet, suspecting some treachery, in the night-time secretly got at the letters, and skilfully erasing his own name, he in the stead of it put in the names of those two courtiers who had the charge of him, to be put to death; then sealing up the letters, he put them into their place again. Soon after the ship was attacked by pirates, and a sea-fight commenced, in the course of which Hamlet, desirous to show his valour, with sword in hand singly boarded the enemy's vessel, while his own ship in a cowardly manner bore away; and leaving him to his fate, the two courtiers made the best of their way to England, charged with those letters the sense of which Hamlet had altered to their own deserved destruction.

The pirates, who had the prince in their power, showed themselves gentle enemies; and knowing whom they had got prisoner, in the hope that the prince might do them a good turn at court in recompense for any favour they might show him, they set Hamlet on shore at the nearest port in Denmark. From that place Hamlet wrote to the king, acquainting him with the strange chance which had brought him back to his own

was in subjection 圏して居た。
put in 書き入れる。
had the charge of 面倒を見る、監視する。

丁抹の屬國で買物を献じ來れる英國の宮廷に宛て國書を送つて、ハムレットが英國に上陸するや、直ちに理由を構へて彼を死に處すべき旨を依賴した。ハムレットは此文書に陰謀の潜めるを覺り、夜陰竊かに此れを手に入れて、自己の名を削り、其の代りに此等王子監視の二廷臣の名を書き入れて是を死に處すべき文意となし、更に文書に封印をして元の場所に之を置いた。其後間もなく船は海賊に襲はれ海戦となつたが、其中にあつてハムレットは己れの剛勇を示さんと、劍を拔いて單身敵船に乗り込んだ、折から乗り捨てし己が船は腑甲斐なくも漕ぎ遭れて、王子を運命に任せ、彼等は英國へ向け懸命に航行した、托されし國書は其文意既にハムレットの手により、當然ながら彼等自ら死を招く樣書き改められてあつたのである。

海賊共は王子を手中の捕虜としたのであるが、敵ながら穏かに振舞ひ、殊に捕虜の身分高き人なるを知つて、若し丁重に待遇ひ置けば王子は宮廷に於て彼等に手厚く酬いらるるであらうと思ひ、宮廷へ幾何程も離れぬ岸邊へと王子を上陸せしめた。 共處より王子は國王に一書を認め、不思議なる廻り合せにて本

singly 單身。

boarded=got on board 乗り込んだ。
made the best of their way 懸命に駛った。
do them a good turn 手厚き報いをする。
set on shore 上陸させた。

country, and saying that on the next day he should present himself before his majesty. When he got home, a sad spectacle offered itself the first thing to his eyes. 20. This was the funeral of the young and beautiful Ophelia, his once dear mistress. The wits of this young lady had begun to turn ever since her poor father's death. That he should die a violent death, and by the hands of the prince whom she loved, so affected this tender young maid, that in a little time she grew perfectly distracted, and would go about giving flowers away to the ladies of the court, and saying that they were for her father's burial, singing songs about love and about death, and sometimes such as had no meaning at all, as if she had no memory of what happened to her. There was a willow which grew slanting over a brook, and reflected its leaves on the stream. To this brook she came one day when she was unwatched, with garlands she had been making, mixed up of daisies and nettles, flowers and weeds together, and clambering up to hang her garland upon the boughs of the willow, a bough broke and precipitated this fair young maid, garland and all that she had gathered, into the water, where her clothes bore her up for a while, during which she chanted scraps of old tunes, like one insensible to her own distress, or as if she were a creature natural to that element: but long it was not before her garments,

國に立戻つた由を述べ、明日にも陛下の御前に伺候いたす旨を 認めた。宮廷に戻つて、先づ彼れの眼に映じたものは悲しきー 事變であつた。

20. それは骨では王子の愛としき戀人なりし、若く麗はしきオフィリア姫の葬儀であつた。姫は父の死に逢ひて以來、心狂ひ始めたのである。父の非業の死、而も日頃慕へる王子の手にかいつて果てたといふ事は、柔和なる乙女の胸に應へて、暫しが間に全く狂ひ果て、女官どもに花を與へ歩るき、此の花は亡き父の葬儀に供ふる花よなど云ひ、懸歌を誦し、挽歌を唱し、時にまた、前後の辨へも更になきが如く、他愛もない事どもをつぶやいた。柳の木が小川の水面をはすに伸び、葉を流れに映してわた。或日の事、姫は看護の人の目を抜けて此の小川の邊りに彷徨ひ來たが、手には雛菊養麻、野花、雜草をこき交ぜて編みなせる花飾を携へ、柳の枝へ其の一つを懸けようと攀ぢ上つたが、枝折れて、たをやめも、花飾も手に持つ一切の花辞共に水中に落ちたのである。太に支へられて暫し水面に浮ぶ間、身の難儀を知らぬげに、また水に接む生き物かと見ゆるまでに、古

the first thing は a sad spectacle と同格。 20. The wits....had begun to turn 心が狂ひ始めた。

grew slanting 斜に伸びた。
natural to that element 本來水棲の、 element は four elements 即
ち 地、水、火、風の一つである水の事。

heavy with the wet, pulled her in from her melodious singing to a muddy and miserable death. It was the funeral of this fair maid which her brother Laertes was celebrating, the king and queen and whole court being present, when Hamlet arrived.

21. He knew not what all this show imported, but stood on one side, not inclining to interrupt the ceremony. He saw the flowers strewed upon her grave, as the custom was in maiden burials, which the queen herself threw in; and as she threw them, she said, "Sweets to the sweet! I thought to have decked thy bridal bed, sweet maid, not to have strewed thy grave. Thou shouldst have been my Hamlet's wife." And he heard her brother wish that violets might spring from her grave; and he saw him leap into the grave all frantic with grief, and bid the attendants pile mountains of earth upon him, that he might be buried with her. And Hamlet's love for this fair maid came back to him, and he could not bear that a brother should show so much transport of grief, for he thought that he loved Ophelia better than forty thousand brothers. Then discovering himself, he leaped into the grave where Laertes was all as frantic or more frantic than he; and Laertes knowing him to be Hamlet, who had been the cause of his father's and his sister's death, grappled him by the throat as an enemy till the attendants

諸をいくくさりも口誦さんでゐた。しかし軈て衣に水浸み重くなると共に、歌ふ聲も細り行き、あはれ泥深き水中に沈んで最期を遂げた。これぞ恰もハムレット上陸の日、王と王妃、有司百官の會葬により兄レアティズの營める葬儀であつた。

21. ハムレットは何人の葬儀かは知らなかつたが、邪魔になら ぬ様片傍に立つた。見れば處女を葬る慣ひとして、人々は墓に花 を撒き、后も之を投げ入れて、「良き娘に良き花を手向けませう、 妾はそなたの新床に花布く積りであつたに、そなたの新墓に花 撒くとは思ひもかけなんだ。愛見ハムレットの妃となるべきそ なたであつたに」と云うた。兄レアティズは、此の墓より願は くば堇の萠え出でよ、と云ふかと見れば、忽ち悲しみに分別を 打忘れ、墓穴に躍り込んで、我が上に土を山と積み、妹と共に我 を葬れよ、と叫ぶのであつた。これを見てハムレットの姫を思 ふ愛憐の情は戻り來り、彼は四萬人の兄の愛にも優りて姫を愛 すると思ふが故に、兄レアティズが悲みに我れを打忘れたる有 様を見るに堪へなかつた。そこで、ハムレットは現れ出で」、 レアティズに劣らず、否なそれにも増して物狂ほしき様に、レ アティズの立てる墓穴へと躍り入つた。レアディズは是を見て 父と妹とを死に導きしは彼れハムレットなりと知るや、これぞ 我が敵と王子の咽喉元に摑みかりつたが、從者は之を引難した。

It was the funeral....which....it は which 以下を代表す。

21. what all this show imported 斯うした目の前の光景が何う云ふ意味なのか、誰を葬る為めの葬儀か。

imported = meant.

oViolets might spring from her grave. ハムレット劇中有名な句 And from her fair and unpolluted flesh May violets spring! v. i. 262 f. pile mountains of earth 土塊を川と積む。

parted them. And Hamlet, after the funeral, excused his hasty act in throwing himself into the grave as if to brave Laertes; but he said he could not bear that any one should seem to outgo him in grief for the death of the fair Ophelia. And for the time these two noble youths seemed reconciled.

22. But out of the grief and anger of Laertes for the death of his father and Ophelia, the king, Hamlet's wicked uncle, contrived destruction for Hamlet. He set on Laertes, under cover of peace and reconciliation, to challenge Hamlet to a friendly trial of skill at fencing, which Hamlet accepting, a day was appointed to try the match. At this match all the court was present; and Laertes, by direction of the king, prepared a poisoned weapon. Upon this match great wagers were laid by the courtiers, as both Hamlet and Laertes were known to excel at this sword-play; and Hamlet taking up the foils, chose one, not at all suspecting the treachery of Laertes, or being careful to examine Laertes' weapon, who instead of a foil or blunted sword which the laws of fencing require, made use of one with a point, and poisoned. At first Laertes did but play with Hamlet, and suffered him to gain some advantages, which the dissembling king magnified and extolled beyond measure, drinking to Hamlet's success and wagering rich bets

ハムレットは式果て 1後、レアティズを物の敷とも思はぬげに 墓穴に跳び入りたるは、場所柄を辨へぬ仕打ちであつたと詫を 入れ、且つ美はしき姫の死を傷む心の彼れに優るものありと思 ふは堪へ難き所であると云うた。斯くて其場はそれで、公達等 互に心打解けたる様子であつた。

22. 併し暴戻なる叔父王クローディアスは、レアティズが父と妹との死を悲しみ、怒を含んで居るを機としてハムレットを亡きものにせん企を立てた。王はレアティズを促し、陽に和平親睦を裝うてハムレットに親しく劔道の仕合を申込ましめた、王子は之れを快諾したので、試合の日取りが定められた。當日は有司百官の臨席あり、レアティズは王の指圖により豫め毒剱の用意をした。兩人とも鈍刀を以ての仕合に技倆秀でたるは定評のある處ゆる、廷臣どもは此の勝負に莫大なる賭を行つた。ハムレットは仕合刀を取つて其一つを擇んだ、元よりレアティズに企みありとは露思はず、又敵手の劔を檢べ見んとの心を起す由もなかつたのである。レアティズは試合の掟に定むる仕合刀、即ち鈍刀を用ゐずして、鋭き切先に毒を塗つたるものを使用した。初めレアティズは王子を程よくあしらつて、王子に二三の勝を譲つたので、白々しくも國王は之を度はずれに讃嘆激賞し、王子の勝に祝盃を揚げ、仕合の結果に莫大なる賭をなした、併

as frantic (as Laertes) レアテイズと同じ様に物狂ほしく。

to brave=to defy 無視する。

outgo=go beyond より違く行く、古體で今日では普通 cuido を用 ふ、優るの意。

<sup>22.</sup> all the court 宮廷の有司百官を云ふ。
foil 仕合刀。
blunted sword 鈍刀。
beyond measure 度外れに。
drink to 何々を祝して飲む、祝盃を繋げる。
wager bets = make bets 賭をする。

upon the issue; but after a few passes Laertes, growing warm, made a deadly thrust at Hamlet with his poisoned weapon, and gave him a mortal blow. Hamlet incensed, but not knowing the whole of the treachery, in the scuffle exchanged his own innocent weapon for Laertes' deadly one, and with a thrust of Laertes' own sword repaid Laertes home, who was thus justly caught in his own treachery. In this instant the queen shrieked out that she was poisoned. She had inadvertently drunk out of a bowl which the king had prepared for Hamlet, in case that being warm in fencing he should call for drink: into this the treacherous king had infused a deadly poison, to make sure of Hamlet if Laertes had failed. He had forgotten to warn the queen of the bowl, which she drank of, and immediately died, exclaiming with her last breath that she was poisoned.

23. Hamlet, suspecting some treachery, ordered the doors to be shut while he sought it out. Laertes told him to seek no further, for he was the traitor; and feeling his life go away with the wound which Hamlet had given him, he made confession of the treachery he had used, and how he had fallen a victim to it. And he told Hamlet of the envenomed point, and said that Hamlet had not half an hour to live, for no medicine could cure him; and begging forgiveness of Hamlet, he died, with his last words accusing the king

after a few passes 二三度頃合を測つた後。 growing warm 仕合に熱して來て。 innocent weapon 毒など塗つてない鈍刀。 しレアティズは二三度頃合を見た後氣を引立てて傷ましくも毒 劒を以て王子を刺し致命の重傷を負はしめた。ハムレットは陰 謀ありとも知らず、奮然立つて亂闘を行ふ内に己れの鈍刀と敵 の毒劍とを取り違へ、其の毒劍もてレアティズに存分酬いたの である。かくてレアティズは己れの奸計に自ら陷つたのである が之れは當然であつた。此の時后は「毒害された」と叫んだ。 后は思はずも杯を飲み乾したのであるが、是はハムレットが仕 合に熱して飲物を求める場合彼に飲ませんと國王が用意して置いたもので、此の中に王は惡辣にも、若しレアティズにして敗 を取るとも、ハムレットを確實に仕止むる為めに恐るべき毒液 を混入して置いたのである。王は后の飲み乾したる杯に就て豫 め注意を與ふる事を忘れてゐた。后は今を最後の呼吸と共に毒 害された由を叫んで其場に斃れたのである。

23. ハムレットは何か陰謀ありと睨み、戸口を皆閉ぢよと命じて、之を探り出でんと勉めた。レアティズは陰謀の探索は無用にされたし、反逆者は斯く云ふ自分であると王子に告げた、ハムレットに負はされた手傷の爲めに今は助からぬ命と思ひ定め、企てたる陰謀の顕末を告白し、自らも其の犧牲者の一人なる由を告げた、更に彼は毒劔を用ひたのであり、之は如何なる薬を以てするも解毒の効なきものゆる、王子は最早や半時も命を保ち難き由を告げ、其の寛容を乞ふと共に陰謀の發頭人は國

deadly one 毒劍。

home は副詞の用法で thoroughly, completely 充分に、手ひどくの意。 was justly caught 陷つたのは當然の酬い。

inadvertently 粗忽にも、毒とは知らず。 to make sure 確實に仕止める。

23. the envenomed point 切先きに毒が塗ってあること。

of being the contriver of the mischief. When Hamlet saw his end draw near, there being yet some venom left upon the sword, he suddenly turned upon his false uncle and thrust the point of it to his heart, fulfilling the promise which he had made to his father's spirit, whose injunction was now accomplished, and his foul murder revenged upon the murderer. Then Hamlet, feeling his breath fail and life departing, turned to his dear friend Horatio, who had been spectator of this fatal tragedy, and with his dying breath requested him that he would live to tell his story to the world (for Horatio had made a motion as if he would slay himself, to accompany the prince in death), and Horatio promised that he would make a true report, as one that was privy to all the circumstances. And, thus satisfied, the noble heart of Hamlet cracked; and Horatio and the bystanders with many tears commended the spirit of their sweet prince to the guardianship of angels. For Hamlet was a loving and a gentle prince, and greatly beloved for his many noble and prince-like qualities; and if he had lived, would no doubt have proved a most royal and complete king to Denmark.

turn upon 向き直る、立ち向ふっ
fulfill the promise 約束を果す。
feeling his breath fail 息づかひが苦しくなるのを覺えて。
slay himself 自殺し果てる。
one that was privy to all the circumstances 一切の事情に内内通じて居る人。

王である、と非難の言葉を最後として、呼吸絶えた。ハムレ、 トは己の終焉近づくと見て、劔に猶ほ毒の殘るを幸ひ、遽かに 叔父に立ち向つて、胸深く其の切先きを衝き込み、かくて父の 亡靈の命も今は果され、非道なる弑虐の讐も今は復されて亡き 父への約束は全て實行せられたのである。かくてハムレットは 呼吸迫つて死の近づくを覺えたので、此の不幸なる悲劇の目撃 者たるホレィシォウに向ひ呼吸も絶えだえに「君は生き永らへて、 世の人々に一切を告げて吳れる様に」と頼んだ。ホレィシュウは 既に自ら相果てム王子の死の供をせんとする素振りを示したか らである。今は彼も一切の事情は自分獨り是を知るがゆる、世 に眞相を傳へるべき旨約束した。かくて王子は滿足すると共に 尊き玉の緒は絶え果てた。ホレィシュウと陪觀の廷臣等は涙と共 に、良き王子の靈を天使の守護に托したのである。蓋しハムレッ トは情愛深く柔和なる王子であつたから、其の王者に應はしき **置質に引きつけられ敬慕せぬものはなかつたのである。故に若** し彼にして天壽を全うしたならば、必ずや叡聖無缺の明君とし て丁抹王國に君臨したであらう。

commended 委ねた、托した。 would have proved と成つたであらう。 royal and complete 王者として缺くる處のない;

## OTHELLO.

- 1. Brabantio, the rich senator of Venice, had a fair daughter, the gentle Desdemona. She was sought to by divers suitors, both on account of her meny virtuous qualities and for her rich expectations. But among the suitors of her own clime and complexion, she saw none whom she could affect: for this noble lady, who regarded the mind more than the features of men, with a singularity rather to be admired than imitated, had chosen for the object of her affections, a Moor, a black, whom her father loved and often invited to his house.
- 2. Neither is Desdemona to be altogether condemned for the unsuitableness of the person whom she selected for her lover. Bating that Othello was black, the noble Moor wanted nothing which might recommend him to the affections of the greatest lady. He was a soldier, and a brave one; and by his conduct in bloody wars against the Turks, had risen to the rank of general in the Venetian service, and was esteemed and trusted by the state.

## オセロ物語

- 1. ヴェニス市に住む富裕なる元老議官ブラバンシオにデズデモッナと云ふ柔和な美しい娘があつた。 淑徳の譽れ高いと共に彼女に莫大の財産を譲らる1望あるが為め、是を妻に迎へようとするものが数多あつた。 併し同じ國の生れ、同じ顔色をした求婚者の中には、彼女の心に叶ふ男とては一人もなかつた。 蓋し心ばえの高い此の姫は、男子の眉目容姿より、 其の精神を重んする性質で、父に愛せられて屢々家敷に訪づれる顔色黑きムア人を姫は愛を寄せる對象と擇んだのであるが、感服はされても模倣はし難い風變りであつた。
- 2. 姫が新かる男を戀人と擇んだのは似合はしからぬと頭から非難するは當らなかつた。オモロは黑人とは云ふもの1、志操高く、いかに大家の姫とて其愛を傾けるに云ひ分なき丈夫であつた。彼は勇敢な武人で、土耳古軍との激戦の度に武動を示し、ヴェニス軍の大将に陞進して國:家の尊信を一身に集めたのである。

affect 心を動かす、愛する、好む、be in love with.
singularity 一風變つた性質。
rather to be admired than imitated 模倣さるゝより寧る感服さるべき、感服さるべきも摸倣はされぬ。

2. Bating=excepting.
wanted nothing=had all 何もかも備へてゐる。
Venetian vi'ni:ʃən Venice の形容詞形。

<sup>1.</sup> divers=several 数多の。

rich expectations何れは父から英大な財産を譲らるる見込 expectations = prospects of inheritance.

of her own clime は氣候風土の意味より轉じて國、國土の意、 同じ國に生れたる。

3. He had been a traveller, and Desdemona (as is the manner of ladies) loved to hear him tell the story of his adventures, which he would run through from his earliest recollection: the battles, sieges, and encounters which he had passed through; the perils he had been exposed to by land and by water; his hairbreadth escapes when he had entered a breach or marched up to the mouth of a cannon; and how he had been taken prisoner by the insolent enemy, and sold to slavery; how he demeaned himself in that state, and how he escaped: all these accounts, added to the narration of the strange things he had seen in foreign countries, the vast wilderness and romantic caverns, the quarries, the rocks, and mountains whose heads are in the clouds; of the savage nations, the cannibals who are man-eaters, and a race of people in Africa whose heads do grow beneath their shoulders: these travellers' stories would so enchain the attention of Desdemona that, if she were called off at any time by household affairs, she would despatch with all haste that business, and return, and with a greedy ear devour Othello's discourse. And once he took advantage of a pliant hour, and drew from her a prayer that he would tell her the whole story of his life at large, of which she had heard so much, but only by parts: to which he consented,

3. 彼は旅行好きで、デズデモ。ナ姫は、凡て貴婦人方と同様、彼の極く若年の頃の思ひ出を辿つて、語り出づる冒險談に耳を傾けるのが好きであつた。戰闘、攻圍、會戰等彼の經驗し來つた物語、海に陸に遭遇した様々の危難、崩壞の口に立つて攻撃の的となり、砲口に向つて躍進した折々に、危機一髪の處で身を全うした物語、禮無き敵の捕虜となつて奴隷に賣られた話、其危期に際しての振舞と脱出の模様、凡て斯うした物語は、異國で見た不思議な事物、例へば曠漠たる原野、奇異なる洞窟、石坑、雲表に禁ゆる巖山等の話、楚族例へば食人族又は肩下に頭ある亜弗利加の土族等の話、凡て族人の遭遇する此等の奇談と共に、デズデモ。ナの心に深い興味をそいつて、いつでも家事に呼び立てられるときは、大急ぎで用事を濟ませて戻り、オセロの語る話に貪る様に聽き入るのであつた。或時は都合よき折を利用して、是まで姫が大分聽きはしたが斷片的に聽いたに過ぎぬオセロの身の上噺しを發らす聞かして吳れる様にと、希望を

<sup>3.</sup> Hie had been a traveller 旅行好きで既に諸所を大分旅して居た。
run through 辿つて語る。
encounters 遭遇戰。
had passed through 既に經驗し來つた。

hair-breadth escapes 間髪を容れの程の危機を発れる。

enter a breach (城壁などの) 崩壊口にあつて敵の攻撃の的になる意味より難局に當る。

demeaned himself 振舞つた、身を處した。

enchain the attention 氣を奪って仕舞ふ、聞き惚れさす。

a pliant hour pliant は曲げ易い意味で time when one is easily influenced 相手に心を惹き付けられて云ふが儘になる様な氣分の時を云ふ。

drew .... prayer = made her entreat.

at large = in full.

and beguiled her of many a tear, when he spoke of some distressful stroke which his youth had suffered.

4. His story being done, she gave him for his pains a world of sighs: she swore a pretty oath, that it was all passing strange, and pitiful, wondrous pitiful: she wished (she said) she had not heard it, yet she wished that Heaven had made her such a man; and then she thanked him, and told him, if he had a friend who loved her, he had only to teach him how to tell his story, and that would woo her. Upon that hint delivered not with more frankness than modesty, accompanied with certain bewitching prettiness, and blushes, which Othello could not but understand, he spoke more openly of his love, and in this golden opportunity gained the consent of the generous lady Desdemona privately to marry him.

5. Neither Othello's color nor his fortune was such that it could be hoped Brabantio would accept him for a son-in-law. He had left his daughter free; but he did expect that, as the manner of noble Venetian ladies was, she would choose ere long a husband of senatorial rank or expectations; but in this he was deceived; Desdemona loved the Moor, though he was black, and devoted her heart and fortunes to his valiant parts and

云はせる様にしむけて置いて、之を承諾し、オセロが若き頃に 受けた悲惨な打撃を語り出でム頻りに同情の涙を催さしめた。

4. 話が濟むと姫はオセロの甞めた辛苦を思ひやつて、頻りに嘆息の聲を洩らし、語氣を强めて、實に不思議ぢや、笑止の事ぢや、と云うて、さう云ふ話は聞かぬが増しであつたなど、云ひ添へるかと思ふと、天が妾を斯う云ふ男子に生みつけて下さつたならよいがなあとも云うた。それから姫はオセロに禮を述べ、そなたの友人に我が身を愛する者があるなら、その方に身の上談をかやうかやうにせよと教へておやりなさればよい、それで妾が心を得る事になりませうと告げた。魂を魅する様なゆかしさに顏さへ赤らめて付ち打けの様でも愼しみを忘れぬ態に、それとなく意味を籠めた姫の言葉に、武人オセロと雖も之を察し、明ら様に已が意中を打明け此の千載得難き好期に、私かに結婚する約束を賜へと願ふオセロに姫は因襲を度外に置いて承諾を與へた。

5. オセロの皮膚は黑し、資産のある譯でもなし、到底ブラ パンシオが女婿として迎へる事は窒むべくもなかつた。ブラバ ンシオは娘の自由意志に任せて來たのであるが、ヴェニスの身 分ある處女等の例に見るも、娘はいづれ、元老議官の地位に あるものか、さもなくばその見込あるものを夫に選ぶであらう と思うて居た、併し此の豫想は裏切られて、姫は黑人オセロを

beguiled her of beguile は欺く意味、巧妙な話し振りで彼女の涙をそゝつた、の意。

<sup>4.</sup> a world of = a great many.

swore an oath「斯く云ふ心に鑑なきは神様も御照覽あれ」と云ふ氣 持を現はす强い断言の型。

passing = surpassingly, exceedingly.

wondrous = wonderfully.

generous 色黒き武骨なオセロに愛着を愛ゆる寛やかな心の。

<sup>5.</sup> ere long 違からず。

senatorial expectations 將來元老議官としなるべき見込。
parts=abilities.

qualities: so was her heart subdued to an implicit devotion to the man she had selected for a husband, that his very color, which to all but this discerning lady would have proved an insurmountable objection, was by her esteemed above all the white skins and clear complexions of the young Venetian nobility, her suitors.

6. Their marriage, which, though privately carried, could not long be kept a secret, came to the ears of the old man, Brabantio, who appeared in a solemn council of the senate, as an accuser of the Moor Othello, who by spells and witchcraft (he maintained) had seduced the affections of the fair Desdemona to marry him, without the consent of her father, and against the obligations of hospitality.

7. At this juncture of time it happened that the state of Venice had immediate need of the services of Othello, news having arrived that the Turks with mighty preparation had fitted out a fleet, which was bending its course to the island of Cyprus, with intent to regain that strong post from the Venetians, who then held it; in this emergency the state turned its eyes upon Othello, who alone was deemed adequate to conduct the defence of Cyprus against the Turks. So that Othello, now summoned before the senate, stood in their presence at once as a candidate for a great state employment, and as a culprit, charged with offences which by the laws of Venice were made capital.

implicit devotion 只管愛情を傾倒すること。 to all but this discerning lady. 此の分別ある姫以外の世の姫だち 愛して、共勇ましき天質には心も財も全く獻げた。一度夫と選べるオセロに愛慕の情を只管に傾け盡す姫の心には、心なき世の姫たちが除け難き障害と見る、オセロの黑き皮膚の色は、却つて、姫に心を寄するヴェニスの青年 貴族の白く躍はしき皮膚よりも、遙かに貴きものと思はれたのである。

6. 二人の結婚は私かに濟ましたのであるが、いつまで秘密を保ち得べくもなく、老父ブラバンシオの耳に達した。父は嚴聖なる議官會議に出席してムア人たるオセロが疑もなく魔法詐術を用ひて實父の承認も經ず、好遇の恩誼を無視して愛娘デズデモ。ナの心を誘惑し結婚するに至らしめたるは重々不埒であると訴へ出でた。

7. 時恰もヴェニスの國家は、土耳古軍が强大な軍備を整へ 艦隊を組織して、既にヴェニス人の所有に属する、堅塞サイプ ラス島を奪還するの意志を以て、同島に進路を向け航行中との 公報を受けた折柄で、即刻將軍オセロの出馬を求めねばならぬ のであつた。かして不測の事變に臨んで、よく土耳古軍を撃つ てサイプラス島の保護を全うする適任者は他に無しと見て、國 家は將軍オセロを立たしめたのである。かくてオセロは議院に 召喚せられ、國家の大命を果たすべき候補者たると同時にヴェニスの大法に重罪と見らる」罪科を負はされたる被告として、 議官等の面前に立つたのである。

には、discerning は外貌の醜き事などに煩はされれ分別心ある。

<sup>6.</sup> obligations of hospitality 数待を受けた恩誼。

<sup>7.</sup> fitted out a fleet 船を艤装して艦隊を編成した。 charged with offences 罪に間はれたる。 capital 死刑に處せらるべき。

8. The age and senatorial character of old Brabantio commanded a most patient hearing from that grave assembly; but the incensed father conducted his accusation with so much intemperance, producing likelihoods and allegations for proofs, that, when Othello was called upon for his defence, he had only to relate a plain tale of the course of his love; which he did with such an artless eloquence, recounting the whole story of his wooing, as we have related it above, and delivered his speech with so noble a plainness (the evidence of truth), that the duke, who sat as chief judge, could not help confessing that a tale so told would have won his daughter too; and the spells and conjurations which Othello had used in his courtship, plainly appeared to have been no more than the honest arts of men in love; and the only wichcraft which he had used, the faculty of telling a soft tale to win a lady's ear.

9. This statement of Othello was confirmed by the testimony of the lady Desdemona herself, who appeared in court, and, professing a duty to her father for life and education, challenged leave of him to profess a yet higher duty to her lord and husband, even so much as her mother had shown in preferring him (Brabantio) above her father.

10. The old senator, unable to maintain his plea, called the Moor to him with many expressions of sorrow,

8. ブラバンシオ翁は其年齢から見ても議院に於ける資格から云うても、先輩であるから、眞面目なる議官連は其云ふ處に傾態したのである。 彼は憤慨して居たから慎みなき言辭を用ひ、證據を擧ぐべき處に想像談や獨り決めの話を述べ立ててオセロの罪狀を指摘したので、當のオセロは答辯を求められた時に、單に、彼が戀愛の經緯をありのま」陳述すれば事足りたのである。彼は立つて飾りなき辯を以て上述せる求婚の次第を反覆して述べ、疑念を挿む餘地なきまでに率直に物語つたので、判長の席領主ヴェニス公も、斯かる物語を聞かば予が娘と雖も彼に愛着を覺えるであらう、と白狀せざるを得なかつた。オセロが求婚に用ひたといふ魔法詐術は、戀する男の正直な手管に過ぎぬものであり、婦女の心をひきつくる興ある物語を爲す技能こそ、謂ふ所の魔術であるのであらう。

9. オセロの陳述は、デズデモ。ナ姫が自ら爲せる證言によつて偽りなきものとなつた。 姫は法廷に現はれて、 妾は父上に生の恩と養育の恩とを受けて居りますので、子として義務を忘れは致しませぬが、申すも憚りなれど、妾が主と賴み夫と擇べる人に對して更に一段と務めねばなりませぬ。 母様が其の父君よりも貴所を大切にと御盡しなされたに變りは御:座りませぬ、と云うた。

10. 老父は訴への趣を主張し難しと見てオセロを呼び寄せ、此度の事は頗る遺憾なる旨を傳へ、止むを得さる事ゆる娘は遺

<sup>8.</sup> allegations = assertions 色々な申し立て。 a tale so told 斯う云ふ話を聽かされたら。 to win a lady's ear 婦女の傾聽を得る。

<sup>9.</sup> challenged leave of him to profess 公言致しますのを許して戴き 度いと憚らず述べた。

and, as an act of necessity, bestowed upon him his daughter, whom, if he had been free to withhold her (he told him), he would with all his heart have kept from him; adding that he was glad at soul that he had no other child, for this behavior of Desdemona would have taught him to be a tyrant, and hang clogs on them for her desertion.

11. This difficulty being got over, Othello, to whom custom had rendered the hardships of a military life as natural as food and rest are to other men, readily undertook the management of the wars in Cyprus: and Desdemona, preferring the honor of her lord (though with danger) before the indulgence of those idle delights in which new-married people usually waste their time, cheerfully consented to his going.

12. No sooner were Othello and his lady landed in Cyprus, than news arrived that a desperate tempest had dispersed the Turkish fleet, and thus the island was secure from any immediate apprehension of an attack. But the war which Othello was to suffer was now beginning; and the enemies which malice stirred up against his innocent lady proved in their nature more deadly than strangers or infidels.

13. Among all the general's friends no one possessed the confidence of Othello more entirely than Cassio.

はすが親の権力もて娘を左右し得をなら、真實遺はし度うはないのだ、と云ひ、更に加へて、他に子なきを心底より喜ぶ、もし子あらば、そなたの此の振舞に、心を鬼にして、親を棄てたる二の舞を演ぜねやう、窮屈に取締らねばならぬと思はれるからだ。

11. 此の難關を切り抜けたので、オセロは習慣の上から軍事生活の艱難は他人が食事睡眠を見る如く自然なものになつてゐたので、直にサイプラス島に於ける賊徒証討の師を起した。デスデモ。ナは新婚の夫婦が通常無常の快樂に耽って時を浪費する様な事よりも、危險は伴ふとも夫の名譽を大切と思ひ、喜んで夫の出征に同意した。

12. オセロ夫妻がサイブラス島に上陸するや、猛烈な暴風の 為めに土耳古艦隊は散り散りに離散せしめられ、從つて全島は 差し當り敵の襲撃を受くる危惧なきものとの報知に接した。併しオセロの從事すべき戦争は、是れより始まらんとしてゐたのである。 惡計を廻らして罪なき夫人デズデモ。ナを陷れんとする敵の一味は其の性質外敵 異教徒の 侵入よりも更に恐るべきものであつた。

13. 将軍オセロの腹心にして最も信頼を受くるものはマイケル、ケャシオであつた。彼はフロレンス生れの青年士官で快

for her desertion 娘が父親を築てた為めに。

<sup>10.</sup> if he had been free to withhold her 親として娘を抑へる自由があったら。

at soul 衷心。

a tyrant 暴君、少しも假借せの殿格な父親。

hang clogs on them clogs は元來歐が自由に走り廻らぬ機脚に結び つけた木片、分銅などをいふ、娘等の自由を束縛する意味。

<sup>11.</sup> being got over get over は打ち勝つの意で being got over は受動の形.

prefer....before=like....better than. prefer....to が普通であるが before か又は時に above を取る事がある。

<sup>12.</sup> which Othello was to suffer オセロが苦んで戦ふべき。 in their nature 共の性質から云うて。

Michael Cassio was a young soldier, a Florentine, gay, amorous, and of pleasing address, favorite qualities with women; he was handsome and eloquent, and exactly such a person as might alarm the jealousy of a man advanced in years (as Othello in some measure was) who had married a young and beautiful wife; but Othello was as free from jealousy as he was noble, and as incapable of suspecting as of doing a base action. He had employed this Cassio in his love affair with Desdemona, and Cassio had been a sort of go-between in his suit: for Othello, fearing that himself had not those soft parts of conversation which please ladies, and finding these qualities in his friend, would often depute Cassio to go (as he phrased it) a-courting for him: such innocent simplicity being rather an honor than a blemish to the character of the valiant Moor. So that no wonder, if next to Othello himself (but at far distance, as beseems a virtuous wife) the gentle Desdemona loved and trusted Cassio. Nor had the marriage of this couple made any difference in their behavior to Michael Cassio. He frequented their house, and his free and and rattling talk was no unpleasing variety to Othello, who was himself of a more serious temper: for such tempers are observed often to delight in their contraries, as a relief from the oppressive excess of their own; and

活、多情、加ふるに言葉遣ひ躍はしく婦女に好かれる性質であつ た。容姿また端曜に、辯舌流る」が如く、正に年齢は進んで居る が若く美しき女を妻に持てる男――オセロも幾分さうであるが ---の嫉妬を買ふ類の人物であつた。併しオセロは品位高く嫉 妬の念など毫も持たず、また卑劣の行為を爲し得ぬと同様他を 疑ぐり得ぬ男であつた。オセロは元々デズデモッナとの戀愛を 進めるのに此のケャシオを利用し、求婚の所謂媒介者たらしめた のである。オセロ自身は婦女子を喜ばす様な柔しい對話應待の 資質を持たぬ事を覺り、友人ケ+シオに之れあるを知つて、屢々 彼を代理に遣はし――之はオセロの口吻――愛の交渉をせしめ たのである。斯うした罪のない資朴なやり口は勇敢なオセロの 性格の瑕瑾ではなく寧ろ男前をあげる所以である。故に柔和な デズデモッナが夫たるオセロの次に——貞淑な妻であるから大 分の隔りを置いてはゐるが――ケャシオを愛し信頼したのに不 思議はない。なほ將軍夫妻は結婚後もケ+シオに對する其の態度 に毫も變る處はなかつた。 ケャシオも亦此の新家庭を屢々訪れ 打解けておしやべりをするのであるが、遙かに眞面目な氣質の オセロにも時にとつての變化で不快ではなかつた。蓋しオセロ の如き氣質は鈍重朴訥に壓せられるが故に之を散ずる法とし て、己れと反對の性情を喜ぶ風が度々見られるものである。か くてデズデモッナ夫人とケャシオとは、後者が曾てオセロの代理

<sup>13.</sup> of pleasing address 言葉づかひの氣持のよい。 in some measure 幾分か。 a sort of go-between 媒介者のやうなもの。 go a-courting 求愛の交渉に行く、a は on で前置詞。

so that それだから。

no wonder = it was no wonder that (if)

rattling talk べちやくちやとしゃべる。

their contraties 共れと反對の氣質。

Desdemona and Cassio would talk and laugh together, as in the days when he went a-courting for his friend.

14. Othello had lately promoted Cassio to be the lieutenant, a place of trust, and nearest to the general's person. This promotion gave great offence to Iago, an older officer, who thought he had a better claim than Cassio, and would often ridicule Cassio as a fellow fit only for the company of ladies, and one that knew no more of the art of war or how to set an army in array for battle, than a girl. Iago hated Cassio, and he hated Othello, as well for favoring Cassio as for an unjust suspicion which he had lightly taken up against Othello, that the Moor was too fond of Iago's wife Emilia. From these imaginary provocations, the plotting mind of Iago conceived a horrid scheme of revenge, which should involve both Cassio, the Moor, and Desdemona in one common ruin.

15. Iago was artful, and had studied human nature deeply, and he knew that, of all the torments which afflict the mind of man (and far beyond bodily torture), the pains of jealousy were the most intolerable, and had the sorest sting. If he could succeed in making Othello jealous of Cassio, he thought it would be an exquisite plot of revenge, and might end in the death of Cassio or Othello, or both—he cared not.

16. The arrival of the general and his lady in Cyprus meeting with the news of the dispersion of the enemy's

に共意中を通ずる爲め訪づれた時分と同じ様に共に語らひ笑ひ興するのであつた。

14. オセロ將軍は先にケャシオを核擢して副官としたが、これは信任あればこその地位で、將軍の身邊に日夕親しむ役柄である。此の陸進はケャシオよりも年長の武官で、自分こそ信任を受くべき筈と心得で居る、イアゴウなるものム氣色を大いに害した。彼は日頃ケャシオを嘲つて、婦女子の相手になるよりほかに能なき奴と惡口し、兵法も、戰鬪に於ける軍隊配置の法も、毫も心得なき事小娘と一般であると罵るのであつた。イアゴウはケャシオを憎むと共にオセロをも憎んだ、それは將軍がイアゴウの妻、イミリアを傾受しすぎるなどと將軍オセロに對しいささか懐く誤解もあり、かてムケャシオを籠受するも腹立たしと思ふたのである。斯うした架空的な憤激の念から、腹黑きイアゴウは恐るべき復讐の計畫を立て、ケャシオもオセロもデズデモ。ナも共に同じ破滅の淵に陷入れようと企てたのである。

15. イアゴウは奸智に長け深く人情の機識に通じた男で、人心を苦しめ肉體の苦痛より遙かに惱ましきもののうち、嫉妬の苦惱は最も堪へ難きもの、最も辛きものなる事を心得てわた。若しオセロをしてケ・シオを嫉ましむるに成功せば、是は復讐の妙計たるべく、兩者の中何れから死滅するか、或は兩者とも斃れる事になり、何れでも結構といふ名案だと考へた。

16. 將軍夫妻がサイプラス島に到着するや、敵艦隊四散せりとの報告に接したので當日は全島に休暇を與へた。。人々何れる

<sup>14.</sup> have a better claim than Cassio ケヤシオよりも自分の方が出世 をさせて貰ふ権利が除計にある。

imaginary provocations 理由のない憤激。

<sup>15.</sup> an exquisite plot 妙計、名案。

fleet made a sort of holiday in the island. Everybody gave themselves up to feasting and making merry. Wine flowed in abundance, and cups went round to the health of the black Othello and his lady the fair Desdemona.

17. Cassio had the direction of the guard that night, with a charge from Othello to keep the soldiers from excess in drinking, that no brawl might arise, to fright the inhabitants or disgust them with the newlanded forces. That night Iago began his deep-laid plans of mischief: under color of loyalty and love to the general, he enticed Cassio to make rather too free with the bottle (a great fault in an officer upon guard). Cassio for a time resisted, but he could not long hold out against the honest freedom which Iago knew how to put on, but kept swallowing glass after glass (as Iago still plied him with drink and encouraging songs), and Cassio's tongue ran over in praise of the Lady Desdemona, whom he again and again toasted, affirming that she was a most exquisite lady: until at last the enemy which he put into his mouth stole away his brains; and upon some provocation given him by a fellow whom Iago had set on, swords were drawn, and Montang, a worthy officer, who interfered to appease the dispute, was wounded in the scuffle. The riot now began to be general, and Iago, who had set on foot

酒宴に浮身を窶し、酒盃頻に廻つて、黑将軍オセロと共美夫人 デズデモッナの健康を祝した。

17. ケャシオは當夜兵卒共が喧嘩をして島民を騒がし或は新 來の軍隊に厭惡の情を起さしめぬ様暴飲を慎ましむべしと、オ セロの旨を含んで監督の任に當つたのである。此夜を機として イアゴウは深くも謀んだ奸計を實行せんと思ひ、陽には將軍に 對し忠義敬愛を裝ひ、陰にケ+シオを唆して、巡羅の士官に大禁 物とせられてゐる飲酒をや」度はづれにやらせたのである。ケャ シオは暫し固辭したが、イアゴウが巧みに裝ふ他意なき氣安さ に强ひても辭みかねて、頻りに盃を重ね、イアゴウ亦酒をとつて 勸め、歌を唱して氣を煽り立てたりした、やがてケャシオの舌 端滑らかにデズデモッナ夫人を賞めそやし、絶世の佳人であると 頭へ、彼女の爲めに幾度か乾盃をした。終には口に含んだ魔酒 は彼の理智を奪ふに至つて、イアゴウが豫め命じて置いた一人 の男が、ケャシオの疳氣に觸れる様な事を云うたので、白刄を拔 き放つに至つた、此喧嘩の留め男に現れたのが、島の前總督たる 武官モンタノであつたが、亂闘のまぎれに手傷を負うた。今や 騒擾は廣く知れ渡り、不埒の發頭者たるイアゴウは眞先きに、 櫓の鐘を刷打して事變を四方に警告した、恰も醉餘の些々たる **等闘ではなく何事か危險なる上司反抗事件の突發した如く騒い** 

under colour of の保護色を用ひ、を裝ひ。 rather too free 少しだらしがなさすぎる。 hold out against 辭する。 toasted 乾盃した。 the enemy 魔酒。 to be general 全般に擴がる。 set on foot 始めた、惹起した。

<sup>16.</sup> a sort of holiday 休日と云つた様なもの。 gave themselves up to feasting 酒宴に我を打忘れた。 17. with a charge 命を受けて。

the mischief, was foremost in spreading the alarm, causing the castle-bell to be rung (as if some dangerous mutiny instead of a slight drunken quarrel had arisen). The alarm-bell ringing awakened Othello, who dressing in a hurry, and coming to the scene of action, questioned Cassio of the cause. Cassio was now come to himself, the effect of the wine having a little gone off, but was too much ashamed to reply; and Iago pretending a great reluctance to accuse Cassio, but as it were forced into it by Othello, who insisted to know the truth, gave an account of the whole matter (leaving out his own share in it, which Cassio was too far gone to remember) in such a manner as, while he seemed to make Cassio's offence less, did indeed make it appear greater than it was. The result was that Othello, who was a strict observer of discipline, was compelled to take away Cassio's place of lieutenant from him.

18. Thus did lago's first artifice succeed completely; he had now undermined his hated rival, and thrust him out of his place; but a further use was hereafter to be made of the adventure of this disastrous night.

19. Cassio, whom this misfortune had entirely sobered, now lamented to his seeming friend Iago that he should have been such a fool as to transform himself into a beast. He was undone, for how could he ask the general for his place again? He would tell him he was

だのである。警鐘の響にオセロは目を聴まして遠しく衣服を纏ひ現場に馳せつけ、ケ+シオに事の次第を尋ねた。ケ+シオは今や酒氣も幾分醒めて、己れに立ち返つし居たが、餘りに氣耻しくて返答もならず默してゐた。イアゴウはケ+シオの非を擧げるは誠に不本意であるといふ風を裝ふて居たが、事實を申立てよとのオセロが嚴命に、今は餘義なき場合と云はぬ計りに、事の次第を洩れなく語つた、ケ+シオが餘り醉ひ過ごして思ひ出し得ぬを幸ひ、イアゴウ自ら此の事件に關係ある事は棚に上げ、いかにもケ+シオの罪を輕くする様勉むると見せかけ、內心實際よりも罪狀を過大に見えしめようといふ巧妙な陳述ぶりであつた。規律を重んずる事職であるオセロは、餘儀なくもケ+シオの副官たる職権を褫奪するといふ結果になつた。

18. かくてイアゴウの第一計略は全く圖に當つた。今や憎むべき 競争の相手ケャシオを覆へして地位を失はしめた。併し此の夜の斯様な災厄が發端となつて更に災を惹き起すのであった。

19. ケ・シオは斯うした不幸に全く我れに歸り、獸同樣價値なきものになり下つた身の愚さを上はべ文け眞實を裝ふィアゴウに叩つた。「おれは取り返しのつかぬ事をして仕舞つた、今更ら元の地位に戻して下されと何で將軍に御頭ひ出來ようぞ、おれは醉ひどれぢや、價値のない人間ぢゃ、」と自らを蔑んだ。

dangerous mutiny 危險性の上官反抗事件、暴動。 leaving out his own share in it 自分が此の事に關係があるといふ 事は差置いて述べずに。

<sup>18.</sup> undermine 土室下を掘る意味から知らの間に覆へす。

<sup>19.</sup> He was undone 取り返しのつかぬ事を爲で仕舞つた。

a drunkard. He despised himself. Iago, affecting to make light of it, said that he, or any man living, might be drunk upon occasion; it remained now to make the best of a bad bargain; the general's wife was now the generel, and could do anything with Othello; that he were best to apply to the lady Desdemona to mediate for him with her lord; that she was of a frank, obliging disposition, and would readily undertake a good office of this sort, and set Cassio right again in the general's favor; and then this crack in their love would be made stronger than ever. A good advice of Iago, if it had not been given for wicked purposes, which will after appear.

20. Cassio did as Iago advised him, and made application to the lady Desdemona, who was easy to be won over in any honest suit; and she promised Cassio that she should be his solicitor with her lord, and rather die than give up his cause. This she immediately set about in so earnest and pretty a manner, that Othello, who was mortally offended with Cassio, could not put her off. When he pleaded delay, and that it was too soon to pardon such an offender, she would not be beat back, but insisted that it should be the next night, or the morning after, or the next morning to that at furthest. Then she showed how penitent and humbled poor Cassio was, and that his offence did not deserve

イアゴウは、之を何でもなき事のやうに扱ふ態度で云うた「貴 殿にせよ、何人にせよ、時に風酔することはあるものちや、か うなつては善後策を講ずる他はない、今では將軍の奥方が將軍 で、オセロに對し何事でもなし得る方ぢや、奥方デズデモッナに 将軍への仲裁を賴んだが上分別、奥方は隔りない、親切な性質 の方で、左様な良い役柄なら直ぐにも引受けて貴殿をば元通り 将軍の籠者に引戻して下さらう。さすれば兩人の間の破れかけ た情誼も以前より一段と堅固にならう」イアゴウの此の勧告は、 後に現はる」通り、邪な考へあつて與へられたので無くば、よ き忠告とも云はれよう。

20. ケャシオはイアゴウの勧めに從つて、デズデモゥナ夫人の 許に頼み込んだ。夫人は正直な額ひ事には快く應ずる人であつ たが故に、夫君に對して仲裁役にならう、命にかけても引受け た事は捨てまじと、ケャシオに約束した。 夫人は直ちに此事に 取りか」り熱心にまた夫の愛に縋る様に說いたので、ケャシオに 對し衷心より怒つて居た將軍も、妻の願を斥け兼ねた程であつ た。將軍は妻に、暫く猶豫して吳れ、斯程の罪人を赦すには時 期が餘り早すぎるから、と頼むやうに云うても、夫人は引退ら うとはせず、「明晩は許してやつて下さい、でなくば明後日の 朝、それもならぬとあれば遅くも其翌朝にはケャシオを許して上 げて下さい。」と云ひ張り、更に、ケャシオがひどく前非を悔いて

to make light of 輕く見る。何でもなき事と思ふ。

to make the best of a bad bargain 出來た不幸から最善の道を考 へる、善後策を講する。

set right again 元通りに引き直す。 20. easy to te won over 容易に承諾を與へる。

his cause ケヤシオの類み事。

pleaded delay 猛墜してくれと類む様に云うた。

so sharp a check. And when Othello still hung back, "What! my lord," said she, "that I should have so much to do to plead for Cassio, Michael Cassio, that came a-courting for you, and oftentimes, when I have spoken in dispraise of you, has taken your part! I count this but a little thing to ask of you. When I mean to try your love indeed, I shall ask a weighty matter." Othello could deny nothing to such a pleader, and, only requesting that Desdemona would leave the time to him, promised to receive Michael Cassio again into favor.

21. It happened that Othello and Iago had entered into the room where Desdemona was, just as Cassio, who had been imploring her intercession, was departing at the opposite door; and Iago, who was full of art, said in a low voice, as if to himself, "I like not that." Othello took no great notice of what he said; indeed, the conference which immediately took place with his lady put it out of his head, but he remembered it afterward. For when Desdemona was gone, Iago, as if for mere satisfaction of his thought, questioned Othello whether Michael Cassio, when Othello was courting his lady, knew of his love. To this the general answering in the affirmative, and adding, that he had gone between

謹慎してゐる態の憐れなる事を告げ、彼の罪も斯程に重い答を受くる程ではないと説いた。然るにオセロが猶も躊躇してゐるのを見て、「ほんにまあ貴方とした事が、妾がケ・シオの爲めにそれ迄に辯じて上げなければならぬとは、他人ならぬマイケル、ケ・シオの爲めですよ、貴方の代理で妾を所望なされに見えた時分、度々妾は貴方の事を悪しざまに申しても、貴方の肩を持たれた方ぢや、妾が貴方に御願ひする事としては、ほんに小さな事と思うてゐます、眞竇貴方の愛を試さうとなら、きつい事を御願ひしませうに」と迫つた。オセロも斯う預まれては斥ける事もならず、暫しの猶豫を與へて貰ひたい、マイケル、ケ・シオは元通り目を掛けて遣るから、と約束をするに至つた。

21. 偶々オセロはイアゴウと共にデズデモ。ナの部屋へ入つて來たが、折しも將軍への執成かたを願ひに來てゐたケャシオが向ふの出入口から出て行く處であつた。策略家なるイアゴウは「あれが俺には氣に入らん」と獨り言の様に低聲で云うた。オセロは此の言葉を格別心に止めず、事實、直ぐ後に夫人との會見で全く念頭になかつたのだが後になつて此の言葉を思ひ出すのであつた。共次第はデズデモ。ナが其場を去ると、イアゴウは別に仔細はないが念の爲め御訊きすると云うて、將軍は夫人へ申込みをされた時分に、マイケル、ケャシオは將軍の戀を知つてゐたかどうかと尋ねた。將軍は「然り」と答へて更に「予が結婚

ccunt=consider.

answering in the affirmative 共の通りだと答って。

so sharp a check そんなに重い罪科。
check = punishment.
hung back = hesitated.
in dispraise of 悪しざまに Cf. in praise of.
taken your part 貴方の味方する。

<sup>21.</sup> who was full of art 策略を持つた、胸に一物ある。
as if for mere satisfaction of his thought 外に仔細はない単に念
の爲めと云つた風に。

them very often during the courtship, Iago knitted his brow, as if he had got fresh light on some terrible matter, and cried, "Indeed!" This brought into Othello's mind the words which lago had let fall upon entering the room, and seeing Cassio with Desdemona; and he began to think there was some meaning in all this: for he deemed lago to be a just man, and full of love and honesty, and, what in a false knave would be tricks, in him seemed to be the natural workings of an honest mind, big with something too great for utterance: and Othello prayed Iago to speak what he knew, and to give his worst thoughts words. "And what," said Iago, "if some thoughts very vile should have intruded into my breast, as where is the palace into which foul things do not enter?" Then Iago went on to say, what a pity it were, if any trouble should arise to Othello out of his imperfect observations; that it would not be for Othello's peace to know his thoughts; that people's good names were not to be taken away for slight suspicions; and when Othello's curiosity was raised almost to distraction with these hints and scattered words, Iago, as if in earnest care for Othello's peace of mind, besought him to beware of jealousy. With such art did this villain raise suspicions in the unguarded Othello, by the very caution

申込みの間、ケャシオは屢々二人の間に仲介役を務めたのぢや」 との言葉に、イアゴウは眉を顰め恰も何か恐るべき事件に新 しき光明を得た様な面持ちで「さうなんですか」と叫んだ。此 言にオセロはイアゴウが此の部屋へ入りしなに夫人とケャシオ とを見て洩した言葉を思ひ浮べ、此れには何か仔細のあるべし と考ふるに至つた。オセロにはイアゴウは正しい人間で情愛深 く律義なものと思はれ、不埒な侫人の奸策も彼には何か云ひ 出し難い大きな變事を胸に秘めた正直な人間の自然に現はる」 所作と見えたのである。そこでオセロはイアゴウに向ひ「知つ て居る事は告げよ、どの様に云ひ惡くい事でも話して吳れ」と 懇ろに云うた。イアゴウは「どんな宮殿にでも穢いものの這入込 まぬと限らぬもので、手前の胸にも何か不好な考が潜り込んだ ら、大變で御座ります」と云ひ置いて、更に「手前の足はぬ觀察 から將軍に何か御迷惑が及んだなら遺憾至極と申すもの、手前 の考へを申すは閣下の御心の平和を害ふ所以でありまするし、 人の善き名は些少ぬ疑ひを以て傷くべきものでも御座いませ ぬ」と云へば、オセロの好奇心は、是等の意味ありげな片語に 煽られて殆んど氣も狂はん計りになつたのを見てイアゴウはオ セロの心の平和を甚だ氣遣ふが如く、嫉妬の心を起し給はぬ様 願ふと云うた。奸侫なる彼は、斯かる注意を加ふる事により却 つて、事情を知らぬオセロが心に如何にも巧みに疑念を煽つた

got fresh light 新たに光明を得た。

let fall 打ち洩らした。

big with something too great for utterance 云ひ現はし得の程大きな何事かを胸に祕めた。

to give his worst thoughts words ドンナひどい事でも云うて臭れ # 様に。

what if some thoughts....ドンナ事になりませうか大變でせう。
what a pity it were=what a pity it would be 誠に遺憾な事で御座ります。

unguarded 心に備へなき、奸策ありと知らの。

which he pretended to give him against suspicion. "I know," said Othello, "that my wife is fair, loves company and feasting, is free of speech, sings, plays, and dances well: but where virtue is, these qualities are virtuous. I must have proof before I think her dishonest." Then lago, as if glad that Othello was slow to believe ill of his lady, frankly declared that he had no proof, but begged Othello to observe her behavior well when Cassio was by; not to be jealous, nor too secure neither, for that he (Iago) knew the dispositions of the Italian ladies, his countrywomen, better than Othello could do; and that in Venice the wives let heaven see many pranks they dare not show their husbands. Then he artfully insinuated that Desdemona deceived her father in marrying with Othello, and carried it so closely that the poor old man thought that wichcraft had been used. Othello was much moved with this argument, which brought the matter home to him; for if she had deceived her father, why might she not deceive her husband?

22. Iago begged pardon for having moved him; but Othello, assuming an indifference, while he was really shaken with inward grief at Iago's words, begged him to go on, which Iago did with many apologies, as if unwilling to produce anything against Cassio, whom he called his friend. He then came strongly to the point,

slow to b lieve ill of 容易に悪く思いの。

のである。オセロは「予が妻は眉目曜はしくよく人と交はり共に食ひ、よく語り、歌ひ、遊びまたよく踊る、だが婦徳が伴ふてこそ、此等もよいのぢや。予は妻を不正と見る前に先づ證據を見ねばならぬ。」と言うた。そこでイアゴウは表面オセロが共妻を容易に悪く思はぬを喜ぶ風に見せ明らさまに證據は何も無き旨公言したが「どうぞケ・シオが側にある時は奥方の擧動に御注意なされませ、疑ふも不可ませぬが、さりとて餘り御油斷もなりませぬ、手前は此の國の女どもの性質は將軍よりも宜く心得で居ります、そしてヴェニスでは人妻が夫に見せられな悪戯を陰では致します、」と云ひ、更に彼はデズデモ・ナが實父を欺いてオセロと結婚し、而も如何にも秘密裡に事を運んだので、あはれ老父は魔術によつて娘が欺されたものと思ひ込んだ程であると言葉巧みに説いた。オセロは此の論法に甚だ心を動かされ、妻の素行問題を深く心に考ふるに至つた、父を欺いた娘なら夫を欺かぬ理由はあるまいと思うたからである。

22. イアゴウはオセロの心を動かした事を詫びた。オセロはイアゴウの言葉に衷心の悲みを覺え身も打ち震ふ許りであつたが、何氣なく裝うて、話の繼續を促した、イアゴウは友人なるケッシオを讒訴するは快しとせぬ風で頻りに言譯をした。續いて語氣强く要點を述べ、デズデモ。ナが同國人の男子にして求婚す

the wives let heaven see many pranks 人妻は色々戯けた事を秘かに爲る。

<sup>22.</sup> assuming an indifference さあらの態を裝ひ。 against Cassio ケヤシオに不利な。 came to the point 要點に觸れて來た。

and reminded Othello how Desdemona had refused many suitable matches of her own clime and complexion, and had married him, a Moor, which showed unnatural in her, and proved her to have a headstrong will; and when her better judgment returned, how probable it was she should fall upon comparing Othello with the fine forms and clear white complexions of the young Italians her countrymen. He concluded with advising Othello to put off his reconcilement with Cassio a little longer, and in the mean while to note with what earnestness Desdemona should intercede in his behalf, for that much would be seen in that. So mischievously did this artful villain lay his plots to turn the gentle qualities of this innocent lady into her destruction, and make a net for her out of her own goodness to entrap her: first setting Cassio on to entreat her mediation, and then out of that very mediation contriving stratagems for her ruin.

23. The conference ended with Iago's begging Othello to account his wife innocent until he had more decisive proof; and Othello promised to be patient; but from that moment the deceived Othello never tasted content of mind. Poppy, nor the juice of mandragora, nor all the sleeping-potions in the world could ever again restore to him that sweet rest which he had enjoyed but yesterday. His occupation sickened upon him. He no longer

better judgment 更に正しい判別心。
young Italians と her countrymen とは同格。
in his behalf ケヤシオの為めに。

るもの多き中に、皆斥けて、ムア人なるオセロを夫に擇んだ事に思ひ至らば、如何にそれが不自然であり、頑迷な性情であるかが解るであらう、夫人の判別心が戻つて來れば夫たるオセロを同國の伊太利青年の優美な姿、色白き顔に較べて見る氣になる事は尤も千萬の事である。と説き、要するにケャシオの罪を恕す事は今暫し猶豫あつて、其間如何許り熱心にデズデモッナが、ケャシオの爲めに執成すかに眼を止められる様、其の點に首肯される事が色々あるでせうからと告げた。かくて猾智に支けた惡人イアゴウは巧みに婦徳の難ずべき處を持たね立派な夫人を破滅に陷らしめ、其淑徳を利用して却つて彼女を落し入る」良を作らんとするの計略を廻らしたのである、曩きにケャシオを説いて夫人に仲裁の勞を願はせておき、次いで其の仲裁を利用して彼女を亡ぼすといふ策略を講じたのである。

23. イアゴウは循確たる證據を握る迄は、夫人に罪なきものと思はる」様オセロに願ひ、オセロも亦隱忍する旨を約して、此會見は終つた。併し此時より欺かれた將軍は絕えて心の滿足を覺えるといふ事がなくなつた。罌栗も蔓陀羅華もまた世の一切の睡眠藥もつい前日まで味つたあの心地よき休息を恢復す事は出來なかつた、己れの職務も懶く覺え、武器をとる業も心の

for that = for the reason that.

much would be seen in that=you would see much in that. stratagems (strætælzem) 策略。

<sup>23.</sup> account = consider.

mandragora = mandrake 之を服用すれば吐氣又は睡氣を催して麻酔に 陷るといふ有毒植物。

took delight in arms. His heart, that used to be roused at the sight of troops and banners and battle-array, and would stir and leap at the sound of a drum or a trumpet or a neighing war-horse, seemed to have lost all that pride and ambition which are a soldier's virtue; and his military ardor and all his old joys forsook him. Sometimes he thought his wife honest, and at times he thought her not so; sometimes he thought Iago just, and at times he thought him not so; then he would wish that he had never known of it; he was not the worse for her loving Cassio, so long as he knew it not: Torn to pieces with these distracting thoughts, he once laid hold on Iago's throat, and demanded proof of Desdemona's guilt, or threatened instant death for his having belied her. Iago, feigning indignation that his honesty should be taken for a vice, asked Othello if he had not sometimes seen a handkerchief spotted with strawberries in his wife's hand. Othello answered that he had given her such a one, and that it was his first gift. "That same handkerchief," said Iago, "did I see Michael Cassio this day wipe his face with." "If it be as you say," said Othello, "I will not rest till a wide revenge swallow them up: and first, for a token of your fidelity, I expect that Cassio shall be put to death within three days; and for that fair devil (meaning his lady) I will withdraw and devise some swift means of death for her."

The state of the s

battle-array 軍隊の勢崩ひ。 the worse 前よりも不幸。

慰めにはならなかつた、軍隊軍族勢揃ひ等を見て勇み立つを常 とした心も、太鼓嗽叭軍馬の嘶を聞いて涌き躍るを覺えた胸 も、武人の美質たる自負、抱負、一切の心を失うたやうに思は れ、軍事の熱誠も其他前日までの一切の喜びも、彼を去つて仕 舞つたかと思はれた。時には妻を正直なものと思うて見たり、 又時には然らずと思ひ直したり、時にイアゴウを忠義なものと 思ふかとすれば、侯臣ではなきかと疑つたりした。斯くては寧 ろ何も知らねばよかつたとも思うて見た、知らぬ限りは妻がケ +シオを愛するにしても、自分に不快は無かつたらう。迷へる心 は千々に聞れ、或時はイアゴウの喉元を抑へて「俺の妻がきつ と淫婦か、其證據を見せてくれ、さもなくば彼女を纔誣した簾 で即坐に死罪に處するぞ」と威嚇しつけた。イアゴウは自己の 正直が虚偽と取られるは遺憾千萬と怒れる様を裝うて「奥方が 草苺の刺繍のあるハンケチを時に御覽なさればしませぬか」 と訊ねた。オセロは、左様なものを妻に與へた事がある、それ は妻に與へた最初の贈物であつたと答へた。イアゴウはすかさ ず、「其の同じハンケチで今日ケャシオが類を拭いて居るのを見 ました」オセロは、「若しお前の云ふ通りなら、何處までも復讐 を彼等に加へでは措かね、先づお前の忠義を無にせぬ證據にケ +シオ奴を三日以内に死刑に處する積りである、妻たる美しき 夜叉めは、是から奥へ行つて何か工夫して素早く殺してくれよ

belied her = accused her falsely.

till a wide revenge swallow them up 充分な復讐をなして徹底的 に彼等を滅ぼすまで。

for a token of your fidelity 汝の忠義を無にせの證據として。 will withdraw 別室へ退いて。

24. 極めて些細な握み處のない事でも嫉妬深い人々には聖

24. Trifles, light as air, are to the jealous proofs as strong as holy writ. A handkerchief of his wife's seen in Cassio's hand was motive enough to the deluded Othello to pass sentence of death upon them both, without once inquiring how Cassio came by it. Desdemona had never given such a present to Cassio, nor would this constant lady have wronged her lord with doing so naughty a thing as giving his present to another man. Both Cassio and Desdemona were innocent of any offence against Othello; but the wicked Iago, whose spirits never slept in contrivance of villany, had made his wife (a good, but a weak woman) steal this handkerchief from Desdemona, under pretence of getting the work copied, but in reality to drop it in Cassio's way, where he might find it, and give a handle to Iago's suggestion that it was Desdemona's present.

25. Othello, soon after meeting his wife, pretended that he had a headache (as he might indeed with truth), and desired her to lend him her handkerchief to hold to his temples. She did so. "Not this," said Othello, "but that handkerchief I gave you." Desdemona had it not about her (for indeed it was stolen as we have related). "How!" said Othello, "this is a fault indeed. That handkerchief an Egyptian woman gave to my mother; the woman was a witch, and could read people's thoughts: she told my mother, while she

25. オセロは妻に會ふと直ぐに、頭痛がして困ると假病を使ひ――或は事實さうであつたかも知れぬ――顳顬を抑へるのにハンケチを貸してくれと妻に云うた。夫人がハンケチを出すと、「いやそれではない、俺が與けたあのハンケチを貸してくれ」とオセロは云うた。デズデモ。ナは是を持ち合して居なかつた、――是は旣に述べた通り、盗まれて事實無かつたのである、「どうして無い?ほんに不都合ちゃ、あのハンケチは実及の女が俺の母に吳れた品ぢゃ、其女は魔法使ひで人の心を見透かすことの出來る女、其女が母に云ふには、母が其ハンケ

innocent of any offence 卵科のない。
give handle to の手掛りにする。

書の言葉の様に、確乎たる證據と思はる」のである。ケャシオの手に見たといふオセロ夫人のハンケチは、敷かれたオセロには彼がどうしてそれを手に入れたかに就いて唯の一回も審問をせず、即時兩人に死刑の宣告を與ふるに充分な位な動機であつた。デズデモ・ナは斯様な贈物をケャシオに與へた事はないし、又真女たる彼女が何人にもせよ仇し男に贈物などする様な不都合をして夫を傷つける様な事は爲なかつたらう。 夫人もケャシオも共にオセロに對し罪答ない身であつた、然るに腹黒いイアゴウは非道をたくらんで心の休む間がないといふ男だが、お人善しの意志の弱い妻エミリアにデズデモ・ナの手から此のハンケチを盗み取らしたものであつた、其の刺繍の型を寫し取つて貰ひ度いからといふ口質であつたが實は此れをケャシオの通る道に落しておいて拾はせ、之れは夫人よりケャシオへの贈物だとイヤゴウがほのめかす手蔓たらしめる爲めであつた。

<sup>24.</sup> to the jealous=to jealous people.

holy writ=the Scriptures. writ=writing.

came by it=obtained it.

<sup>25.</sup> as he might (have a headache) 頭痛がしたのかも知れわか。

kept it, it would make her amiable, and my father would love her; but, if she lost it, or gave it away, my father's fancy would turn, and he would loathe her as much as he had loved her. She dying gave it me, and bade me, if I ever married, to give it to my wife. I did so; take heed of it. Make it a darling as precious as your eye." "Is it possible?" said the frighted lady. "'Tis true," continued Othello; "it is a magical handkerchief; a sibyl that had lived in the world two hundred years, in a fit of prophetic fury worked it; the silkworms that furnished the silk were hallowed, and it was dyed in a mummy of maidens' hearts conserved." Desdemona, hearing the wondrous virtues of the handkerchief, was ready to die with fear, for she plainly perceived she had lost it, and with it, she feared, the affections of her huaband. Then Othello started, and looked as if he were going to do some rash thing, and still he demanded the handkerchief, which, when she could not produce, she tried to divert her husband from too serious thoughts, and cheerfully told him she saw all his talk about the handkerchief was only to put her off from her suit about Michael Cassio, whom she went on to praise (as Iago had foretold), till Othello in perfect distraction burst out of the room, and then Desdemona, though unwillingly, began to suspect that her lord was jealous.

チを所持して居る間は愛嬌が増し母に對する父の愛が慕る許り ぢやが、之を失うたり、人に與へたりしたら、父の心が變り、 前に愛したと同じ程に母を嫌ふ様になるといふのぢや。母は是 を最後の時に俺に與れて、妻を迎へる場合とならば是れを女に 與れと云うた。それでお前に遺したのぢや、大切にせい、お前 o眼の様に大事に愛でたがよい。」「さう云ふ品なのですか」と 夫人は打驚いて云うた。「全くなのだ、あれは魔のハンケチで、 二百年も此世に住んでゐた巫女が、神通力を得た刹那にあの 別繍をしたのぢや、あの絹地を生み出した蠶は神聖にせられ、 處女の心臓を木乃伊にして朽ちぬ様保存されたるものをもつて 染め出したものである。」とオセロは續けた。デズデモ。ナは其 のハンケチの靈驗の驚くべきを聞き、之れを失つた事は明らか に解つて居り、是と共に或は夫の愛をも失ふかと思ふが故に絕 え入らん計りに恐怖を覺えた。やがてオセロは立つて何事か手 荒い事でもするかと見えたが、猶もハンケチを求めて止まなか つた、夫人は之を取り出すことは出來ず、夫の眞面目な心を外 らさうと勉め、戯れの様に、ハンケチに就いて兎や角云ふはマイ ケル、ケャシオに就ての願ひ事を云ひ紛らさう爲めぢやな、と 云ひ、猶もイアゴウの旣に云うた通り、彼女はケャシオを褒め そやしたのでオセロは全く心を取り蹴して、ついと部屋を立ち 出でた、そこで彼女も夫が嫉妬の情に驅られて居るのだなと、 心ならずも疑ふ様になつた。

in a fit of prophetic fury 神通力の担った刹那に。 wondrous=wonderful.

take heed of it 大切にせよ。 conserved 香料などを詰めて腐蝕せずに長く保存の出來る機にし たる。

26. What cause she could have ministered to him she knew not, and then she accused herself for accusing the noble Othello, and thought to be sure that some untoward news from Venice, or some state troubles, had puddled his spirits, and made his temper not so sweet as formerly. And she said: "Men are not gods, and we must not look for that observance from them when they are married which they show us on the bridal day." And she beshrewed herself for so unkindly judging of his unkindness.

27. Again Othello and Desdemona met, and he accused her more plainly of being unfaithful, and of loving another man, but he did not name whom: and Othello wept, and Desdemona said: "Alas! the heavy day! why do you weep?" And Othello told her he could have borne all sorts of evils with fortitude—poverty, and disease, and disgrace; but her infidelity had broken his heart: and he called her a weed that looked so fair, and smelled so sweet, that the sense ached at it; and wished she had never been born. And when he had left her, this innocent lady was so stupefied with wonder at her lord's untrue suspicion of her that a weight-like sleep came over her, and she only desired her attendant to make her bed, and to lay her wedding-sheets upon it, saying that, when

26. 何う云ふ理由で嫉妬の情を起させたのか、彼女には解らなかつたが、 心の潔いオセロを悪く思うたは身の至らぬが為めと我身を責め、是れは畢竟ヴェニスから何か面倒な報告でも來たのか、或は何か御國の紛糾が起つて夫の心を掻き亂したのであらう、 それで御氣分がいつもの様に勝れぬのであらう、と思ひ猶云ひ續けた「男子は神様ではない、婚禮をした當座通りにいつも親切にして貰へると思うてはならぬ、」というて夫人をことったなき。

27. 再度オセロはデズデモ。ナと會うた時、妻が不貞で誰と名は指さぬが他男を愛した不都合を、前よりも明らさまに詰つて男泣きに泣いた、デズデモ。ナは「まあ、辛い事、何故お泣きなさる」と尋ねた。オセロは、「貧苦、病氣、不面目、あらゆる禍が來るとも、じつと耐へ忍ぶは困難ではない、唯妻の不貞には此の胸も張り裂くる思ひぢや、汝は色といひ香といひ美はしうて目も鼻も痛うなる程な毒草ぢやぞ、汝が生れて來ねばよかったに、」というて立ち去つたが、身に覺えなき夫人は夫の根もなき疑の餘りに不審しく茫然として心重く睡魔の襲ひ來るを覺えたので、侍女に寢床の用意を賴み、婚禮の時の敷布を掛くる様

look for = expect.

<sup>26.</sup> ministered = given.

accused herself 我身を貴めた。
untoward [Antó(u) ad] = unfortunate, troublesome.
puddled his spirits 彼の心を掻き倒した。puddle = disturb.

observance=attention.

beshrewed = cursed.

unkindly judging 悪るく思ふ、恨む。

<sup>27.</sup> the heavy day! heavy=oppressive, ve y sad, 辛い事。
a weight-like sleep 睡覧が錘の様に。

people teach their babes, they do it by gentle means and easy tasks, and Othello might have chid her so; for in good faith she was but a child when she was chidden. And this was all the complaint which this gentle lady made.

28. Desdemona being retired to bed expecting her lord would follow her, soon fell into a slumber, the effect of her troubled spirits, when Othello entered the chamber, full of the black purpose which he had meditated of putting his lady to death. But when he saw her asleep, he thought he would not shed her blood, nor scar that white skin of hers, more white than alabaster. But he was resolved she should die; else (as he said) she would live to betray more men, as she had done him. Then he kissed her for the last time (as he said), and that kiss was so sweet that he must needs kiss her again: and he wept, but he said they were cruel tears.

29. Desdemona was awakened with his kisses, and she looked upon Othello, and she saw him gnaw his under lip, and roll his eyes, and she knew he was always fatal when he looked so: and he bade her prepare for death, and to say her prayers, for he would not kill her soul. And this innocent wife, as she lay at his

Othello might have chid her so. オセロはさう云ふ風に妾を叱つて下すつたらよいのぢや。

in good faith 真質。

this was all 是れ丈けで外にない。

28. the effect of her troubled spirits 精神懊悩の結果。

命じ、「幼い兒を教へる人をは物優しう容易い事から始めるもの ちゃ、夫も妾にさう爲たが當然ぢゃ、まこと妾は叱られる時に はほんの子ども同然ぢゃもの、」と云うたが、柔和な夫人が洩ら した恨みの言葉は唯是れ丈けであつた。

28. デズデモ。ナは夫も後に來る事と思うて臥床に入つたが問もなく精神の勞の爲め睡んだ。其時オセロは妻を殺さうと報ねて思案を凝らして置いた通り、恐ろしい心を懐いて部屋に入つて來た。併し妻の寢姿を見て血を流すを欲せず、石花石膏よりも眞白い妻の肌に傷付けたくなかつた、併し妻を是非殺さう、さもなくば――オセロの口吻によると――生かして置いては自分を欺いた様に幾多の男を裏切る事であらうからと思ひ定めた。是れが最後だと云うて接吻をしたが、如何にも心融くるの思ひで再び接吻せでは措かれなかつた、涙をハラススと落したが酷い涙ぢやと云うた。

29. デズデモ。ナは接吻に眼を醒まし、オセロを見上げると下唇を嚙みギョロギョロ眼を光らせた形相を見て、斯う云ふ顔付きのとき夫はいつも思ひ切つた事をするのだと知つてゐた、此時オセロは命じた、「死ぬる用意をしなさい、魂まで殺す積りはないのだから祈禱を捧げるがよい、」罪なきデズデモ。ナは生死をため心のまくに身を横へたまく憐れみを乞ひ死なねばならぬ

alabaster 石花石膏といふ純白半透明の石で大理石に類似す。 she should die 生かして置けれ。

else 殺されば。

must needs に回記される of need, of necessity 即ち necessarily の意。 29. to say her prayer 身は滅びても魂は救ひ給へと最後の祈禱を神に捧げる。

lay at his mercy 殺すも生かすも夫の心のまゝと身を横へてゐた。

mercy, begged for compassion, and to know her fault, and then he named Cassio, and the hankerehief which (he said) she had given him; and as the guiltless lady was proceeding to clear herself, he suddenly would hear no more, but, covering her up in the bed-clothes, stifled her till she died.

30. In this instant of time was brought into the house Cassio, wounded and bleeding, whom Iago had set one of his creatures on to assassinate; but the fellow not succeeding in his attempt to kill Cassio (whom he wounded, but not mortally), and being himself killed by Iago to prevent discovery, in his pockets were found certain letters, which made the guilt of Iago, and the innocence of Cassio, clear beyond all doubt; and Cassio now came to beg pardon of Othello, and to ask wherein he had offended him, that he had employed Iago to murder him.

31. This discovery was as a thunderstroke to Othello, who now plainly saw that he was no better than a murderer, and that his wife (poor innocent lady) had been ever faithful to him: the extreme anguish of which discovery making life insupportable, he fell upon his sword, and throwing himself upon the body of his dear, injured lady, expired.

32. These rash acts raised much passion of horror and amazement in the bystanders, for Othello had borne a fair reputation, and till he was wrought upon by the arts of a villain, which his own noble nature never gave

理由を尋ねた、そこでオセロはケャシオの名を云うてあのハンケ がないり、無辜の夫人が如何に身の潔白を證 據さうとしてもオセロは最早や頑として聽き入れず、夜着を以 て彼女を覆ひ途に壓殺して仕舞つた。

30. 此の刹那に負傷して血塗れとなれるケャシオが室内へ運び込まれた、これはイアゴウが部下の一人に命じて彼を暗殺せしめんとしたのだが、下手人はケャシオを殺し損じ傷を負はせたのみで而も淺傷であつた、下手人は事の露見を恐れてイアゴウの爲めに殺害されたが其の衣養の中に書類が入れてあり、イアゴウの罪狀を記述し、ケャシオの全く罪なき以所が明らかに認められてあつた、ケャシオは今オセロの恕しを乞ひに來て何の點でオセロの勘氣に觸れたのであるか、イアゴウを遣はして暗殺を圖られたは何故かと尋ねた。

31. 此の發見はオセロには實に晴天の霹靂であつた、彼は今や明らかに無辜を殺した殺害者で、あはれ妻は潔白にして彼に貞實であつた事が解つた、事情の闡明と共に甚だしき苦惱を覺え、生き長らへるに堪へず、己れの双に伏し、可愛しき妻の冷なきがらたき遺骸の上に身を投げかけて息絶えた。

32. 聲望一世に高きオセロの斯うした短氣一徹な行動は、是を目撃せる人々の心に戦慄驚愕の念を惹き起した、オセロは高尚なる性質に生れついて惡漢の計略を疑ふ由もなく巧みに陥れられたが、其れ迄の彼は實に愛情濃かなる夫であつた、賢い愛

<sup>30.</sup> beyond all doubt 疑ふ餘地なきまでに。

<sup>31.</sup> no tetter than a murderer 取りも直さず殺害者。

<sup>32.</sup> he was wrought upon by the arts of a villain 悪漢の計略に陷しいれられた。

his leave to suspect, he was a loving and a doting husband. He had loved not wisely, but too well; and his manly eyes (when he learned his mistake), though not used to weep on every small occasion, dropped tears as fast as the Arabian trees their gum. And when he was dead, all his former merits and his valiant acts were remembered. Nothing now remained for his successor but to put the utmost censure of the law in force against Iago, who was executed with strict tortures; and to send word to the state of Venice of the lamentable death of their renowned general.

were remembered remember = think of kindly or gratefully 有り難く 思ふ。感謝を以て追憶するなどの意。 し方とは申されぬが、たゞ餘りに愛に溺れたのであつた、故に一度自己の誤りを知るや、日頃小さき事に淚を催した事のない。 引々しい彼の限にもアラビアの樹木が傷いて護謨汁を満らす如く淚を止め兼ねたのである。死して後生前の功績と勇敢なる行為とは凡て感謝を以て追憶された。彼の後任者としては國法の定むる嚴刑をイアゴウに當て重き拷問にかけて彼を處斷し、ヴュニス政府には名將オセロの非業の最期を報導する事が差し當りの仕事であつた。

to put....in force=carry out 取り行ふ。
utmost censure=severest punishment.

## THE MERCHANT OF VENICE

1. Shylock, the Jew, lived at Venice: he was an usurer, who had amassed an immense fortune by lending money at great interest to Christian merchants. Shylock, being a hard-hearted man, exacted the payment of the money he lent with such severity, that he was much disliked by all good men, and particularly by Antonio, a young merchant of Venice; and Shylock as much hated Antonio, because he used to lend money to people in distress, and would never take any interest for the money he lent; therefore there was great enmity between this covetous Jew and the generous merchant Antonio. Whenever Antonio met Shylock on the Rialto (or Exchange), he used to reproach him with his usuries and hard dealings, which the Jew would bear with seeming patience, while he secretly meditated revenge.

2. Antonio was the kindest man that lived, the best conditioned, and had the most unwearied spirit in doing courtesies; indeed, he was one in whom the ancient Roman honour more appeared than in any that drew breath in Italy. He was greatly beloved by all his

## ヴェニスの商人物語

1. シヤイロツクと呼ぶ猶太人がヴェニスの市に住んで居た、彼は高利貸を營み基督教徒の商人等に高利を以て金を貸し付け巨萬の富を蓄積した。元來無情な男で、貸金の返濟を督促する事極めて嚴重で、善良な人々からは進く嫌はれ、殊に市に住むアントニオといふ商人に悪まれてゐた。またシヤイロツクの方でも同じ程度にアントニオを憎んでゐた、それはアントニオは困つて居る人々に金を貸してやり、而も貸した金には利子を取る事をしないのであつた、從つて此の貪慾な猶太人と、寛容な性質の商人アントニオとは互に睨み合つてゐた。アントニオが商人の集まるライアルト即ち取引所でシヤイロツクに出會ふ事がある度に高利を取つたりひどい仕打を爲たりするのは不都合であると難ずるのであつた。猶太人は外面は何氣ない樣子で之を堪へるのであつたが、心私かに復讐を目論んだのである。

2. アントニオは世に珍らしい程親切な人で、境遇も上乘であり、人の爲めに盡して倦む事を全く知らぬといふ心の持主であった、質に古羅馬人の持てる德性は、伊太利に住む何人よりも餘計に彼に顯はれてゐた。從つて彼は市の住民たちから大いに

云ふ橋がある、此の邊が昔のヴェニスの中心で商賣取引の盛な地域であつた、Rialto と云ふ名稱は、Rivo-alto (deep stream) から來たとある。

hard dealings 酷な仕打ち。

courtesies I acts of civility で情ある行為。
drew breath=lived.

<sup>1.</sup> usurer ('ju:zə:ə) 高利貸、Venice は往時歐洲大陸の商業中心地で 取引の盛な地であったから金融業者である高利貸も多く住んで居 たのである。

exact 殿しく取立てる。

as much アントニオがシャイロツクを憎んだと同程度に。 Rialto ヴェニス市一部の名稱、現在ヴェニス市に Ponte di Rialto と

fellow-citizens, but the friend who was nearest and dearest to his heart was Bassanio, a noble Venetian, who, having but a small patrimony, had nearly exhausted his little fortune by living in too expensive a manner for his slender means, as young men of high rank with small fortunes are too apt to do. Whenever Bassanio wanted momey, Antonio assisted him; and it seemed as if they had but one heart and one purse between them.

- 3. One day Bassanio came to Antonio, and told him that he wished to repair his fortune by a wealthy marriage with a lady whom he dearly loved, whose father, that was lately dead, had left her sole heiress to a large estate; and that in her father's life-time he used to visit at her house, when he thought he had observed this lady had sometimes from her eyes sent speechlees messages, that seemed to say he would be no unwelcome suitor; but not having money to furnish himself with an appearance befitting the lover of so rich an heiress, he besought Antonio to add to the many favours he had shown him, by lending him three thousand ducats.
- 4. Antonio had no money by him at that time to lend his friend, but expecting soon to have some ships to come home laden with merchandise, he said he would go to Shylock, the rich money-lender, and borrow the money upon the credit of those ships.

愛慕を受けたが、中にも彼の最も心を許した親密な友人はヴェニスの貴族バツサニオで、此人は財産のあまりない青年貴族が 鬼角陥り勝ちな乏しい資力に不似合な贅澤三昧に日を暮した爲 めに身代も殆ど蕩盡してしまつたのである。 バツサニオが金の 入用な事があるといつもアントニオが彼を助けるといふ様な課 で、二人は恰で心も一つ財布も一つといふ風に見えた。

3. 或日ベツサニオはアントニオの處へ來て云ふには「自分は深くも愛してゐる或富裕な令嬢と結婚をして財産を回復し度いと思ふ。此の父親といふのは近頃死亡して唯一人の相續者たる彼女に莫大な財産を殘したのである。父親の存命中に自分は共家を毎度訪問した。共頃此の令嬢が時に眼に物云はせて自分を求婚者として滿更厭やと思はぬらしいといふ事を感づいた次第なのだ。處が斯う云ふ財産付きの娘の戀人たるに相應しい外貌を整へる丈けの金を持たないので、貴下に度々厄介になつて相濟まぬが、厄介序に三千ダカツトの金を融通して吳れまいか」と賴み込んだ。

4. アントニオは此時に友人に貸してやる文けの金を手許に持つて居なかつた、併し間近く何隻かの船が商品を積み込んで歸つて來る筈だから、あの金持ちの金貸しシャイロック翁の處へ行つて、船を告抵當にして金を借りようと云つた。

are apt to do とかく陷り勝ちである。

3. sole heiress 唯一人の相線者として。
unwelcome suitor 嫌いな求婚者。

to add to the many favors he had shown him 是まで色々と世話になったが世話序に。

ducat ('dakət) 歐洲大陸で用ひられたダカット金貨で 1 ダカットは約9シルリング程のもの。

<sup>4.</sup> had no money by him 持合せが無かった。
upon the credit of...を増保として。

Antonio and Bassanio went together to Shylock, and Antonio asked the Jew to lend him three thousand ducats upon any interest he should require, to be paid out of the merchandise contained in his ships at sea.

On this, Shylock thought within himself, "If I can once catch him on the hip, I will feed fat the ancient grudge I bear him; he hates our Jewish nation; he lends out money gratis: and among the merchants he rails at me and my well-earned bargains, which he calls interest. Cursed be my tribe if I forgive him!"

5. Antonio finding he was musing within himself and did not answer, and being impatient for the money, said, "Shylock, do you hear? will you lend the money?"

To this question the Jew replied, "Signor Antonio, on the Rialto many a time and often you have railed at me about my moneys and my usuries, and I have borne it with a patient shrug, for sufferance is the badge of all our tribe; and then you have called me unbeliever, cut-throat dog, and spit upon my Jewish garments, and spurned at me with your foot, as if I was a cur. Well, then, it now appears you need my help; and you come to me and say, Shylock, lend me moneys. Has a dog money? Is it possible a cur should lend three thousand ducats? Shall I bend low and say, Fair sir, you spit upon me on Wednesday last, another time you called

アントニオはパツサニオと連れ立つてシヤイロツクを訪ね、 航海中の船荷を以て返済することにするから、利子はいくらで も構はぬ、三千ダカツトの金を貸して吳れと頼んだ。

此れを聞いてシャイロツクは獨り思ふ様「一度彼奴を抑へ付ける事が出来れば、彼奴に對して懐く以前からの鬱憤を充分晴らす事が出来よう。彼奴は我等猶太人を憎んでゐる。彼奴は無利息で金を貸し居る。而も商人たちの前で此の俺をくさし、當然の儲を高利など」ほざいて貶しをる、我が民族の耻だ、許せるものか」。

5. アントニオはシャイロツクが考へ込んで返答もせぬので、金を貸すか貸さぬのかもどかしく思ひ「シャイロツク、解つたかね、金は融通して吳れるのか?」と訊かれて彼は答へた「アントニオさん、貴方は取引所で度々俺の金や、金貨商賣を惡口なされた、が俺は肩をすくめてじつと堪らへて來たのです、忍從といふ事は俺ら猶太民族の表象なんですから、それから貴方は俺を不信神者だとか人喰ひ犬だとかお呼びになつて俺の猶太服に壁をお吐きになり、やくざ犬かなぞの様に足蹴になされました、さうして置いて今ぢや俺の助けが御入用と見える、それで俺の處へ御座つて「シャイロツク、金を貸して吳れんか」と仰せある。犬が金を持ちませうか。やくざ犬が三千ダカツトの金を貸せるものでせうか。俺は平身低頭『旦那様、貴方は先週水曜日に私に唾をお吐きかけになつた、何時々々は犬だと仰せにな

catch him on the hip 彼な不利の地位に陷れる、抑へて動きの取れ の様にする。

gratis [副詞] 無料で、無利息で。 well-ea:ned bargains 當然得た儲け。

<sup>5.</sup> Signor ('si:njo:) 男子に對する伊太利の奪稱、Signore を英語風に 用ひたもの。

a cur = a wretched dog やくさ大o

me dog, and for these courtesies I am to lend you moneys?"

6. Antonio replied, "I am as like to call you so again, to spit on you again, and spurn you too. If you will lend me this money, lend it not to me as a friend, but rather lend it to me as an enemy, that, if I break, you may with better face exact the penalty."

"Why, look you," said Shylock, "how you storm! I would be friends with you, and have your love. I will forget the shames you have put upon me. I will supply your wants, and take no interest for my money."

This seemingly kind offer greatly surprised Antonio; and then Shylock, still pretending kindness, and that all he did was to gain Antonio's love, again said he would lend him the three thousand ducats, and take no interest for his money;—only Antonio should go with him to a lawyer, and there sign in merry sports a bond, that if he did not repay the money by a certain day, he would forfeit a pound of flesh, to be cut off from any part of his body that Shylock pleased.

"Content," said Antonio: "I will sign to this bond, and say there is much kindness in the Jew."

7. Bassanio said Antonio should not sign to such a bond for him, but still Antonio insisted that he would sign it, for that before the day of payment came his

6. アントニオは答へて云ふ「私は今後もやはり同様君を犬 と呼び、君に唾を吐き掛け、足蹴にもする積りだ。若し君が金 を貸して吳れるなら友人として私に貸して吳れるのではなく寧 ろ敵として貸して貰ひ度い、私が約束を破つたら待つて居たと 計りに罰を加へられる様に」シャイロツクは「マア、御待ちな さい。大分激しいですね。御互様に御友達交際が願ひ度いし、 御贔負にも預り度いです。貴方が御加へになつた侮辱は俺は忘 れませう。御入用の御金は御用立て致しませうし、御金の利子 は要りません」此の親切らしい言葉はアントニオの甚だ意外と する處であつた、更にシャイロツクは猶ほ親切を裝ひ、何もア ントニオの好意を得たい計りだといふ風に、繰り返して三千ダ カットの金を御貸ししよう、利子は一切要らぬ、唯だ御一緒に 公證人の處へ行つて、若し或る期日までに御返金が無ければ、 自分の好きな何處でも貴下の身體の肉一封を切り取つて是を罰 金として頂戴いたすといふ證文を面分半分に慥へて之に御署名 を願ひたいですと云うた。

アントニオは「宜しい、私は其の證文に署名しよう、そして 猶太人には中々親切心があると中して置かう」と云うた。

7. バツサニオはアントニオに自分の為めに其の様な證文に 署名する事はいけない、と留めたが、アントニオは、いや署名 して差支へない、支拂期日前に共金額の何層倍といふ荷を積ん

った、此の手厚いお特遇の御禮に金を御用立て申します』など ム云ひませうか」。

<sup>6.</sup> with better face 喜んで。
in merry sports 戯談半分に。
by a certain day いつ幾日までに。

forfeit 没收する、科料代りに取り上げる。

<sup>7.</sup> for that = because.

ships would return, laden with many times the value of the money.

Shylock, hearing this debate, exclaimed, "O father Abraham, what suspicious people these Christians are! Their own hard dealings teach them to suspect the thoughts of others. I pray you tell me this, Bassanio: if he should break his day, what should I gain by the exaction of the forfeiture? A pound of man's flesh, taken from a man, is not so estimable, nor profitable neither, as the flesh of mutton or of beef. I say, to buy his favour I offer this friendship: if he will take it, so; if not, adieu."

At last, against the advice of Bassanio, who, notwithstanding all the Jew had said of his kind intentions, did not like his friend should run the hazard of this shocking penalty for his sake, Antonio signed the bond, thinking it really was (as the Jew said) merely in sport.

8. The rich heiress that Bassanio wished to marry lived near Venice, at a place called Belmont: her name was Portia, and in the graces of her person and her mind she was nothing inferior to that Portia, of whom we read, who was Cato's daughter and the wife of Brutus.

Bassanio, being so kindly supplied with money by his friend Antonio, at the hazard of his life, set out

with many times 何層倍も。
break his day 期日を違へる。
the forfeiture 違約料として没收する肉一封。
adieu 本來 to God の意味の佛蘭西語、英語の Good-bye! 即ち God

だ船が何變も戻つて來る譯なのだからと云うてきかなかつた。

シャイロックは此押問答を横合から聞いて大撃で云うた、「やれ呆れた、皆さんは基督教徒の癖に何といふ疑ひ深いのぢや。自分等の遣口が 苛酷 なもんぢやから、他人の考へまで疑ぐる事になるのぢや。バッサニオさんに承り度いが、縱令アントニオさんが期日を違へたとして、肉一封を沒收して見た處がそれで何の得る處がありますかい。人間の生肉一封では羊肉或は牛肉程の價値も無けりや、儲にもなりますまいぢや。好意を得ようと思へばこそかうした情誼も示す譯ぢやが、受けて下さりやそれでよし、左もなくば御免を蒙るだけさ」と云うた。

パツサニオは猶太人が親切ぶりに色々云うたに拘らず、友の アントニオが自分の爲めに斯様な空恐ろしい遅滯料を拂ふとい ふ危險を胃すのは好まぬと諫止に努めたが、結局アントニオは 事實こんな事は猶太人の云ふ通り、ほんの面白半分の戯れ事と 信じて證文に署名をして仕舞つた。

8. バッサニオが妻にし度いといふ資産家の世 継娘といふのはベルモントといふヴェニスに近い處に住んでゐた、名はボーシアと云うて容姿 心 操共に高 雅な女性で、書物にあるあの昔のローマのケイトウの娘でブルータスの妻であつたボーシアに毫も劣らぬ娘であつた。

パツサニオは友アントニオが一身を賭して親切にも調達して 吳れた金をもつて、花々しく從者づれを從へ、グレイシアノと

be with you! と同様別れの挨拶。
run the hazard 危険を冒す。
shocking グッとする様な、空恐ろしい。
graces 高雅な美點。

for Belmont with a splendid train, and attended by a gentleman of the name of Gratiano.

9. Bassanio proving successful in his suit, Portia in a short time consented to accept of him for a husband.

Bassanio confessed to Portia that he had no fortune, and that his high birth and noble ancestry were all that he could boast of; she, who loved him for his worthy qualities, and had riches enough not to regard wealth in a husband, answered with a graceful modesty, that she would wish herself a thousand time more fair, and ten thousand times more rich, to be more worthy of him; and then the accomplished Portia prettily dispraised herself, and said she was an unlessoned girl, unschooled, unpractised, yet not so old but that she could learn, and that she would commit her gentle spirit to be directed and governed by him in all things: and she said, "Myself and what is mine, to you and yours is now converted. But yesterday, Bassanio, I was the lady of this fair mansion, queen of myself, and mistress over these servants; and now this house, these servants, and myself, are yours, my lord; I give them with this ring": presenting a ring to Bassanio.

10. Bassanio was so overpowered with gratitude and wonder at the gracious manner in which the rich and noble Portia accepted of a man of his humble fortunes, that he could not express his joy and reverence to the

云ふ紳士を伴うてベルモントを指して出發した。

9. バツサニオは求婚の首尾も宜しく、ポーシアは間もなく 彼を夫として迎へる事に承諾した、彼は己れの無資産な事をポ ーシアに打明け、たゞ誇りとする處は家柄系圖のよいといふ丈 けだと云うた。ボーシアは立派な性質を愛し、夫の財産に目を 附けないでも宜い程の富裕な身分であつたから、奥ゆかしく謙 遜して「妾は貴方の妻となるのに相應しい様に、今の妾よりも 千倍も美しく、萬倍も富裕な身であつて欲しいのです」と答へ、 更に此の嗜みの深いポーシアは愼しく身を卑下して、「妾は教 育のない娘で、學校へも行かず、經驗も積んで居りませんが、 學ぶのに晩すぎる程の年配でも御座いませんゆる、何事によら ず貴方の御指導に任せて、妾の心を躾けてまわりませう、妾の からだ 身體と妾の召使や所有品全部とも是れからは貴方のものに替る のです。パツサニオさん、昨日まで妾は此の立派な邸宅の女主人 で、絶對の女王であり、召使共を支配めて行く主婦でしたけれど も、爾今は此の家も召使供も妾の身體もみな夫たる貴方のもの です、妾は此指環と一緒に全部を差上げます」と云うてパツサ ニオに指環を差出した。

10. バッサニオは此の富裕な氣品の高いポーシアが貧乏な自分の様な男をかうも和しく受け入れて吳れたので感謝の念と不思議な感じとに胸溢れる思がして、愛しい有難いの念を表はす断片的な言葉を以てする外は、斯くまで好意を持つて吳れる

but that she could learn=that she could not learn 學び得知程。 10. a man of his humble fortunes 自分の様な資産とても無い男。

Gratiano (Greisi'a:nou).

<sup>9.</sup> high birth 門地の高いこと。 noble ancestry 家系の高貴なること。

dear lady who so honoured him, by anything but broken words of love and thankfulness: and taking the ring, he vowed never to part with it.

Gratiano, and Nerissa, Portia's waiting-maid, were in attendance upon their lord and lady, when Portia so gracefully promised to become the obedient wife of Bassanio; and Gratiano, wishing Bassanio and the generous lady joy, desired permission to be married at the same time.

11. "With all my heart, Gratiano," said Bassanio, "if you can get a wife."

Gratiano then said that he loved the Lady Portia's fair waiting gentlewoman, Nerissa, and that she had promised to be his wife, if her lady married Bassanio.

Portia asked Nerissa if this was true.

Nerissa replied, "Madam, it is so, if you approve of it."

Portia willingly consenting, Bassanio pleasantly said, "Then our wedding-feast shall be much honoured by your marriage, Gratiano."

12. The happiness of these two lovers was sadly crossed at this moment by the entrance of a messenger, who brought a letter from Antonio containing fearful tidings. When Bassanio read Antonio's letter, Portia feared it was to tell him of the death of some dear friend, he looked so pale; and, inquiring what was the news which had so distressed him, he said, "O sweet Portia, here are a few of the unpleasantest words that ever blotted

懸人に、数喜と敬意とを示す言葉を知らなかつた。そこで指環 を受け取つて、決して身體から此れを離さぬと誓ひを立てた。

ボーシアがパツサニオの柔順な妻となることを和しくも約束した時にはグレイシアノとボーシアの腰元ネリサと此場に侍つて居た。グレイシアノはパツサニオとボーシアとに祝賀の辭を述べ、同時に自分等二人も結婚の儀を差し許して戴き度いと云ひ出した。

11. パッサニオは「グレイシアノ君、妻になるといふ女があるなら、それは大賛成だ」と答へた。

そこでグレイシアノは夫人ボーシアの美しい腰元ネリサを愛し、夫人ボーシアがバツサニオと結婚されたらネリサも彼の妻となる約束をして居る旨を答へた、ボーシアはネリサに共通りかどうかと尋ねた、ネリサは「ハイ若し貴女様がさうしてよいと仰せになりますなればさう致し度いので御座います」、ボーシアは喜んで承諾したのでバツサニオは愉快さうに云うた「さきれば私等の婚禮の賀筵も君等の結婚によつて錦上花を添へる事になる譯だ、グレイシアノ君」

12. 戀を得た二人の男の幸福も、此刹那にアント=オから恐ろしい消息を傳へた手紙を持つて使者が入つて來た爲めに、遺憾にも破られたのである。バツサ=オがアント=オからの手紙を讀んだ時ボーシアはだれか親しい友の死の通知ではあるまいか、と氣遣ふた程バツサ=オの顏色が蒼白であつた、「そんなに御心配類をなさるのはどう云ふ消息なので御座いますか」と尋ねた、「オ、、ボーシアさん、此の手紙には是れまで見た

wishing....joy 脱賀の意を述べて。 12. was sadly crossed 遺憾にも横紙を破られた。 paper: gentle lady, when I first imported my love to you, I freely told you all the wealth I had ran in my veins; but I should have told you that I had less than nothing, being in debt." Bassanio then told Portia, what has been here related, of his borrowing the money of Antonio, and of Antonio's procuring it of Shylock the Jew, and of the bond hy which Antonio had engaged to forfeit a pound of flesh, if it was not repaid by a certain day: and then Bassanio read Antonio's letter, the words of which were, "Sweet Bassanio, my ships are all lost, my bond to the Jew is forfeited, and since in paying it is imbossible I should live, I could wish to see you at my death; notwithstanding, use your pleasure, if your love for me do not persuade you to come, let not my letter."

13. "O my dear love," said Portia, "dispatch all business and be gone; you shall have gold to pay the money twenty times over before this kind friend shall lose a hair by my Bassanio's fault; and as you are so dearly bought, I will dearly love you."

Portia then said she would be married to Bassanio before he set out, to give him a legal right to her money; and that same day they were married, and Gratiano was also married to Nerissa; and Bassanio and

run in my veins 血管の中を流れてゐる。

事もない位不愉快な言葉が綴つてあるのです。私が初めて私の 戀を貴女に打明けた時に、私の血管に流れてゐる富卽ち血統の よい事だけが私の財産の全部だと包まず申し上げたが、實は借 財があるのだから、無財産以下である事を申上げて置く筈だつ たのです」とバツサニオは云うて、既に述來つた様な次第、卽ち アントニオから金を借りた事、アントニオは之れをシヤイロツ クと云ふ猶太人から融通を受けた事、但し或期日までに返濟せ ねならアントニオの肉一封を切り取つてよいと云ふ證 文の話 等を物語り、綴いてアントニオの手紙を讀んで聽かせた、「バ ツサニオ兄、小生の船は全て難破沈浚いたし候に付かの猶太人 へ與へたる證文通り科料支拂の義務を生じ申候、之を支拂ふ上 は小生の生命は保ち難く候ま、臨終に際して一目拜姿を得ば幸 進と存じ候、併し强ひてと申すには無之御意の儘に願度候、小 生に對する御友情にして抂駕を願ふに足らずば、此書面を受け られしが爲めのみの御光來は御免を願度候」。

13. ボーシアは是を聽いて、「まあ貴方、御用事は手早く御片附けになつて驅けつけて御上げなさい、そして負債金額の廿倍程の金貨をお持ち遊ばせ、貴方の過失の爲めに此の親切な御友人の頭髪一本失はせてはいけませぬ、それ程高い代償を拂つて貴方を手に入れるのですから、どんなにも深く貴方を御愛し申します」と云ひ、更にボーシアは彼女の金錢に對する適法の權利をバツサニオに與ふる爲めに出發前に結婚を了したいと申出でた、此の結婚と同日にグレイシアノとネリサとの結婚も行はれ

I should have told you that 御話して置くべき筈であった。

I had less than nothing 無財産より猶悪い。

use your pleasure 御隨意に願い度い。

<sup>13.</sup> despatch all business 御用事を手早く御濟しなさい。 you sha!! have gold=1 will let you have gold.

as you are so dearly bought dearly bought は高い償を拂つて買 はれる、此の dearly はすぐ後の dearly に呼應せしめて高價にの意 味と愛としい心での意と兩様を含ましめた巧妙な語法である。

a legal right 法律上から云うても正しい権利、適法の権利。

Gratiano, the instant they were married, set out in great haste for Venice, where Bassanio found Antonio in prison.

The day of payment being past, the cruel Jew would not accept the money which Bassanio offered him, hut insisted upon having a pound of Antonio's flesh. A day was appointed to try this shocking cause before the Duke of Venice, and Bassanio awaited in dreadful suspense the event of the trial.

14. When Portia parted with her husband, she spoke cheeringly to him, and bade him bring his dear friend along with him when he returned; yet she feared it would go hard with Antonio, and when she was left alone, she began to think and consider within herself, if she could by any means be instrumental in saving the life of her dear Bassanio's friend; and notwithstanding, when she wished to honour her Bassanio, she had said to him with such a meek and wife-like grace, that she would submit in all things to be governed by his superior wisdom, yet being now called forth into action by the peril of her honoured husband's friend, she did nothing doubt her own powers, and by the sole guidance of her own true and perfect judgment, at once resolved to go herself to Venice, and speak in Antonio's defence.

insisted upon having どうしても貰ふと云ひ張つた。 in dreadful suspense 恐ろしい不安の裡に、suspense はどちらにな るか解らぬ氣がかりの狀態。 た、パッサニオとグレイシアノの兩人は結婚の式を濟ますと直に大急ぎでヴェニスに向つて發つたが、友アントニオはヴェニスの牢獄に繋がれて居たのである。

返濟期日が過ぎたので性残忍な猶太人はパツサニオが用意して差出した金を受取る事を肯ぜず、アントニオの肉一封を貰は うと主張した。領主ヴェニス公の面前で此の恐るべき訴訟の裁判を爲すべき日が定められた、パツサニオは此の裁判事件が如何なる事かと恐ろしい不安の内に待つたのである。

14. ボーシアは夫と別れる時に機嫌よく夫と話し、歸宅の際に親友アントニオを同道する様にと云うたが、併しアントニオは辛い目に會ひはすまいかといふ懸念もあつた、夫の出發後唯一人で頻りに思案を始め、愛しい夫の友人の命を救ひ出すのに何かで自分が力になる事が出來ぬものかと考へて見た、夫バッサニオを立て、行き度いと思つて柔和に淑やかな人妻らしく「以後は何事によらず、貴方の優れた御智慧の指圖に從ひます」と云ひはしたが、今は敬する夫の友の身に難儀がかいる折柄で、どうにか爲さなくてはならぬのであるから、ボーシアは自分の技倆を毫も危ぶまず自分の眞實な落ちのない判斷力を唯一の指導と何いで、自らヴェニスに出掛けてアントニオ辯護の任に當らうと即座に決心した。

<sup>13.</sup> Event of the trial 審判を受けるの日、try は審判する。

<sup>14.</sup> it would go hard with Antonio アントニオが辛らい目に合うだ らう。

be instrumental = be helpful 道具となる、役に立つ。
notwithstanding は when 以下 wisdom までかゝる。

being called forth into action 何等かの行動をとらなければならわのだから。

did nothing doubt = did not doubt in the least.

Portia had a relation who was a counsellor in the law; to this gentleman, whose name was Bellario, she wrote, and stating the case to him, desired his opinion, and that with his advice he would also send her the dress worn by a connsellor. When the messenger returned, he brought letters from Bellario of advice how to proceed, and also every thing necessary for her equipment.

15. Portia dressed herself and her maid Nerissa in men's apparel, and putting on the robes of a counsellor, she took Nerissa along with her as her clerk; and setting out immediately, they arrived at Venice on the very day of the trial. The cause was just going to be heard before the duke and senators of Venice in the senate-house, when Portia entered this high court of justice, and presented a letter from Bellario, in which that learned counsellor wrote to the duke, saying he would have come himself to plead for Antonio, but that he was prevented by sickness, and he requested that the learned young Doctor Balthasar (so he called Portia) might be permitted to plead in his stead. This the duke granted, much wondering at the youthful appearance of the stranger, who was prettily disguised by her counsellor's robes and her large wig.

And now began this important trial. Portia looked around her, and she saw the merciless Jew; and she saw

ポーシアの親戚に法律の顧問辯護士をしてゐる者があつた。 名はベラリオといふ此の大家の許へ手紙を送つて、事件を逐一 述べて彼の意見を求め、其意見書と共に顧問辯護士の着用する 法服を送る樣依頓した。使者は方法を教へた書面と扮装に必要 な一切の事物を持つて歸つて來た。

15. ボーシアは自分も亦腰元ネリサも男子の服装に着替へをし、法服を纏うて、ネリサは書記として同伴した。即時出發して審判の當日ヴェニスに到着、元老院に於てヴェニス公及元老議官の面前で丁度訴訟事件の審問が始まらうと云ふ時にボーシアは高等判廷へ現はれ、ベラリオの書面を提出した、之れは彼の博學の顧問辯護士がヴェニス公に宛てた書面で、自身アントニオの辯護の爲め出廷致し度いと思つたが病氣の爲め其意を得如に依て青年學者ベルサザア博士〔ボーシアの事〕を代理に送って辯護せしめ度く、宜敷御配慮を、と云ふ文意であつた。公爵は之を許可して入廷せしむると法服と大假鏨を用ひて巧みに變裝したボーシアの容姿の若々しさに一驚した。

今や此の重大な審問が開始せられた。ボーシアは場内を見廻 はすと無情な猶太人や夫バツサニオ等が立つてゐた。併し夫は

desired his opinion = desired to have his opinion.
advice how to proceed どういふ處置を採ったらよいかと云ふ忠言。
equipment 辯護士としての身拵(みこしらへ)。

<sup>15.</sup> court of justice 裁判廷。

he would have come (事情が許せば)出廷したであらう。 wig 其の當時の判事は一種の鬘(かつら)なつけたもので、wig を判事、 裁判官といふ意味に用ひたのも此れから來てゐる。

Bassanio, but he knew her not in her disguise. He was standing beside Antonio, in an agony of distress and fear for his friend.

16. The importance of the arduous task Portia had engaged in gave this tender lady courage, and she boldly proceeded in the duty she had undertaken to perform: and first of all she addressed herself to Shylock, and allowing that he had a right by the Venetian law to have the forfeit expressed in the bond, she spoke so sweetly of the noble quality of mercy, as would have softened any heart but the unfeeling Shylock's, saying that it dropped as the gentle rain from heaven upon the place beneath, and how mercy was a double blessing, it blessed him that gave, and him that received it; and how it became monarchs better than their crowns, being an attribute of God Himself; and that earthly power came nearest to God's in proportion as mercy tempered justice; and she bid Shylock remember that as we all pray for mercy, that same prayer should teach us to show mercy.

17. Shylock only answered her by desiring to have the penalty forfeited in the bond.

"Is he not able to pay the money?" asked Portia.

Bassanio then offered the Jew the payment of the three thousand ducats as many times over as he should desire; which Shylock refusing, and still insisting upon having a pound of Antonio's flesh, Bassanio begged

自分が變裝して居るので妻だとは氣が付かなかつた。夫は友アントニオの身の上を思うて心痛に堪へぬ面持でアントニオと並んで立つてゐた。

16. ポーシアは此の困難な仕事に従事して居るので其の責任観念から此の柔和な女性にも勇氣が湧いて雄々しくも果たさうと決心したる義務遂行に着手した、先づシヤイロツクに向つて「我がヴェニスの法律に依り原告には證書に明記されたる科料取得の權利がある」と云ひ、更に言葉を柔らげて「併し人には貴い慈悲の心と云ふものがあつて、情を知らぬ原告の如きはいざ知らず、萬人の心が柔げられるのである、恰も天が慈雨を降らして此の大地を霑ほすが如きものだ、慈悲は之を與ふるものを幸福にし又受くる者をも幸福にする二重の福祉である、慈悲は神の屬性であるが故に王冠にも増して王者に應はしい所以である、慈悲が正義を和ぐるにつれて地上の俗權は神の大權に近きものとなる、我々が慈悲を求めて神に祈念する時、其同じ祈念は我々が人互に慈悲を示さねばならぬ事を敎へるのだ」と諄々説いた。

17. シヤイロックは明文通り科料の取得を欲するの一點張りであつた。ボーシアは「被告は借金の返濟が不能であるか」と尋ねた。バッサニオは猶太人に三千ダカットの何倍でも好み次第支拂ふ旨を申出でた、併しシヤイロックは之を拒否して何處までもアントニオの生肉一封を剝ぎ取らんことを主張したの

in an agony 苦惱の面括で。

<sup>16.</sup> how it became monarchs 慈悲は如何に王者に應はしきものか。

the law a little, to save Antonio's life. But Portia gravely answered that laws once established must never be altered. Shylock hearing Portia say that the law might not be altered, it seemed to him that she was pleading in his favour, and he said, "A Daniel is come to judgment! O wise young judge, how I do honour you! How much elder are you than your looks!"

18. Portia now desired Shylock to let her look at the bond; and when she had read it, she said, "This bond is forfeited, and by this the Jew may lawfully claim a pound of flesh, to be by him cut off nearest Antonio's heart." Then she said to Shylock, "Be merciful; take the money, and bid me tear the bond."

But no mercy would the cruel Shylock show; and he said, "By my soul, I swear there is no power in the tongue of man to alter me."

"Why, then, Antonio," said Portia, "you must prepare your bosom for the knife": and while Shylock was sharpening a long knife with great eagerness to cut off the pound of flesh, Portia said to Antonio, "Have you any thing to say?"

Antonio, with a calm resignation, replied, that he had but little to say, for that he had prepared his mind for death. Then he said to Bassanio, "Give me your hand, Bassanio! Fare you well! Grieve not that I am

18. 此處でポーシアはシャイロツクに其證文を見せよと云うて之を一讀し、「此の證文は科料取得の權利を確定してゐる、此れによつて原告は被告の胸の邊りを切つて生肉一封を取得する權利が立派にある」と云うてシャイロツクに向ひ「慈悲を垂れよ、其金を取つて此證文は破棄しようではないか」と云うた。が、殘忍なシャイロツクは慈悲心を示さうとせず、「斷じて申し上ぐるが俺は人間の舌の力で心を翻へす男では御座りませぬ」ポーシア「それではアントニオ、其方は刀を以て胸の肉を切り取る爲めに熱心に刀を研いで居たが、ポーシアはアントニオに向ひ、「何ぞ云ひ度い事でもあるか」と問へば、アントニオは今は思ひ諦めて容を聞さず答へた、「旣に死の覺悟を致したのでありまするから、格別申すべき事も御座りません」と云うてバッサニオに向ひ、「君の手を握らせて吳れ、バツサニオ、之れで御別れだ、君の爲めに僕が斯うした不幸に陷入つた事を悲しんで

でパツサニオは博學なる此の青年法官に向ひ、アントニオの生命を救ふ為め法律を少々曲げて保護して戴き度いと願ひ出た。 此時ポーシアは嚴然として一度制定されたる法律は變更し難き ものであると答へたので、シャイロツクは此語を聽いて法官は 自分の為めに辯護をして 吳れるのだと思はれたので、「デイニ エル様の再來ぢや、御若い名判官様。實に敬服の至りです。 御 容奏に似合はぬ御老巧な方ぢや」と叫んだ。

<sup>17.</sup> to wrest the law 法を曲げる。

A Daniel = an upright judge. Daniel の如き賢明な判官。

<sup>18.</sup> By my soul I swear, 我が魂に奮つて云ふが、断じて申し上ぐ

るがっ

with calm resignation 思ひ諦めた泰然たる態度で、resignation 断念っ

fallen into this misfortune for you. Commend me to your honourable wife, and tell her how I have loved you!"

Bassanio in the deepest affliction replied, "Antonio, I am married to a wife, who is as dear to me as life itself; but life itself, my wife, and all the world, are not esteemed with me above your life: I would lose all, I would sacrifice all to this devil here, to deliver you."

19. Portia hearing this, though the kind-hearted lady was not at all offended with her husband for expressing the love he owed to so true a friend as Antonio in these strong terms, yet could not help answering, "Your wife would give you little thanks, if she were present, to hear you make this offer."

And then Gratiano, who loved to copy what his lord did, thought he must make a speech like Bassanio's, and he said, in Nerissa's hearing, who was writing in her clerk's dress by the side of Portia, "I have a wife, whom I protest I love; I wish she were in Heaven if she could but entreat some power there to change the cruel temper of this currish Jew."

"It is well you wish this behind her back, else you would have but an unquiet house," said Nerissa.

Shylock now cried out impatiently. "We trifle time;
I pray pronounce the sentence."

Commend me to...に宜敷像へて臭れ。
19. If she could but entreat せめて啖頭でもして臭れられるものなら。

吳れるな、君の立派な細君に宜敷傳へて吳れ、僕が君をどんな に愛してゐたかを話してくれ給へ。」

バツサニオは深い悲痛に沈んで答へた、「アントニオ君、僕は自分の生命と同じ位貴く思ふ妻と結婚したが、僕の生命も僕の妻も乃至此の全世界も僕には君の生命ほどに貴く思はぬ。僕は君を救ふ為めには全てを失つても構はぬ、全てを此處にゐる惡酸奴に犠牲としても厭はぬ。」

19. ポーシアは是を聞いて心の柔しい婦人であるからアントニオの如き真の友に對し斯うした激越な言葉で愛情を披瀝した夫に怒りを覺えるといふ事はないにしても此場合次の様に答ったに居られなかつた、「若し其方の妻が此處に居て、今の言葉を聽いたら、餘り嬉しく思はぬであらう。」

其時グレイシアノは元來が主人のする事を眞似る癖のある男で、自分も主人バツサニオの云うた様な事を云はなければなるまいと思つて、ボーシアの傍で書記の服裝をして筆を走らせてゐた妻ネリサが聽いてゐるとは知らず、「私にも妻がありまして深く愛して居ります、けれども若し妻が此の犬の様な猶太人の殘忍な性質を變へる丈けの力を神様に御强請する事が出來るのなら、妻が世を去つて天國に居てくれりや宜いと思ひますね」と云うたので、ネリサも、「其の様な事は君の細君の居らぬ處で云ふたら差支ないが、左もないと君の一家は不和になりますぜ」と云うた。

シャイロックはもどかしさに怒鳴り出した、「時が費れます、

an unquiet house 家の中がもめる。 We trifle time trifle (時間金銭等を) 徒費する。

And now all was awful expectation in the court, and every heart was full of grief for Antonio.

20. Portia asked if the scales were ready to weigh the flesh; and she said to the Jew, "Shylock, you must have some surgeon by, lest he bleed to death." Shylock, whose whole intent was that Antonio should bleed to death, said, "It is not so named in the bond." Portia replied, "It is not so named in the bond, but what of that? It were good you did so much for charity." To this all the answer Shylock would make was, "I cannot find it; it is not in the bond." "Then," said Portia, "a pound of Antonio's flesh is thine. The law allows it and the court awards it. And you may cut this flesh from off his breast. The law allows it, and the court awards it." Again Shylock exclaimed, "O wise and upright judge! A Daniel is come to judgment!" And then he sharpened his long knife again, and looking eagerly on Antonio, he said, "Come, prepare!"

21. "Tarry a little, Jew," said Portia: "there is something else. This bond here gives you no drop of blood; the words expressly are, 'a pound of flesh.' If in the cutting off the pound of flesh you shed one drop of Christian blood, your land and goods are by the law to be confiscated to the state of Venice."

Now, as it was utterly impossible for Shylock to cut off the pound of flesh without shedding some of Antonio's blood, this wise discovery of Portia's, that it was flesh どうか宣告を與へて下さい」今は滿廷物恐ろし氣に片壁を呑んで控へ、何れもアントニオの爲めに悲嘆に沈んだのである。

20. ボーシアは肉を秤る爲めの秤を用意して居るかと尋ねて「シャイロツク、其方は被告が出血の爲め死亡する事があつてはならぬから外科醫を傍に置かなくてはならぬ」と云うた。シャイロツクの考ではアントニオが出血の爲めに死亡する事が素より望む所なので、「證文には左様な事は記入してありませぬ」と云ふ。ボーシアはそれは記入てない、無くてもよいではないか、慈善の爲め其れ位はしても善かりさうなものだ」云はれてシャイロツクの答は何處までも「さう云ふ事は見つかりません、證文に記入て御座いませんのです」で通した。ボーシアは「然らばアントニオの肉一封は其方のものである、法律はそれを認め、法廷はそれを正しいと判定する」するとシャイロツクは復も叫んだ「オ、賢明公平な判官様、ディニエル様が審判の爲めの再來ぢや」斯う云うて彼は長い刀を復た研ぎ始め、アントニオをぢつと見つめ、「さあ、用意はよいかな」と云うた。

21. 「暫らく待て、シャイロック、まだ云ふ事がある。此の 證文を見るに一滴の血も其方には與へられてない、文句は明か に『肉一封』である。肉一封を切り取る際に、基督教徒の血を一 満たりとも流す事あらば其方の動産も不動産も法律の定むる處 によりヴェニス政府に沒收されるのである。」

アントニオの血一滴も流さずに肉一封を切り取る事はシャイロックの到底能くする處ではなかつたから、證文に書かれてあるのが肉であつて血ではないと云ふポーシアの此發見によりア

award 審査の上決定する。

<sup>20.</sup> bleed to death 出血して死亡する。 what of that? それがどうしたといふのか。

and not blood that was named in the bond, saved the life of Antonio; and all admiring the wonderful sagacity of the young counsellor, who had so happily thought of this expedient, plaudits resounded from every part of the senate-house; and Gratiano exclaimed in the words which Shylock had used, "O wise and upright judge! mark, Jew, a Dadiel is come to judgment!"

22. Shylock, finding himself defeated in his cruel intent, said, with a disappointed look, that he would take the money, and Bassanio, rejoiced beyond measure at Antonio's unexpected deliverance, cried out, "Here is the money!"

But Portia stopped him, saying, "Softly; there is no haste: the Jew shall have nothing but the penalty, therefore prepare, Shylock, to cut off the flesh; but mind you shed no blood: nor do not cut off more nor less than just a pound; be it more or less by one poor scruple, nay, if the scale turn but by the weight of a single hair, you are condemned by the laws of Venice to die and all your wealth is forfeited to the senate."

"Give me my money, and let me go," said Shylock.

"I have it ready," said Bassanio: "here it is."

23. Shylock was going to take the money, when Portia again stopped him, saying, "Tarry, Jew; I have yet another hold upon you. By the laws of Venice,

ントニオの生命は救はれたのである。居並ぶ一同の人々は若年なる此の官法が都合よくも斯かる臨機の名案を思ひついた卓拔な機智を賞讃し、拍手喝采が滿堂に鳴り止まなかつた、グレイシアノはシャイロツクの用ひた言葉を其の儘に、「オ、賢明公平なる判官様、よいか、シャイロツク、ディニエル様の再來だぞよ」と叫んだ。

22. シャイロックは自己の残酷な意圖が總で破れたと見るや、経望の顔色で、其金を頂戴しようと云ひ出した。パッサニオはアントニオの思ひも設けぬ命拾ひに度外れに喜んで、「金は此處にあるぞ」と叫んだ。併しボーシアは彼を押し止めて、「静かに、急ぐ事はない、原告は抵當物たる肉一封の外は受くる權利が無い、故にシャイロック、其方は肉を切り取る用意をせよ、但し血は流してはならぬ、猶また丁度一封の肉を切り取るべきで多くても少くてもならぬし、毛一筋の目方でも秤が傾くならば、其方はヴェニスの法律に依つて死刑の宣告を與へられ、其方の財産は全て國家に沒取されるのである」、シャイロックは、「俺の金だけ御返し下さい、そして歸らせて戴き度いです」、バッサニオ「金はそら此處にちやんとあるよ」と云うた。23. シャイロックが其金を受取らうとすると、ボーシアは再び彼を制止して、「控へよ、シャイロック、其方を取抑へる事がもう一つある。ヴェニスの法律により、其方の財産は全て國

<sup>21.</sup> plaudits=applause 拍手喝采(通常複数の形を用ゐる)

<sup>22.</sup> unexpected deliverance 圖らす助かった事、思ひも設けね命拾ひ。
The Jew shall have nothing 何にも貰ふ譯にはいかね。
Pe it mo e or less by one poor scruple 少しでも多いとか少いと

か云ふ事があつて見よ、scruple=very small quantity 微分量、但し 正確な分量を云へば scruple は薬品などを量る分量の名で 20 grains を云ふ、我國の凡そ三分五厘ほどに當る。

<sup>23.</sup> I have yet another hold upon y u, 共方を抑へる點がまだもう
一つある、hold 摑み所、急所、I have a hold upon him. 急所を 握つてゐる。

your wealth is forfeited to the state for having conspired against the life of one of its citizens and your life lies at the mercy of the duke; therefore, down on your knees, and ask him to pardon you."

The duke then said to Shylock, "That you may see the difference of our Christian spirit, I pardon you your life before you ask it; but half your wealth belongs to Antonio, the other half comes to the state."

The generous Antonio then said that he would give up his share of Shylock's wealth, if Shylock would sign a deed to make it over at his death to his daughter and her husband; for Antonio knew that the Jew had an only daughter, who had lately been married against his consent to a young Christian, named Lorenzo, a friend of Antonio's, which had so offended Shylock, that he had disinherited her.

24. The Jew agreed to this: and being thus disappointed in his revenge, and despoiled of his riches, he said, "I am ill. Let me go home: send the deed after me, and I will sign over half my riches to my daughter."

"Get thee gone, then," said the duke, "and sign it; and if you repent your cruelty and turn Christian, the state will forgive you the fine of the other half of your riches."

The duke now released Antonio and dismissed the court. He then highly praised the wisdom and ingenuity of the young counsellor, and invited him home to dinner.

其時ヴェニス公はシャイロツクに向ひ、「吾々基督教徒の精神が他と異なる事を示さん爲め其方が赦免を乞はずとも其方の生命は助け遺はす、其方の財産の半ばはアントニオに與へ、他の中分は是を國家の有とする」、と云うた。アントニオは度量の廣い男で「若しシャイロツクが死後財産を彼の娘夫婦のものに護り渡すと云ふ證文に署名する事を肯ずるなら、彼が財産の自分に來る分を放棄して宜しいのです」と云うた、蓋しシャイロックに一人の娘があつて基督教徒のロレンツオと云ふアントニオの友人なる青年と近頃父シャイロツクの意志に背いて結婚したので、シャイロツクの怒を買ひ、財産の相續權を剝がれたと云ふ事情をアントニオは知つて居たのである。

24. シャイロックは此の事に同意をした。斯くて復讐の計畫に外れて落膽し、財産を奪はれて仕舞つたので、「氣分が惡う御座いますに依つて歸宅させて戴きます、證書は宅へ送つて戴きますれば娘に財産の半分を遺はす事に署名を致します」、と云ふ、公爵は、「然らば行くがよい、證書に署名は致せよ。其方が己れの不人情を悔いて基督教徒となるならば、國家は其方の財産の半分を沒收するのを免して遺はすであらう」と云うた。

ヴェニス公は次にアントニオを退場させ法廷を閉ぢた。公爵は此の若き代理法官の賢明にして機智あるを太く賞讃して自宅へ正餐に招待した。ボーシアは夫よりも先きに郷里ベルモント

家に没收せらる」のである、理由はヴェニス公民の生命を奪はんとの計畫をなせるが爲めである、其方の生命はヴェニス公のをはウェニス公のという。 との計畫をなせるが爲めである、其方の生命はヴェニス公のという。 というし、というによるのだ、故に膝まづいて、只管赦免を願ふがよい」。

at the mercy of 意の儘。

to make It over to....へ財産を譲り渡す、it=his share of Shylock's

wealth.

<sup>24.</sup> fine 科料罰金。

Portia, who meant to return to Belmont before her husband, replied, "I humbly thank your grace, but I must away directly." The duke said he was sorry he had not leisure to stay and dine with him; and, turning to Antonio, he added, "Reward this gentleman; for, in my mind, you are much indebted to him."

25. The duke and his senators left the court; and then Bassanio said to Portia, "Most worthy gentleman, I and my friend Antonio have by your wisdom been this day acquitted of grievous penalties, and I beg you will accept of the three thousand ducats due unto the Jew."

"And we shall stand indebted to you over and above," said Antonio, "in love and service evermore."

Portia could not be prevailed upon to accept the money; but upon Bassanio still pressing her to accept of some reward, she said, "Give me your gloves; I will wear them for your sake"; and then, Bassanio taking off his gloves, she espied the ring which she had given him upon his finger: now it was the ring the wily lady wanted to get from him to make a merry jest when she saw her Bassanio again, that made her ask him for his gloves; and she said when she saw the ring, "And for your love I will take this ring from you."

26. Bassanio was sadly distressed that the counsellor should ask him for the only thing he could not part with, and he replied in great confusion, that he could

25. 公侍も元老議官も注廷を去つた。後にバッサニオはボーシアに向ひ、「貴下に多大の敬意を表します、私と友人アントニオとは貴下の御智慧に依つて今日重刑を免れました、就てはどうぞ此の猶太人に遺はすべき三千ダカットの金を御納め下さる様」と願うた。アントニオはまた、「私共は是れ所ではない遙に貴下の御恩は負うて居る次第で将來いつまでも貴下を敬愛し御用を勤めなければならぬのです」と云うた。

ボーシアはどうしても其金を受取る事を肯じなかつた。がバッサニオが何か御醴の驗を受けて貰ひたいと猶も强ひて云うたので、ボーシアは、「貴方の手套を戴き度いです、貴方を記念してそれを用ひませう」と云うた。そこでバッサニオは手套を脱いだが其際ボーシアは自分が現在夫に贈つた指環が其指に輝いてゐるのを見た、ボーシアが彼に手套を所望した目的は此の指環なので、後に夫バッサニオに逢ふた時夫を揶揄つてやらうと意地惡くも夫人ボーシアは指環を所望したのである、そこで指環を見て「それでは御好意を無にせぬ様その指環を頂戴しませう」と云うた。

23. バッサニオは手離す事の出來ぬ唯一つの指環を此法官に強請られて進だ當惑してしまった、大分どぎまぎし乍ら「此れ

prevailed upon = persuaded.

へ歸る積りで居たので、「御厚志の段は謹んで御禮を申し上げますが、之れから直ちに當所を去らねばなりませんから」と辭退した。公爵は法官が止まつて食事を共にする暇のないのは殘念至極であると云うて、アントニオに向ひ、「貴下は此の仁に恩報じをするがよい、俺は貴下が此仁に大恩を受けて居る様に思ふのぢや」と附け加へた。

<sup>25.</sup> due unto=due to に営然與ふべき、unto は古い語法o over and above それ所でなくすつと餘計に。

not give him that ring, because it was his wife's gift, and he had vowed never to part with it; but that he would give him the most valuable ring in Venice, and find it out by proclamation.

On this Portia affected to be affronted, and left the court, saying, "You teach me, sir, how a beggar should be answered."

"Dear Bassanio," said Antonio, "let him have the ring; let my love and the great service he has done for me be valued against your wife's displeasure."

Bissanio, ashamed to appear so ungrateful, yielded, and sent Gratiano after Portia with the ring; and then the clerk Nerissa, who had also given Gratiano a ring, she begged his ring, and Gratiano (not choosing to be outdone in generosity by his lord) gave it to her. And there was laughing among these ladies, to think, when they got home, how they would tax their husbands with giving away their rings, and swear that they had given them as a present to some woman.

27. Portia, when she returned, was in that happy temper of mind which never fails to attend the consciousness of having performed a good action; her cheerful spirits enjoyed everything she saw: the moon never seemed to shine so bright before; and when that pleasant moon was hid behind a cloud, then a light which she

は妻からの贈物で決して手離さぬと誓つた品ですから差上げら れないのです、併しヴェニス中で一番高價な指環を廣告して探 し出して差し上げませう」と云うた。此を聞いてポーシアは侮 辱を受けた様な風を裝うて法廷を去り乍ら云うた、「貴下は乞 食を斷はるよい方法を教へて下すつた」。アントニオは、「パツ サニオ君、指環を與へて仕舞ひ給へな、僕の君に對する誠意、 僕が彼の人から受けた大恩誼は君の細君の不興以上に値を踏ん で貰いたい」、と云うたのでパッサニオは恩誼を忘れた様に思 はれるのを愧ぢ、承諾してグレイシアノに其指環を持つて後を 追はせた。それから書記に扮したネリサもグレイシアノに指環 が與へてあつたのでやはり指環を强請った、そこでグレシアノ は氣前の良い點で主人パツサニオに引けを取り度くないと思つ てネリサにそれを與へて仕舞つた。扨て斯うして宅へ歸つてか ら指環を與へて仕舞つたと云ふ點で各々夫を責め立て何人か女 に贈物として與つたのに違ひないときつばり云ひ放つたら面白 い事だらうと此の二人の人妻等は笑ひ興じた。

27. ボーシアは歸宅する時に善根を施したと云ふ意識に必 す伴うて起るあの嬉しい氣持に心浮いたのである、快活な元氣 もて見るもの聞くものを樂しんだ、月光も未だ曾て此夜ほど郷

<sup>26.</sup> affectel to be affronted 侮辱を加へられたといふ風を装ふ affronted = insulted.

not choosing to be outdone in generosity by his lord, generosity 氣前のよい事、be outdone by his lord 主人にひけをとる。

tax....with の點で攻めつける。

swear それに違ひないときつばり云ひ切る。

<sup>27.</sup> never fails to attend 必ず件ふっ

her cheerful spirits enjoyed everything she saw 浮き立つ心で見れば眼に入るもの何でも樂しく見えた。

saw from her house at Belmont as well pleased her charmed fancy, and she said to Nerissa, "That light we see is burning in my hall; how far that little candle throws its beams, so shines a good deed in a naughty world." And hearing the sound of music from her house, she said, "Methinks that music sounds much sweeter than by day."

28. And now Portia and Nerissa entered the house, and, dressing themselves in their own apparel, they awaited the arrival of their husbands, who soon followed them with Antonio; and Bassanio presenting his dear friend to the Lady Portia, the congratulations and welcomings of that lady were hardly over, when they perceived Nerissa and her husband quarrelling in a corner of the room.

"A quarrel already?" said Portia. "What is the matter?"

Gratiano replied, "Lady, it is about a paltry gilt ring that Nerissa gave me, with words upon it like the poetry on a cutler's knife; Love me, and leave me not."

29. "What does the poetry or the value of the ring signify?" said Nerissa. "You swore to me, when I gave it to you, that you would keep it till the hour of death; and now you say you gave it to the lawyer's clerk. I know you gave it to a woman."

"By this hand," replied Cratiano, "I gave it to a

as well (我家の燈火り月光に) 劣らず、同じ程に。

いて見えた事が無い、樂しい月輪が雲間に隠れるとベルモントの我家から洩れ來る燈火も月光に劣らず彼女の有頂天な戀を喜ばせた、ネリサに向つて云ふ、「彼處に見える燈火は家の廣間の燈火ですよ、あんな小さい蠟燭がまあこんな遠くまで光りを送るのですね、濁つた浮世に善い行と云ふものは丁度あの様に輝くのです」その内に自分の家から音樂の響が聞えて來たので「あの音樂も今頃の方が書の間よりもずつと美しく響く様に思はれますわ」と云うた。

23. 其内にボーシアとネリサは家へ入り銘々の衣服に着換へて夫等の歸宅を待ち受けた、彼等も間もなくアントェオと連れ立つて戻つて來た、バツサニオは親友アントニオを妻ボーンアに引合せ、ボーシアも、祝辭やら觀迎の辭やらを述べて居ると、早やくも部屋の片隅でネリサ夫婦が云ひ箏つて居るを見た。もう喧嘩ですか、どうしたと云ふのです」とボーシアは零ねた、グレイシアノは答へて、「奥様、ネリサが私に異れました些細な渡金の指環の事なんです、双物師が小刀に書きつける詩の様に『宜愛、勿棄』の文が彫んであつた品なんです」。
29. ネリサはすかさず、「その指環の文句はどう云ふ意味です?指環の價値をどう見てゐるのですか。妻が貴方に進んぜた時死の間際まで手離す事ではないと御誓ひなされた。今になつて法律家の書記に與つたなんぞと、きつと女にやつて仕舞つた

so shines a good deed in a naughty world 邪な浮世に善行の輝くのは丁度もの通り。

Me'hinks=it seems to me. 古い語法で無人稱動詞、過去形は me-thought=it seemed to me.

<sup>28.</sup> presenting = introducing 引合せてo

youth, a kind of boy, a little scrubbed boy no higher than yourself; he was clerk to the young counsellor that by his wise pleading saved Antonio's life: this prating boy begged it for a fee, and I could not for my life deny him."

Portia said, "You were to blame, Gratiano, to part with your wife's first gift. I gave my lord Bassanio a ring, and I am sure he would not part with it for all the world."

Gratiano, in excuse for his fault, now said, "My lord Bassanio gave his ring away to the counsellor, and then the boy, his clerk, that took some pains in writing, he begged my ring."

30. Portia, hearing this, seemed very angry, and reproached Bassanio for giving away her ring; and she said Nerissa had taught her what to believe, and that she knew some woman had the ring.

Bassanio was very unhappy to have so offended his dear lady, and he said, with great earnestness, "No, by my honour, no woman had it, but a civil doctor, who refused three thousand ducats of me, and begged the ring, which, when I denied him, he went displeased

のです」グレイシアノは、「此の手で若者にこれを與つたのだよ、まだ小供だ、お前と背丈けが同じ位の小僧つ子なんだ、共男は巧く辯護をやつてアントニオさんの生命を救つてくれた若い法律家の書記なんだ、此の口の達者な若僧が御禮に指環を異れた強請つたんだ、どうしても私は斷れなかつたのだ」と答へた。ボーシアは「グレイシアノさん、妻の初めての贈物を手離して仕舞ふと云ふのは貴方が悪るいのです。妾は夫のバツサニオに指環を上げましたが、世界を與るからと云はれても夫はそれを手離す事ではないわ」と云うた。グレイシアノは自分の過失の云ひ譯に云うた、「御主人のバツサニオ様も指環を其の法律家に贈つて仕舞はれたのです、それで書記の若僧が筆記をした骨折賃に指環を强請つたのです」。

30. ボーシアは此れを聞いて怒つた風をして夫が指環を他へ與つたのを難じた、「何う思うて宜いかネリサがちやんと教へて哭れました、あの指環を他の女が所持てゐるのをネリサは知つて居ます」とやつた。バツサニオは愛しい妻を斯うまで怒らせてしまつたのに甚だ當惑して大真面目になつて、「否、私は名響にかけて誓ふが婦人には與らぬ、法律博士が私の出した三千ダカツトの金を受取らず、あの指環を異れいと云うたの

<sup>29.</sup> prating べらべらしやべる、口達者な。

for a fee 謝禮に。

for my life 命がけでも、どうしても。

You were to blame 貴方が悪るかつた、to be blamed とならのに注意。

for all the world 世界を興るからと云はれてもそれと引き換へに、 どんな誘惑を受けても、for my life と同じ行き方。 took some pains 幾らか骨を折つた。

<sup>30.</sup> by my honour 名響こかけて云ひますが、断じて云ふが。 a civil doctor =a doctor of the Civil Law.

I was so beset with shame 恥かしくて仕嫌がなかつた。to be beset with に聞まれる。つきまとはれる。

seeming ingratitude 恩知らずと見られる事。

away. What could I do, sweet Portia? I was so beset with shame for my seeming ingratitude, that I was forced to send the ring after him. Pardon me, good lady; had you been there, I think you would have begged the ring of me to give the worthy doctor."

31. "Ah!" said Antonio, "I am the unhappy cause of these quarrels."

Portia bid Antonio not to grieve at that, for that he was welcome notwithstanding; and then Antonio said, "I once did lend my body for Bassanio's sake; and but for him to whom your husband gave the ring I should have now been dead. I dare be bound again, my soul upon the forfeit, your lord will nevermore break his faith with you."

"Then you shall be his surety," said Portia; "give him this ring, and bid him keep it better than the other."

When Bassanio looked at this ring, he was strangely surprised to find it was the same he gave away; and then Portia told him, how she was the young counsellor, and Nerissa was her clerk; and Bassanio found, to his unspeakable wonder and delight, that it was by the noble courage and wisdom of his wife that Antonio's life was saved.

32. And Portia again welcomed Antonio, and gave

だ、與れぬと云うたら不快氣に去つて仕舞つた。仕方がなかつたのだよ、ボーシア、私が恩知らずと思はれるのがどうにも恥かしくて、餘儀なく指環を持たせて後を追はせたのさ、免してあるはせなれ、ボーシア、お前が居合でもすればもの立派な博士に指環をやつてくれと頼んだだらうと思ふ」。

31. アントニオは傍から、「ア、、かう云ふ筝ひの原因はとは云へば此の私なのです」と云うた。

ボーシアはアントニオに辛く思つて下さるな、何は鬼もあれ ほんとによく御來で下すつたのです、と云ふ、そこでアントニ オは、「私は一度パツサニオ君の爲めに此の身體をお貸しした のです、指環を異れと云つたあの法律家が居なかつたなら、私 は今時分は死んで居たでせう、私は此の魂を抵當にして再び誓 つて申しますが、御主人は此れからさき決して、貴女との誓約 を破る事はないでせう」ボーシアは「では貴方に保證人になっ て戴きます。此の指環を良人に御波し下さい、そして前のより も此れをもつと大事にする樣仰つて下さい」と云うた。

パツサニオは此の指環を見ると自分が與つてしまつた指環と同じ物なのでどうしても合點が行かなかつた、そこでポーシアは自分が其の法律家であつた事、ネリサが其書記であつた事などを打明けた、パツサニオはアントニオの生命が放はれたのは自分の妻の尊い勇氣と智慧とによるのだと知つて、云ふべき言葉の無い程驚きもし喜びもした。

32. ポーシアは改めてアントニオに歡迎の挨拶を述べて或

You shall be his surety 遺方に良人の保證人になつて戴きます。 the other 先きの指環。

had you been there = if you had been there.

<sup>31.</sup> but for him = if it had not been for him あの人が居なかったら。
I dare be bound again 私は再び簪って云ふ。
my soul upon the forfeit 私の魂を揺當にして。

him letters which by some chance had fallen into her hands, which contained an account of Antonio's ships, that were supposed lost, being safely arrived in the harbour. So these tragical beginnings of this rich merchant's story were all forgotten in the unexpected good fortune which ensued; and there was leisure to laugh at the comical adventure of the rings, and the husbands that did not know their own wives: Gratiano merrily swearing, in a sort of rhyming speech, that

So sore, as keeping safe Nerissa's ring.

AND THE PROPERTY AND ADDRESS OF THE PARTY OF THE PARTY.

る機會から手に入つた手紙をアントニオに渡した、此れはアントニオの船が駄目になつたものと思はれて居たのに無事に港に着いたと云ふ報知であつた。かくて富裕の商人アントニオの身の上は初め悲惨な運命かと見えたのに圖らず續いて來た幸福に一切の悲運を忘れてしまつた、で今は寬いで滑稽な指環の一件をできた。や夫等が現在自分の妻を知らなかつた事などに笑ひ興じた、グレイシアノは樂し氣に節付けて、

---生ある限り、我妻ネリサの贈る 此の指環を大事にして行く位 世に恐ろしい事はまたとあるまじ

といふ様な文句を語氣を强めて歌ひ出でた。

there were leisure to laugh 笑ひ輿する餘裕があつた、打選いで笑 ひ輿するのであつた。

<sup>32.</sup> by some chance 何かの機會(はづみ)で。

## THE TEMPEST

1. There was a certain island in the sea, the only inhabitants of which were an old man, whose name was Prospero, and his daughter Miranda, a very beautiful young lady. She came to this island so young, that she had no memory of having seen any other human face than her father's.

They lived in a cave or cell, made out of a rock; it was divided into several apartments, one of which Prospero called his study; there he kept his books, which chiefly treated of magic, a study at that time much affected by all learned men: and the knowledge of this art he found very useful to him; for being thrown by a strange chance upon this island, which had been enchanted by a witch called Sycorax, who died there a short time before his arrival, Prospero, by virtue

## 暴風物語

1. 沖合に或る一つの島が浮んで居て、其の住民といへば、 プロスペロと申す老人と縹緻の勝れて躍はしい娘ミランダとの 二人だけであつた。娘が此の島へ來たのは極く幼い頃であつた から、父の顏以外には人の顏といふものを見たといふ記憶はま るで無かつたのである。

親娘の者は巖石で出来てゐる洞窟か穴倉といった様な處に住んでゐた、此れは數個の部屋に分れてゐて、其の中の一つを老人は書齋と呼んで居たが、書物殊に魔術を扱つた様な書籍類が備へてあつた、魔術といへば當時學者たちが皆な大いに興味を以て研究したものである。そして此の魔術の知識は自分に頗る有益である事を知つたのである。それは不思議な機會で此島へ來たのだが、來る少し前に死んだシコラツクスと呼ぶ魔女の妖術を以て支配されてゐた島であつた。プロスペロは己れの魔力

much affected 大いに愛好された。
the knowledge of this art は found の object.
a witch 魔女。この男性は a wizard.
by virtue of の力で。

<sup>1.</sup> treat of = deal with (何々の問題を 扱ふ、論する(本に何問題が) 述べてある。

of his art, released many good spirits that Sycorax had imprisoned in the bodies of large trees, because they had refused to execute her wicked commands. These gentle spirits were ever after obedient to the will of Prospero. Of these, Ariel was the chief.

2. The lively little sprite Ariel had nothing mischievous in his nature, except that he took rather too much pleasure in tormenting an ugly monster called Caliban, for he owed him a grudge because he was the son of his old enemy Sycorax. This Caliban, Prospero found in the woods, a strange misshapen thing, far less human in form than an ape; he took him home to his cell, and taught him to speak; and Prospero would have been very kind to him, but the bad nature which Caliban inherited from his mother Sycorax, would not let him learn any thing good or useful: therefore he was employed like a slave, to fetch wood, and do the

を用ひてかのシコラツクスが自分の非道な命令に従ふ事を拒ん だといふ理由で大木の樹幹に押し籠めて置いた多數の性質の良い妖精どもを自由な身に解き放つてやつたといふ事があるからである。其れ以來此等の從順な妖精どもはプロスペロの思ふ通りに素直になつてゐた。

妖精どもの頭分はエイリエルといふものであつた。

2. エイリエルは快活な小さい妖精で、性質に邪悪な點は少しもないが、たドカリバンと呼ぶ醜い怪物が彼の以前の敵シコラツクスの遺子であるが故に怨恨を含んでゐるといふ譯でカリバンを虐める事にちと興味を持ち過ぎるといふ點に難があつただけだ。此のカリバンはプロスペロが森の中で見つけたもので外貌は猿よりももつと人間に縁遠いといふ憐れ不思議な代物であつた。プロスペロは洞窟へ連れ戻つて口のきょ様を教へ込んだ。彼にどんなにも親切を盡してやり度いのであつたがカリバンは母シコラツクスから悪い性質が遺傳してゐて善い事や役に

wicked commands 没義道な命令。 ever after それ以來常に。

<sup>2.</sup> spirite (sprait) spirit b sprite b共に氣、呼吸(い). 生命などを意味するラテン語 spirit us より出たもので、此處では共に精靈、妖精、魙物などの意。

he owed him a grudge. he は Ariel, him は Caliban, 彼はカリス

ンに怨みを含んでゐた。

misshapen misshape (畸形に造る、作り損ふ)の過去分詞形。

far less human than an ape 猿より遙に人間に綠遠い、ape 尾無し猿。

Prospero would have been very kind to him. (若しカリバンの性質がよくて物を疑えるなら)プロスペロは彼にどんなにでも親切を塾してやつたであらうが。

most laborious offices; and Ariel had the charge of compelling him to these services.

When Caliban was lazy and neglected his work, Ariel (who was invisible to all eyes but Prospero's) would come slily and pinch him, and sometimes tumble him down in the mire; and then Ariel, in the likeness of an ape, would make mouths at him. Then swiftly changing his shape, in the likeness of a hedgehog, he would lie tumbling in Caliban's way, who feared the hedgehog's sharp quills would prick his bare feet. With a variety of such like vexatious tricks Ariel would often torment him, whenever Caliban neglected the work which Prospero commanded him to do.

3. Having these powerful spirits obedient to his will, Prospero could by their means command the winds, and the waves of the sea. By his orders they raised a violent storm, in the midst of which, and struggling with the wild sea-waves that every moment threatened to swallow it up, he showed his daughter a fine large

立つ事を覺えられなかつたのである。そこで薪を取つて來たり 其他一番骨の折れる仕事などに奴隷同様に使役される事になつ た。エイリエルは彼に厭でも此等の仕事をさせる様面倒を見た のである。

カリバンが怠けて仕事を等関にしたりすると、エイリエルは(プロスペロ以外の者には誰の目にも見えないのであつたが)内密とやつて来て彼を捻つたり、時には泥濘の中へ突き倒したりするのであつた。さうして置いてエイリエルは猿の姿になつて現はれ口を色々に歪めて彼を馬鹿にしたりするのであつた。それからまた急に形を變へて猬の姿になつてカリバンの通る途に轉つてゐたりするので、猬の刺々した針毛が跣足で歩く彼の足の裏に刺さるだらうと恐ろしがつたのである。斯様な風に苛遇つける方法を色々と用いてはプロスペロが爲ろと云ひつけた仕事を怠つたりする時に屢々カリバンを苦しめるのであつた。

3. かうした有力な妖精どもを自分の意志のま」に随へて仕舞つたので、プロスペロは彼等の力を利用して自由に風を捲き起したり、海上に波濤を起したりする事が出來た。妖精どもは彼の命を受けて激しい暴風を吹き起したが其の最中に、海上に船一つ、今にも此れを呑まんづと逆卷く怒濤を相手に戦ふ様を見、プロスペロは娘ミランダを呼んでその立派な大船を指しあ

Ariel had the charge of compelling... エイリエルは強いても彼に仕事をさせる様面倒を見た。

in the likeness of の姿になって、likeness は外貌、An enemy in the likeness of a friend 味方と見せて實は敵。

make mouths at him. 彼に對し色々に口を歪めて見せる(輕蔑の表情)。

sharp quills 刺々(とげとげ)した針毛。

a variety of 色々の、様々の。

<sup>3.</sup> by their means 妖精どもを手先きに使って。

that every moment threatened to swallow it up. 今にも共船を 春まんとする勢を示す、it=a fine large ship.

ship, which he told her was fall of living beings like themselves. "O my dear father," said she, "if by your art you have raised this dreadful storm, have pity on their sad distress. See! the vessel will be dashed to pieces. Poor souls! they will all perish. If I had power, I would sink the sea beneath the earth, rather than the good ship should be destroyed, with all the precious souls within her."

"Be not so amazed, daughter Miranda," said Prospero; 
"there is no harm done. I have so ordered it, that no person in the ship shall receive any hurt. What I have done has been in care of you, my dear child. You are ignorant who you are, or where you came from, and you know no more of me, but that I am your father, and live in this poor cave. Can you remember a time before you came to this cell? I think you cannot, for you were not then three years of age."

- 4. "Certainly I can, sir," replied Miranda.
- "By what?" asked Prospero; "by any other house

れには自分等と同様に生きた人々が多數乗つて居るのだと告げた。聞いて娘は、「まあ御父様、あなたのお力で此の様な恐ろしい暴風を起したのなら彼の人達の難儀を憐れと思召して下さい。あれ、あの船は滅茶々々に碎けて仕舞ふでせう。可哀相な人達、皆んな死んで仕舞ひます。妾に力があるなら海を地の下に埋めて貴い生命を澤山に乗せてゐるこの立派な船を亡ぼさぬ様にし度いものです。」と云うた。

プロスペロは「ミランダ、そんなに氣を揉まないでよい、何にも危害は加へらればせぬ。船に乗つてゐる人には一人でも害を與へてはならぬと命じて置いた。斯う為たのも皆なお前を可愛く思へばこそなのだよ、ミランダ。お前は自分が誰であるのやら何處から來たのやら知らないのだ、予はお前の父親で此のあばれな洞穴に住んでゐる人間だと云ふ事しかお前はこの字に就ては知らないのだ。お前は此の洞穴へ來る前の時分の事が思ひ出せるかね。覺えがなからうな、當時はまだ三歳になつてゐなかつたからな。」

4.「確かに覺えてゐます」とミランダは答へた。

「何で思ひ出すかね。他方の家とか他所の人とか云ふので覺

but that = except that.

within her=within the ship. ship は中性 it を以て示すこともあり、 また女性 she を以て受けることもある。

or person? Tell me what you can remember, my child."

Miranda said, "It seems to me like the recollection

of a dream. But had I not once four or five women

who attended upon me?

Prospero answered, "You had, and more. How is it that this still lives in your mind? Do you remember how you came here?"

"No, sir," said Miranda, "I remember nothing more."

"Twelve years ago, Miranda," continued Prospero,
"I was duke of Milan, and you were a princess, and
my only heir. I had a younger brother, whose name
was Antonio, to whom I trusted every thing; and as I
was fond of retirement and deep study, I commonly
left the management of my state affairs to your uncle,
my false brother (for so indeed he proved). I, neglecting
all worldly ends, buried among my books, did dedicate
my whole time to the bettering of my mind. My brother
Antonio being thus in possession of my power, began
to think himself the duke indeed. The opportunity I

えてゐるのかね。どう云ふ事を思ひ出すのか云うて御覽な。」と 尋ねた。

ミランダ「何か夢の思出とでも云つた様にぼんやりしてゐま すの。けれども四五人の女中が妾に附いて居た事があつたでせ 5?」

プロスペロ「あつたよ、もつとゐた。どうして其んな事が今 頃お前の心に殘つて居るかな。お前はどうして此處へ來たのか 覺えてゐるかね。」

「い」えお父様、其他には何にも覺えがありませんの。」

プロスペロは話を續けて、「十二年前には予はミランの領主公 倒であつた、お前は公爵の姫君でたつた一人の世機娘であつた のだ。予にアントニオと云ふ弟があつて何もかもこれに置せて 置いたものだ。予は引込んでゐて心靜かに勉强するのが好きで あつたから平素國務の處理はお前の叔父に當る予の弟に任せた のだ、此れが事實腹黑い弟であつたのだ。予は浮世の目的など 云ふものをすべて等閑にして書物の中に埋もれ毎日を専ら精神 の修養に捧げたのだ。弟アントニオは斯うして予の權力を握つ たので、自分が實際領主になつたやうに思ひ始めたのだ。予の

the bettering of my mind 精神の修養。

<sup>4.</sup> women who attended upon me 妾付きの女中。
retirement and deep study 俗事を離れて心靜かに學問をする。

gave him of making himself popular among my subjects awakened in his bad nature a proud ambition to deprive me of my dukedom: this he soon effected with the aid of the king of Naples, a powerful prince, who was my enemy."

5. "Wherefore," said Miranda, "did they not that hour destroy us?"

"My child," answered her father, "they durst not, so dear was the love that my people bore me. Antonio carried us on board a ship, and when we were some leagues out at sea, he forced us into a small boat, without either tackle, sail, or mast: there he left us, as he thought, to perish. But a kind lord of my court, one Gonzalo, who loved me, had privately placed in the boat, water, provisions, apparel, and some books which I prize above my dukedom."

"O my father," said Miranda, "what a trouble must I have been to you then!"

臣下等の間に人望を得る機會を彼に與へてやつたのが性根の惡い彼の心に予が領土を予の手より奪ひ取らうと云ふ增長した野心を懐かしめたのだ。當時の予が敵であつた有力な君主ネープルス王の援助を得て間もなく弟は其の野心を果たしてのけたのちゃ。」

5. 「何故その人達は其時に妾達を皆んな殺して仕舞はなか つたのでせう」とミランダは尋ねた。

父は此れに答へて、「それは思ひ切つて出来なかつたのだ、予の人民たちが深くも予を愛して居たからだ。アントニオは予たちを船に乗せて連れ出し海上幾浬も往つた頃に弟は予たちを强いて帆綱も帆も帆橋も無い小舟に乗り移らせ、死ぬるものと思うて共儘置きざりにしたのだ。併し予の宮廷に仕へた重臣で心の優しいゴンザアロといふ忠義者が密かに飲料水や食物衣服、さては予が領土よりも愛としく思ふ書物をは幾冊かと共に其の小舟に入れて置いて臭れたのちゃ。」

ミランダ「まあお父様、其時は姿といふものが暗分足手纏ひ になつたでせうね。」

making himself popular among my subjects 子の臣下等の間に彼を人望のある様にしてやる。

<sup>5.</sup> provisions 糧食、食物。 appareD 衣服。

which I prize above my dukedom 予の全領土以上に愛としく思ふ、prize 珍重する。

a trouble 厄介物、足手纒ひ。

"No, my love," said Prospero, "you were a little cherub that did preserve me. Your innocent smiles made me to bear up against my misfortunes. Our food lasted till we landed on this desert island, since when my chief delight has been in teaching you, Miranda, and well have you profited by my instructions."

"Heaven thank you, my dear father," said Miranda.

"Now pray tell me, sir, your reason for raising this sea-storm?"

6. "Know then," said her father, "that by means of this storm, my enemies, the king of Naples, and my cruel brother, are cast ashore upon this island."

Having so said, Prospero gently touched his daughter with his magic wand, and she fell fast asleep; for the spirit Ariel just then presented himself before his master, to give an account of the tempest, and how he had disposed of the ship's company, and though the spirits were always invisible to Miranda, Prospero did not

ミランダ「まあ、何と有難い事で御座いませう。それからお 父様、此の様な暴風をお起しなされた譯をお話し下さりませ。」

6. 父「では此れだけ話しておく、此の暴風の爲めに怨あるかのネーブルス王と非情の弟アントニオとが此島の磯邊へと吹き寄せられたのぢや。」

さう云うてプロスペロは魔法の杖で娘の身體に静に觸れた、すると娘は熟睡に陷つた、それは丁度其時に妖精のエイリヱルが、暴風の模様を傳へ其船に乗り組んでゐる人達を處理した次第などを述べる爲めに主人プロスペロの前に姿を現はしたからである。此の妖精どもはミランダの眼には何時も見えはしなかったのだが、プロスペロは何もない空と話をしてゐる(と娘に

<sup>「</sup>いやミランダ、お前は予の心を引立て」異れた小さな天使であったのだ。お前のあどけない笑顔を見ては身の不運を凝っと依へる氣になったのだ。予たちの食物は此の佗しい孤島に上陸する迄あった、夫れから後は予の何よりの樂しみは、ミランダ、お前を教へ導いて行く事であって、またお前は立派に予の教育の効顯を見せていったのだ。」とプロスペロは話した。

that did preserve me 子の元氣を引立て臭れた。

to bear up against my misfortunes 身の不幸を物とも思はす忍耐する。

your reason for raising this sea-storm 何で海上に斯う云ぶ暴風

<sup>(</sup>あらし)をお起しなさるのか。

<sup>6.</sup> are cast ashore 磯邊へ吹き寄せられてゐる。

choose she should hear him holding converse (as would seem to her) with the empty air.

"Well, my brave spirit," said Prospero to Ariel, "how have you performed your task?"

Ariel gave a lively description of the storm, and of the terrors of the mariners; and how the king's son, Ferdinand, was the first who leaped into the sea; and his father thought he saw his dear son swallowed up by the waves and lost. "But he is safe," said Ariel, "in a corner of the isle, sitting with his arms folded, sadly lamenting the loss of the king, his father, whom he concludes drowned. Not a hair of his head is injured, and his princely garments, though drenched in the seawaves, look fresher than before."

7. "That's my delicate Ariel," said Prospero. "Bring him hither: my daughter must see this young prince.
Where is the king, and my brother?"

"I left them," answered Ariel, "searching for Ferdinand, whom they have little hopes of finding, thinking 思はれるであらうが)のを娘に聴かれるのが厭であつたのだ。 「やあ、勇ましい奴、どう云ふ風にお前の仕事をやつたかね」 とプロスペロはエイリエルに尋ねた。

ェイリエルは暴風の模様や水夫たちの恐怖の狀、さてはネーブルス王の子ファーディナンドが真先きに海中へ跳び込んだ次第や、又父王は愛とし兒の浪に吞まれて行衛が解らなくなつた態を見た様に思つたといふ様な事を眼の當り見るやうに説明をした、エイリエルは更に述べて「併し王の息手は島の片隅へ無事に着きまして腕を組んで座したま」、父王が溺れ死んだものと思つて嘆き悲しんで居ります。息子は頭髪一筋も損じてはるません、王子の立派な衣服も浪に浸つて濡れてはゐますが、前よりも一段鮮かに見えるのです。」

7. 「でかしたぞヱイリヱル、王子を此方へ連れて來てくれ。 娘を其若い王子に是非會はしてやるのぢや。王は何處に居る か、予の弟は。」とプロスペロは尋ねた。

ェイリヱル「私は皆の者をばファーディナンドの行衛を探すま」に棄て、置きました。皆王子の死ぬのを見たのだと思うて、

a lively description 實狀を眼(\*)の當り見る機な説明。 with his arms folded 腕を組んで。

whom he concludes drowned 父は死んだと思ひ込む。
7. That's my delicate Ariel それでこそでかしたぞ。

they saw him perish. Of the ship's crew not one is missing; though each one thinks himself the only one saved: and the ship, though invisible to them, is safe in the harbor."

"Ariel," said Prospero, "thy charge is faithfully performed; but there is more work yet."

"Is there more work?" said Ariel. "Let me remind you, master, you have promised me my liberty. I pray, remember, I have done you worthy service, told you no lies, made no mistakes, served you without grudge or grumbling."

8. "How now!" said Prospero. "You do not recollect what a torment I freed you from. Have you forgot the wicked witch Sycorax, who with age and envy was almost bent double? Where was she born? Speak; tell me."

"Sir, in Algiers," said Ariel.

"O was she so?" said Prospero. "I must recount what you have been, which I find you do not remember.

not one is missing 行衞不明の者は一人もない。 thy charge is faithfully performed お前は命じられた通り忠實に 探し出せるものとは殆んど考へて居りません。船の栗組員には一人も行衛の解らぬ者はありません。但し各自が自分一人だけ助かつたものと思つて居るのです。そして船は人々の眼には見えぬが無事に港に着いて居るのです。」

プロスペロは「エイリヱル、お前に頼んだ事は忠實にやつて 契れた。だがもつと爲る事があるのだ」と云うた。

「まだ為る事があるのですか。お忘れなすつては不可ませんね、お師匠さん、私を自由にしてやるとお約束なされたのです。 私が立派にお勤めを果した事、虚言を申上げた試もなく爲損じもす、苦情も愚痴も云はずに御奉公を申した事をどうぞお忘れのない様に。」

別プロスペロは是を聞いて、「何んぢやと。どんな苦みからお前を救うてやつたか忘れとるな。老耄で嫉妬心の强い殆ど二重に を救うてやつたか忘れとるな。老耄で嫉妬心の强い殆ど二重に 腰の屈つた性悪婆のシコラックスを忘れたな。あの婆の生れ は何處ぢや、話せ、云うて見い。」

ヱイリヱル「アルジ,ズ生れで御座います。」

プロスペロ「お」、さうであつたか、お前は覺えて居らぬからお前の前身が何であつたか詳く説明せねばならぬ。例の性惡

やつた。

famshone from a place = leptle

- 160 -

This bad witch, Sycorax, for her witch-crafts, too terrible to enter human hearing, was banished from Algiers, and here left by the sailors; and because you were a spirit too delicate to execute her wicked commands, she shut you up in a tree, where I found you howling. This torment, remember, I did free you from."

"Pardon me, dear master," said Ariel, ashamed to seem ungrateful; "I will obey your commands."

9. "Do so," said Prospero, "and I will set you free."

He then gave orders what further he would have him

do; and away went Ariel, first to where he had left

Ferdinand, and found him still sitting on the grass in

the same melancholy posture.

"O my young gentleman," said Ariel, when he saw him, "I will soon move you. You must be brought, I find, for the Lady Miranda to have a sight of your pretty person. Come, sir, follow me." He then began singing.

"Full fathom five thy father lies:

婆のシコラックスは人が是を耳にするのも恐ろしい魔術をやるものだからアルジ・ズから追拂れたのだ、そして水夫共に此島へ捨てられたのだ。それでお前は餘り織弱い性分であの婆の邪な命令通り行ひ得ぬ奴だから、木を割つて中へ閉ぢ込められて仕舞ふたのだ、で其の中にお前が喚いてゐるのを予は見つけたのだ。お前は斯ういふ苦しみから予に助け出された事を忘れるなよ。」

ェイリェルは恩知らずと見られるのを愧かしく思ひ「お師匠 さん、堪忍して下さい、御命令には背きませぬ。」

9. プロスペロ「さうして異れ、あとは自由にしてやる。」其 處で之れから彼に為て貰ひ度いと思ふ事を命令した。エイリエ ルは先づファーディナンドを置いて來た場所へと去つて行つた。 すると以前の通り思ひに沈んだ様子でまだ草原に腰を下ろして ゐるのを見た。

マイリヱルは彼を見ると直ぐ、「あ」お若い旦那、首に貴方を お連れ申します。是非お越し下さい、ミランダ姫が貴方の立派 なお姿を一目見度いとの仰せです。サア私に附いて御出で下さ い。」と云うて歌ひ出した。

そなたの親父は五尊も

<sup>8.</sup> for her witch-crafts 色々の魔術を行ふ為めに。
too delicate to execute....commands 餘り織弱(かよは)いたち

で命令通り行ひ得ぬ。

<sup>9.</sup> what further he would have him do. 是れから先き猶ほエイリエルに爲て貰ひ度いと思ふ事。

Of his bones are coral made;

Those are pearls that were his eyes:

Nothing of him that doth fade,

But doth suffer a sea-change

Into something rich and strange.

Sea-nymphs hourly ring his knell:

Hark! now I hear them, — Ding-dong, bell."

10. This strange news of his lost father soon roused the prince from the stupid fit into which he had fallen. He followed in amazement the sound of Ariel's voice, till it led him to Prospero and Miranda, who were sitting under the shade of a large tree. Now Miranda had never seen a man before, except her own father.

"Miranda," said Prospero, "tell me what you are looking at yonder."

"O father," said Miranda, in a strange surprise, "surely that is a spirit. Lord! how it looks about! Believe me, sir, it is a beautiful creature. Is it not a spirit?"

Full fathom five たつぶり五縁。 a sea-:hange = a change in the sea 鹹水に浸って變化すること。

10. 行簡を失うた父に就ての斯様な不思議な消息を聞いて王子は心を引立て、此れまで打ち沈んでゐた茫然した氣持を振り拂つた。そして驚き乍らもエイリヱルの聲のする方に追いて行った。やがてブロスペロとミランダとが大きな樹蔭に腰を下ろしてゐる處へと導かれて行った。元來ミランダ姫は自分の父親の外には男子といふものを見た事が無かつたのだ。

プロスペロは零ねた、「ミランダ、お前向ふに見えるあれは何 だか解るかね。」

「あ、御父様、たしかあれは妖精といふものでせう。まあ、彼 ちこっち 方此方を見廻はしてゐること。ほんとに御父様綺麗なものです ね。妖精ぢや無いのですか。」とミランダは不思議でならない といふ風で尋ねた。

sea-nymphs = sea fairies 海の精。 his knell の his は thy father's.

"No, girl," answered her father: "it eats, and sleeps, and has senses such as we have. This young man you see was in the ship. He is somewhat altered by grief, or you might call him a handsome person. He has lost his companions, and is wandering about to find them."

Miranda, who thought all men had grave faces and gray beards like her father, was delighted with the appearance of this beautiful young prince; and Ferdinand, seeing such a lovely maiden in this desert place, and from the strange sounds he had heard, expecting nothing but wonders thought he was upon an enchanted island, and that Miranda, was the goddess of the place, and as such he began to address her.

11. She timidly answered, she was no goddess, but a simple maid, and was going to give him an account of herself, when Prospero interrupted her. He was well pleased to find they admired each other, for he plainly perceived they had (as we say) fallen in love at first sight: but to try Ferdinand's constancy, he resolved to throw some difficulties in their way: therefore advancing

10. as such = as the goddess of the island, 島の女神(なし)の積りで。

父「い」や、あれは物を食ひもすれば寝もするのだ、予たちと同じ様に目耳等五官を備へてゐるのだ。そらその若者は船にゐた者ぢや。憂き目に逢うて幾らか變つては居るが、さもなきやお前が見て美男子だと云ふぢやらうに。仲間の者にはぐれて捜し廻つて居るのだ。

ミランダは男と云ふものはすべて自分の父の様に厳しい類をして白髪交りの髯を生やしてゐるものと思つて居たので、此の美しい若王子の姿を見て喜んだ。ファーディナンドも此の住む人もない處に此んな愛らしい乙女の居るのを見、且つは聞き馴れぬ音を耳にして、たゞもう不思議な事ばかりと思ひつ」、此れは何處ぞの魔の島へでも來たのではあるまいか、あのミララダ姫といふのは此の島の女神ではあるまいかなど」思うて、其の積りで姫に話し掛けて見た。

11. 姫は自分が女神など云ふものではなく、たじの乙女に過ぎない由を面差げな容子で答へた、そして自分の身の上話をしようとすると、父のプロスペロが之を遮つた。父は二人が互に賞で合うて居るのを誠に嬉しく思つた、明かに二人は一目見て吾々の言葉で云ふと互に戀し合つてしまつたのだと見たからである。併しファーディナンドに實意があるかどうかを試す為め二人に難儀をかけて見てやらうと決心した。そこで前へ進み出て

<sup>11.</sup> constancy 寅意、一時の浮氣心でない事。

forward, he addressed the prince with a stern air, telling him, he came to the island as a spy, to take it from him who was the lord of it. "Follow me," said he, "I will the you neck and feet together. You shall drink sea-water; shell-fish, withered roots, and husks of acorns shall be your food." "No," said Ferdinand, "I will resist such entertainment, till I see a more powerful enemy," and drew his sword; but Prospero, waving his magic wand, fixed him to the spot where he stood so that he had no power to move.

12. Miranda hung upon her father, saying, "Why are you so ungentle? Have pity, sir; I will be his surety. This is the second man I ever saw, and to me he seems a true one."

"Silence," said the father; "one word more will make me chide you, girl! What! an advocate for an impostor! You think there are no more such fine men, having seen only him and Caliban. I tell you, foolish girl, most men as far excel this, as he does Caliban."

職然たる態度で王子に對ひ、汝は此の島の主たる自分の手より
此島を奪はん爲めに間諜として此の島へ來たのであらう、とい
うて、更に語を續いで、「予に追いて來い、汝の頸と足とを一緒
に括つてやる。潮水を飲ませてやらう。食物は貝類と乾燥びた
根や橡の設だ」と云うた。ファーディナンドは「いや、そんな待
遇は受けん、もつと偉い敵にでも逢は『格別だが」と云うて剣
を抜き放つた。併しプロスペロは魔法杖を揮つて共處に立つた
虚身動きも出來ぬ様にファーディナンドを呪縛してしまつた。

12. ミランダ姫は父に取り縋つて、「なぜ その様に手 荒な事をなされます。可哀相ぢやありまませんか。わたしが證人になります。わたしが男に會うたのは此の人が二人目なのです、真質な御方の様ですわ。」

父「默つて居なさい、以上一言でも云うたら叱りますよ。何 だ、騙賊の辯護などして。お前はこの男とカリバンの外見た事 が無いのでこれほどの好い男はまたとないと思うてゐるのだ な。阿呆め、此奴がカリバンより増しであると同様大抵の男は 此奴より遙か増しなのだ。」此の言葉は娘の心が堅いかどうかを

till I see a more powerful enemy (than you). もつと手剛い敵に 逢ふ(たら或は屈するかも知れぬが夫れ)までは。

fixed him to the spot 魘法の力で共物に抑へつけた、呪縛して仕舞った。

<sup>12.</sup> One word more will make me chide you. = If you say one word more, I shall chide you.

This he said to prove his daughter's constancy; and she replied, "My affections are most humble. I have no wish to see a goodlier man."

"Come on, young man," said Prospero to the prince;
you have no power to disobey me."

"I have not indeed," answered Ferdinand; and not knowing that it was by magic he was deprived of all power of resistance, he was astonished to find himself so strangely compelled to follow Prospero: looking back on Miranda as long as he could see her, he said, as he went after Prospero into the cave, "My spirits are all bound up, as if I were in a dream; but this man's threats, and the weakness which I feel, would seem light to me if from my prison I might once a day behold this fair maid."

13. Prospero kept Ferdinand not long confined within the cell: he soon brought out his prisoner, and set him a severe task to perform, taking care to let his daughter know the hard labor he had imposed on him, and then pretending to go into his study, he secretly watched them both.

Prospero had commanded Ferdinand to pile up some

確かめる爲めに云うたのだ。そこで娘は、「妾の愛情は極く謙遜 なのです。此の人より立派な男を見度いなどとは思ひませぬ。」 プロスペロは王子に向ひ、「さあ、來い、若者、お前は予に 抵抗ふ力はないぞ。」

「成程、さうだ」とファーディナンドは答へたが、魔術の為に抵抗の力を全く奪はれたのだとは知らず、自分が不思議にもプロスペロの後を追うて行かねばならぬやうせられたのを見て驚いた。プロスペロの後に従つて洞窟の中へ入つて行き乍らも、見える限りはミランダの方を振りかへり、「まるで夢を見て居るやうに我と我が心が自由にならぬ、だが此の男の脅嚇もおれの力の抜けたのもはや何とも思はぬ、もし牢屋の窓から日に一度でもあの娘の綺麗な顔を見る事が出來るなら。」と云うた。

13. プロスペロは王子をいつ迄も穴倉の中へ入れては置かなかつた。間もなく此の囚人を引出して苦しい仕事をやらせ、 娘には王子に苦役を課した事を知らせる様に取り計らつて置いて、自分は書斎へはひる振りをして密かに二人を見守つた。

プロスペロはファーディナンドに重い丸太を積み上げる様に云 ひつけた。

a goodlier man 此のお方より立派な人。

I have not indeed=I have no power to disobey you indeed.

would seem light to me. 輕く見える。何とも思はのであらう。
13. taking care to let his daughter know 娘に解らせる様心を用い
て。

heavy logs of wood. Kings' sons not being much used to laborious work, Miranda soon after found her lover almost dying with fatigue. "Alas!" said she, "do not work so hard; my father is at his studies, he is safe for these three hours; pray rest yourself."

"O my dear lady," said Ferdinand, "I dare not. I must finish my task before I take my rest."

"If you will sit down," said Miranda, "I will carry your logs the while." But this Ferdinand would by no means agree to. Instead of a help Miranda became a hindrance, for they began a long conversation, so that the business of log-carrying went on very slowly.

Prospero, who had enjoined Ferdinand this task merely as a trial of his love, was not at his books, as his daughter supposed, but was standing by them invisible, to overhear what they said.

Ferdinand inquired her name, which she told, saying it was against her father's express command she did so.

14. Prospero only smiled at this first instance of his

やんごとなき王子たちが苦役に多く慣れて居る筈もなく、ミ ランダはやがて間もなく我が思ふ人の疲勞の爲め殆んど絶え絶 えになつて居るのを見出した。「まあ、そんなにお働きなされ ますな。父はいろいろ調べものをして居ります。此處三時間ば かりは大丈夫ですの。どうぞお休みなされませ。」

ファーディナンド「やあお嬢さん、休む譯に参りません。仕事 をして仕舞つてからでないと休めませんのです。」

ミランダは「休んで居らつしやれば其間にその丸太を運んで上げませう」と云うたが、此れにはファーディナンドがどうしても承知しなかつた。ミランダの手出しは助けにはならず、却つて邪魔になつた、と云ふのは二人とも永々と話をし始めて、丸太運びの仕事は中々進まなかつたからである。

プロスペロは元々單にファーディナンドの愛情を試す積りで此 仕事を命じたので、娘の想像した様に書物を調べて居たのでは なく、見えぬ様に二人の側に立つて彼等の云ふ處を立聽したの である。

ファーディナンドは娘に名を尋ねた、娘は父から明かに云うてはならぬと禁じられたのに背く譯だがと前置きして名乗りをした。

14. プロスペロは自分が魔術を用いた爲めに娘が斯くも遂に against her father's express command 父の明かに禁じた言葉に背く。

found her lover almost dying with fatigue. 燃入が疲労の為め殆ど氣も絶えだえになつてゐるのを見出した。

daughter's disobedience, for having by his magic art caused his daughter to fall in love so suddenly, he was not angry that she showed her love by forgetting to obey his commands. And he listened well pleased to a long speech of Ferdinand's, in which he professed to love her above all the ladies he ever saw.

In answer to his praises of her beauty, which he said exceeded all the women in the world, she replied, "I do not remember the face of any woman, nor have I seen any more men than you, my good friend, and my dear father. How features are abroad, I know not; but, believe me, sir, I would not wish any companion in the world but you, nor can my imagination form any shape but yours that I could like. But, sir, I fear I talk to you too freely, and my father's precepts I forget."

At this Prospero smiled, and nodded his head, as much as to say, "This goes on exactly as I could wish; my girl will be queen of Naples."

糖に陷つたのであるから、今度始めて自分の命に背いた事を唯 微笑んで見る許りで、命に従ふ事を忘れて愛情を示した娘の仕 打ちを怒りはしなかつた。そしてファーディナンドが永々と述べ て、是れまでに逢うたどの婦人よりも彼女を愛すると公言した のを誠に喜んで聽いたのである。

世の中のどの婦人にも増して縹緻がよいと褒められたのに答って娘は云うた、「妾は女の顔といふものを覺えて居ません、また男としては妾と仲善しの貴方と大事なお父様との外にはだれも見た事がありません。餘所では男がどの様な顔をして居るやら知りませぬ。けれども妾を信じて下さい、妾は此の世で貴方より外の男に連れ添ひ度いとは思ひませぬし、また妾の好きな男の姿は貴方より外にどの様なものを想像して見る事は出來ません。でも此んなに云うて餘りはしたない、父の訓令も忘れて仕舞つた。」

之を聞いてプロスペロは微笑んで點頭き、「此れで丁度予の思 ふ通りに行つてゐる。娘はネーブルスの主妃になれるぢやろ。」 と云はぬ許りであつた。

<sup>14.</sup> he listened well pleased to 誠に心嬉しく聴いた。 How features are abroad 餘所(よそ)で人がどう云ふ鱝をしてゐ

るかっ

I would not wish any companion.... but you 貴方の外に連れ添ふ 男を欲しいと思ひませぬ。

but yours = except your shape 費方の姿より外には。

nodded his head, as much as to say. と云はの許りに(我意を得たりと)點頭(ラなづ)いた。

And then Ferdinand, in another fine long speech (for young princes speak in courtly phrases), told the innocent Miranda he was heir to the crown of Naples, and that she should be his queen.

"Ah! sir," said she, "I am a fool to weep at what I am glad of. I will answer you in plain and holy innocence. I am your wife if you will marry me."

15. Prospero prevented Ferdinand's thanks by appearing visible before them.

"Fear nothing, my child," said he; "I have overheard, and approve of all you have said. And, Ferdinand, if I have too severely used you, I will make you rich amends, by giving you my daughter. All your vexations were but trials of your love, and you have nobly stood the test. Then as my gift, which your true love has worthily purchased, take my daughter, and do not smile that I boast she is above all praise." He then, telling them that he had business which required his presence, desired they would sit down and talk

そこでまたファーディナンドは更に永々と優しい言葉で――若 き王子はすべて雅た言葉を用いるもので――純なミランダ姫に 彼がネーブルスの王位を受くべき世繼であること、従つて彼女 は王妃になる譯だと告げた。

娘「まあ貴方、妾はうつけ者よ、嬉しい事に涙が出ますの。妾 は飾らぬ聖い初心な氣持でお答へ致しますが、妾とお婚禮をし て下されば貴方の妻となります。」

15. プロスペロはファーディナンドが感謝の言葉を述べようとすると二人の前にぬつと現はれて遮つた。

プロスペロ「何も恐がる事はない。娘、予は立聴きしてお前の 云うた事は皆なよいと思つてゐる。又ファーディナンド、予が貴 方を餘り辛い扱ひをしたのなら娘を献じて立派に其の償ひはす る積りぢや。貴方をいろいろと苦しめたのも皆貴方の愛情如何 を試すために過ぎなかつた、貴方は立派に其の試錬に堪へなされた。其れで眞實の愛を以て正當に購ひ得た賜物として予の娘 を受けて貰ひ度い、娘はどの様に褒めても褒め足らぬ女ぢやと 親の予が誇るのを笑うて下さるな。」斯う云うて二人に自分が 出なければならぬ用事があるによつて腰を下して予の歸へる迄

in courtly phrases 優雅な言葉遣いて。 holy 神明に耻ちない。

<sup>15.</sup> All your vexations 貴方が色々苦んだ事は。
you have stood the test 其の試練に堪へなされた。
she is above all praise. どんなに褒めても褒め足らの女だ。

together till he returned; and this command Miranda seemed not at all disposed to disobey.

When Prospero left them, he called his spirit Ariel, who quickly appeared before him, eager to relate what he had done with Prospero's brother and the king of Naples. Ariel said he had left them almost out of their senses with fear, at the strange things he had caused them to see and hear. When fatigued with wandering about, and famished for want of food, he had suddenly set before them a delicious banquet, and then, just as they were going to eat, he appeared visible before them in the shape of a harpy, a voracious monster with wings, and the feast vanished away. Then, to their atter amazement, this seeming harpy spoke to them, reminding them of their cruelty in driving Prospero from his dukedom, and leaving him and his infant daughter to perish in the sea; saying, that for this cause these terrors were suffered to afflict them.

16. The king of Naples, and Antonio the false

一緒に話をしなさるがよいと云うた。此の命令にはミランダは 少しも背き度い氣持にならぬ様子であつた。

プロスペロは二人を残して置いて妖精のエイリエルを呼んだ、すると直ぐにエイリエルは主人の前に現はれて、プロスペロの弟とネーブルスの王に對して行うた事の次第を頻に述べた、彼の力で不思議な物を見させ聞かせたので彼等を殆んど五官の識を失はしむる程に恐ろしがらせた由を述べた。二人の者が徘徊ひ歩いて疲れ食物が無くて飢えてゐる時に、遠かに二人にお美味さうな御馳走を列べた、やがて二人が食べか」らうとすると、エイリエルが翼のある貪懲な鳥身女面の怪物の姿となって二人の前に立ち現はれた。

さうすると御馳走は消えて無くなつてしまつた、其時に二人とも全く驚き果てたのであるが、此の怪鳥と見えた物が二人に話しかけて、プロスペロを公領國より逐ひ出して、幼き娘と共に亡き者にせんと彼等を海上に捨てた二人の非人情な行為を思ひ出させ、其の罪の爲めに斯うした恐ろしい事どもに苦められるのだと云ひ聞かせたのであつた。

16. ネーブルス王と不實な弟アントニオとは、プロスペロ

not at all disposed to disobey 少しも背かうと云ふ氣になられ、 disposed = inclined.

almost out of their sense; 殆ど五官の識が無くなる程。

a harpy 鳥身女面の怪物。

brother, repented the injustice they had done to Prospero; and Ariel told his master he was certain their penitence was sincere, and that he, though a spirit, could no but pity them.

"Then bring them hither, Ariel," said Prospero:

"if you, who are but a spirit, feel for their distress,
shall not I, who am a human being like themselves,
have compassion on them? Bring them quickly, my
dainty Ariel."

Ariel soon returned with the king, Antonio, and old Gonzalo in their train, who had followed him wondering at the wild music he played in the air to draw them on to his master's presence. This Gonzalo was the same who had so kindly provided Prospero formerly with books and provisions, when his wicked brother left him, as he thought, to perish in an open boat in the sea.

Grief and terror had so stupefied their senses, that

に不正を加へた事を後悔したのである。そこでエイリェルは二人の懺悔は眞實から出たものと堅く信する事、自分は妖精であるのだが、二人を憐れと思はずに居られね事などを主人プロスペロに告げた。

プロスペロは「それではその二人を此方へ連れておいで、 エイリヱル。妖精ふぜいのお前があれ等の難儀に同情を寄せる とすれば、彼等と同様人間である予が同情を寄せずに居られよ うか。直ぐに二人を連れて來てくれ、愛い奴、」と云うた。

マイリエルは早速に王とアント=オ並に年寄りのゴンザ,ロとを引具して戻つて來た、彼等はマイリエルが一同を主人プロスペロの面前へ引つけ様と空中に奏でな音樂を聴いて驚き怪しみながらマイリエルの後を追い起來たのであつた。此のゴンザ,ロなる者は性質の悪い弟アント=オが兄を死ねであらうと考へて帆も帆橋もない舟に乘せて海上に棄てた時親切にも書物や食料などを舟に積み載せてくれたあの人物であつた。

彼等はプロスペロを見ても解らなかつた程に、悲みや恐れの

<sup>16.</sup> though a spirit=though he was a spirit 人情を解せに妖精ふぜい であるが。

compassion = pity.

wild music 此世のものなられ不思議な音樂。

in an open boat = in a boat without tackle, sail or mast. 何にもないからんとした船っ

stupefed their senses 五官の働きを鈍らして仕舞つた。